
闇色の陽炎

俊鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇色の陽炎

【Nコード】

N8136Q

【作者名】

俊鴉

【あらすじ】

あるところに一人のハンターがいた。
彼はある飛竜を追っていた。
思い出を焼いた“アイツ”を。

河川都市フルスを舞台に数人のハンター達を描く、モンスターハンターポータブル2ndをベースにしたオリジナル二次創作小説

。（ただしポケケ村は出てこないという）
GREEに投稿したものを転載しました。

Prologue

何年前。

まだ新米ハンターだった俺が初級クエストに手を付け始めた頃だった。

雪山でのブランゴ狩りだとか、森丘でのキノコ採取だとか。

今になってみれば欠伸が出るくらい退屈なクエストなのだが、あの頃の俺にとってはその全てが新鮮で、全てが興奮するものだった。

夢中で剣を振るい、夢中で獲物を追っかけ回して。

そして忘れもしない、茹だるような砂漠でのガレオス討伐クエスト。逃げるガレオスを追って、灼熱の砂丘の地平線に目を凝らしたあの時。

俺の人生で、最も感動できた瞬間だった。

ゆったりと力強く振られる太い尻尾。

彫刻の様に、太い筋肉の筋が幾重にも分かる強靱な足。

高高度・長時間の飛行を可能とする巨大で雄々しい双翼。

如何なる攻撃も防げそうな硬質な甲殻に守られた体躯。

そして刃向かう者全てを砕き、引き裂く為にある顎と爪牙。

初めて、自然の中に生きる飛竜を見た。

王宮という狭すぎる籠の中でその身を縮こまらせているペットの飛竜などではない。

空を、地を支配する本来あるべき姿。

雄火竜・リオレウス。

あの時見たリオレウスは、図鑑や新聞の数cm四方の写真で見る姿と決定的に違う特徴を有していたが、自然を配下に置く飛竜を目にしたあの時の俺にとってそれは大して重大な問題ではなかった。

だが今考えてみれば、それはかなり注目すべき特徴だったのだろう。

その雄火竜の体色は、“黒”だった。

そう、忘れもしない、漆黒。

興奮しながらクエストから村に帰ってきて俺が目にしたのは、
非現実的な光景。

手にした片手剣が手から滑り落ちて地に跳ね、重い金属音をたてた。

生物が燃える臭い。

瓦礫が燻る虚しい音。

村には人も建物も無かった。

あるのは焼け焦げた死体と、燃え果てて黒い瓦礫となった村の建物。
狩りに行っていた一時間半で、生まれ育った村は黒く燃え尽き、灰
となっていた。

真っ黒な光景を見ながら、真っ白になった頭に響くのはただ一つ。

遙か彼方の空高くから響く、リオレウスの咆哮だけだった。

「くあゝ……」

欠伸と伸びを同時にすると、あちこちの関節がパキパキと音をたてた。

馬に比べて足の遅い、アプトノスが牽く竜車に揺られること五時間。既に太陽は頭上を通り過ぎ、時刻は昼過ぎになっていた。

初めは武器や防具の手入れで暇を潰していたが、さして広くない車内じゃできることも限られる。

かなりの時間、暇を持て余すハメになってしまっていた。

(…積載量だけで選ぶんじゃなかった)

後ろの客の、そんな思考を読んだのか初老の御者が振り向いて声を掛けた。

「お客さん、出身は何処で？」

雑談は暇潰しにはちょうどいいかもしれないが、話題があまり好ましくない。

「……ティディエン」

「はて……どこかできいたことがあるような気がしますな」

「気のせいだろう。小さな村だったから」

そしてもう存在しないのだから。

アプトノスの足音と車輪の転がる音、車が軋む音が控え目に2人の間の沈黙を埋めていった。

……それからどれほどの時間が流れたか分からない。

竜車は密林の狭い街道に入って30分くらい進んでいた。

「……見えましたな。」

御者が不意に言葉を発した。

それにつられて前を見ると、広がっているのはやはり密林。

「……………?」

「……………横です」

ああ、と呟いて前に向いた視線を左にスライドさせる。

竜車はちょうど高地の縁を進んでいて、眼下には広大な平野が見渡せる。

平野には大河が緩やかに流れていて、その河を挟むようにして一つの大きな街が形成されていた。

「河川都市フルス。ここら一帯では最も大きな都市ですな」
周囲を堅個な防壁で囲まれた都市。

重厚な石造りの建物が並ぶ街並みの中に、一際目を引く巨大な尖塔の群が。

(シユリフトトゥルム王立図書館……やっと着いたか)

街並みをぼっーと見つめていると、御者が突然声を上げた。

「あれは……!」

「……?」

御者は振り向いている。

だが視線は空に。

自分達が進んできた道の上空に向いているのだ。

何事かと窓から顔を出して後方の空を見上げると……

「……発煙弾?」

「……別ルートを行っている電車の緊急信号です」

そう言うと、御者は慌てた様子でアプトノスを操り、竜車を反転させ始めた。

「おいおい、なんで引き返すんだ？」

「緊急信号が上がったら駆け付けけるのが竜車連合会の決まりでして……」

そう言いって道を引き返しながら、御者は古ぼけた外套のポケットから何かを取り出して火を点ける。

数秒後、御者の手から何かが高音を出しながら天高く飛び出していた。

(呼応信号…… 本当に行く気か)

御者も仲間が心配だろうし、困っている竜車を見捨てて街に行くのも後味が悪い。

「……緊急信号上げるのってどんな緊急事態なんだ？」

「大体は車が泥濘にはまったとか、横転してしまったとか。ただここは密林ですから……」

「ですから？」

「もしかしたらモンスターに襲われたのやもしれません」

「……アンタ戦えるのか？」

御者は自信なさげに、外套の内側から粗末な拳銃を取り出して見せた。

六連発の中折れ式回転弾倉拳銃。

その細身の銃身からも、威力は大きいとは言えなさそうだ。

「……ランポスぐらいなら何とかありません。お客さんがハンターだからといって頼るような……」

更に言葉を続けようとした時、密林に鳥のような甲高い鳴き声が木霊した。

アプトノスが御者に危険を報せるかのように低く鳴く。

ランポスのような小型鳥竜種や、まして野鳥の鳴き声ではない。

もっと巨大な体を持つ……例えば飛竜。

しばし、間。

「……運賃を三割引きいたしましょう」

「遅れた分も含めて五割引」

「……命に比べたら安いものです」

御者は引きつった笑顔でそう言って、アプトノスを急かし始める。

車の中では戦いの準備が始まった。

「へえ、お客さんハンターなんですか」

「まだまだ駆け出しなただけだね」

暖かな日差しが降り注ぐ昼下がり。

一台の竜車が密林の街道にゆっくりと轍を刻んでいく。

「でもハンターなんて尊敬しちゃうな。でっかい牙獣や火を吹く飛竜と戦うんでしょ？」

前でアプトノスに指示を出しながら話している御者は若く、年齢が近いこともあってか先ほどから会話が弾む。

お世辞にも乗り心地がいいとは言い難い竜車での長距離移動によるストレスも、少しは和らぐというものだ。

「私なんかまだまだよ。この前、やっとドスギアノスを倒せたくらいで……」

「ドスギアノスって、ギアノスの群のリーダーでしょう？　すごいじゃないですか！」

心底感心したような声で言われるので、少し気恥ずかしいくらいだ。

でも嬉しくもあるのは否定しない。

「そつだお客さん、フルスにはどんなご用なんですか？」

「ん〜……故郷の村でも充分に狩りはできるんだけど……なんていうかな、親元から離れたかったのかな」

飛竜の研究所だった実家にいたら学者にでもされかねない。

それよりも、命を賭して巨大なモンスターと渡り合うハンターの方が自分にとって魅力的だったのだ。

「厳しいんですか？ 親御さんは……」

「……むしろ逆かな。過保護で過保護で。ハンターになるのだって半ば強引になっちゃったからね〜……」

「そんな歳で……親御さんも心配したでしょう？」

「……そんな歳？」

なにか引つかかる言い方だ。

「え？お客さん、幾つで……？」

（ああ、またこのパターン……）

小さい頃からのことで慣れてはいるが、それでもちよっと悔しい。

そしていつものように尋ねてみる。

「……私、幾つに見える？」

「んーと、そうですねえ……さしずめ、16かじゅっ……」

「はずれっー!」

自分のオーバーな否定に、御者が驚いて振り返った。

「そんなー! それより下なんですか!? 最年少ハンターなんじや……」

「それもハズレっ!! 今年で22ですっ!」

「嘘だあっ!」

アプトノスが背後で賑やかに繰り広げられる問答に、迷惑そうに低く鳴いた。

「だってどう見たって二十歳超えてるようには見えませんよ!」?

喜ぶべきか、悲しむべきなのか。

確かに、顔や背丈から判断したらそう見られてもしょうがない。

そっぴい顔で、そっぴい身長なのだから。

「コンプレックスなのよね……どこいっても子供扱いされるし……」

「……………」

「……ん？ どうしたの？」

ついさっきまで賑やかだった話相手の突然の沈黙。

御者はいつの間にか前に向き直っていて、というより前方を凝視していた。

そういえば、いつの間にかアプトノスも歩みを止めている。

やがて御者は恐怖のあまり“それ”から目を離せないまま、震える指で進路上の一点を指差した。

よく目を凝らすと、色とりどりの植物が生い茂る密林の中に、際立って派手な色彩の“それ”がいた。

巨大な黄色いクチバシ、スリムな体躯、背中を重点的に覆う甲殻、黄色い翼膜を持つ翼、よくしなる短めの尻尾、淡い赤色の体色。

そしてその独特な顔つき。

そのまま動かなければ、愛らしいとも言えなくもない“それ”。

だがそれを目の当たりにした御者と自分ヒアプトノスは凍り付いたまま動けなくなつた。

“それ”が何であるか、そして人に対してどんな被害をもたらすかを知っているからだ。

怪鳥・イヤンクック。

リオレウスなどのような飛竜種ではなくランポス系と同じ鳥竜種にカテゴライズされている大型モンスターだが、その強さはドスギアノスなどの一段上をいく。

もちろん、まだ駆け出しの自分が倒せるような相手ではない。

対するイヤンクックはこちらに気付く様子もなく、呑気に欠伸をしている。

しかしこちらが少しでも動けば、すぐに気付いて襲ってくるだろう。

「ど、どうしましょう……!?!」

我を取り戻した御者が慌てて小声で尋ねてくる。

「とりあえず応援を呼ばなきゃ……!」

「それなら緊急用の信号弾が……」

そう言って御者は30cmくらいの紙製の円筒を取り出した。

「それで……応援が来るまではどのくらいかかるの?」

「た、たぶん……早くても10分はかかるかと……」

(10分、か……)

しばらく考え、決意した。

「応援が来るまで……私が時間を稼ぐ！」

「そんな！ 無茶ですよ……！！！」

「私だつて一端のハンター……イャンクック一匹足止めするくらいならできる！」

そう言つて、後ろの荷物からいくつかの物を引っ張り出した。

「じゃあ頼みましたよ……！！！」

御者も意を決したようで、信号弾を空に向けて構えた。

こちらは自分の得物を握り締める。

防具を着けている暇は無い。

(なんとか盾と武器だけで乗り切ろう……)

「い……いきますよ……！！！」

「……オ、オツケー！」

客室から静かに降り、竜車の前に立ち、未だに安穩と密林を散歩をするイャンクックを見据える。

「……発射……！！！」

乾いた破裂音と共に信号弾が高々と空に飛び出していった。

突然の音にイヤンクックは飛び上がって驚き、しかしすぐにこちらを敵と認める。

トサカが全開になり、視線が合った。

「き………来なさい!!」

こうして、初の大型モンスター狩りが始まった。

「はっ……はっ……はっ……」

右手で握る片手剣と、左手で構える盾がやけに重く感じる。

右腕には、受け身をとった際に石にぶつかってできた裂傷。

左上腕には尻尾の一撃を盾で受け流し切れずに攻撃がヒットした時にできたアザ。

右腕から血が止めどなく流れ出るせいで、さつきから意識が朦朧と
してきている。

(こんな……キツイなんて……)

目の前にいるイヤンクックと相対してから約5分。

斬っても斬っても倒れない相手に、時間を稼ぐどころかこちらの命
が危ない状況に陥っていた。

ちなみに竜車は避難させてあるが、自分が倒されれば安全は保障さ
れない。

と、翼を広げたイヤンクックがもう何度目かの突撃態勢に入った。

イヤンクックは鳥竜独特の高い鳴き声をあげて、突進を開始。

接敵、30m。

「…………っは！」

すんでのところで右に横っ飛びして突進を回避。

右腕の傷に鋭い痛みが走るが、弱音は吐いてられない。

素早く立ち上がって振り返ると、勢い余ってイヤンクックはうつ伏せになってこけてしまっていた。

(チャンス……!!)

条件反射的にイヤンクックの後ろ姿に向けて駆け出す。

防具を着けていない分、フットワークが軽いのが救いか。

転んだイヤンクックはまだ、脚をばたつかせている。

前脚が翼と一体化する進化を経たが故、簡単には立ち上がれないようだ。

あと5m。

水気の多い地面を蹴り、跳躍。

前進力を伴った跳躍は一気にイヤンクックとの距離を縮めた。

ジャンプの最高到達点で片手剣を大上段に振りかぶる。

必殺……とまではいかないが、狙う所を間違えなければ、重傷を負わせることができる一撃。

……と、なるはずだった。

予期せぬ誤算。

そしてそれに気付く前に、空中にあった体が横殴りの衝撃に襲われた。

瞬間、意識が飛び、あらゆる感覚が奪われる。

一瞬の後に気付くと、自分は地面に倒れ伏していた。

口の中は血の匂いで満たされ、頭がクラクラする。

吐き気と耳鳴り、全身の痛み。

(何が起った……て……?)

体を起こそうとすると、支えにした左腕を耐え難い痛みが襲い、思わず悲鳴をあげて再び地面に倒れる。

さっきまでのアザの痛さじゃない。

どうやら腕の骨にヒビが入ったか、折れたかしたらしい。

立つのを諦めると、ゴロリと転がって仰向けの姿勢になる。

頭だけを起こして周囲を見渡すと、一番見たくない相手と目が合っ

た。

イヤンクックは今や完全に立ち上がり、ノッシノッシと、ゆっくりこちらに歩み寄ってきていた。

その背後では勝ち誇った気分を体現するかのように、長い尻尾が悠然と左右に振られている。

そして気付いた。

(しっば……そっか……尻尾か……)

おそらく跳躍してイヤンクックに斬りかかろうとした瞬間、振られた尻尾に弾き飛ばされたのだろう。

次は気をつけなきゃ、と思いつつもその次のチャンスは与えられそうにない。

せめて迎撃の準備はしなければと右手の剣を構えようとし、また気付いた。

「そんな……！」

右手に剣の感触が、無い。

慌てて右手を見るが、やはり無かった。

そして再びイヤンクックを見ると、その発達した脚の爪の下に、見慣れた片手剣の柄がチラリと見えた。

悔しさに右手を握ると、手のひらが何かで濡れている。

どうやら、右腕の裂傷から流れ出た血が腕を伝って右手に至り、知らぬ間に手のひらを濡らしていたらしい。

おそらく弾き飛ばされた時に手から滑り落ちたのだろう。

イヤンクツクは既に目と鼻の先に迫っている。

武器は無い。

盾を構える左腕は骨折。

助けはまだ来ない。

失血と衝撃で意識が薄れていく。

満身創痍、万事休す。

(うそ……こんなところで……！)

次第に視界が霞んでいく中、最後に見たのはブレスを吐こうと頭をもたげた怪鳥の勝ち誇った顔だった。

車を牽くアプトノスが全力で　速いとは言い難いが　走る。

そして後部の客室から何者かが飛び降り、竜車を追い抜いていった。

「……とんだ厄介事に巻き込まれたな」

装備は身に着けず、巨大な骨素材の大剣一振りのみを肩に携えて密林を疾走する。

足の遅い竜車に乗ってでは助かるものも助からない。

「引き受けたからには……きっちり仕事をしなくちゃな、と？」

進行方向の先から小さな悲鳴が聞こえた。

女だ。

そしてあの独特の甲高い鳴き声も。

「やっぱりイヤンクックか」

速度を上げる。

目の前を遮る背の高いシダ植物を突き抜けた時、目標を視界に捉えた。

黄色いクチバシが大部分を占めるそのコミカルな頭は、今まさに振り上げられ、ブレスを吐こうとしていた。

その先の地面には赤髪の女が1人、倒れている。

防具は着けていない。

こちらとの距離は2、30m。

「……よし」

状況を理解すると、とりあえずポケットに突っ込んできた球状の物体を全力でイヤンクックに投擲した。

直線的な軌道で投げられたそれは、見事にイヤンクックの側頭部に命中し、攻撃を邪魔されたイヤンクックがこちらを睨んだ瞬間。

球から目を貫くような光が発せられた。

至近距離で炸裂した強光を喰らったイヤンクックは、凄まじい光量に目が眩んだのかブルブルと頭を振っている。

その隙に急接近。

背中から大剣を抜き放ち、下段に構えた。

地をこする大剣の切っ先が背の低い草の茎を寸断し、葉が散る。

「運賃半額分は働かせてもらっぞ……バカ面飛竜」

振り上げられた大剣の軌跡を、怪鳥の血が彩った。

「ん……ふ……？」

女が目を開くと、ぼやけた視界に竜車の木の客室と御者が見えた。

断続的な振動で、竜車が進んでいることが分かる。

どうやら自分は客車の椅子に座っているようだ。

（私は……？イヤンクックと鬨って……？）

朦朧とする頭の中の霧がかった記憶を掘り返していると、隣から聞き慣れない声がした。

「目、覚めたか？お嬢さん」

「え……？」

突然の呼びかけに慌てて右隣を見ようと身を捻ると、体のあちこちが悲鳴をあげた。

「……痛っ！！」

よく見ると、自分の体のあちこちには包帯が巻かれ、湿布が貼られている。

左手に関しては副木が当てられて、否が応にも骨折したことを思い出させられた。

「左腕の打撲と骨折、右腕の裂傷、あとはあちこちのアザ。あんな装備で生きてただけマシだな」

今度は体を痛めないように右隣に座する声の主を見た。

黒髪黒眼。

その横顔は喜怒哀楽のいずれも表していない、眠たげな表情。

「……えっと、あなたは？」

「レイヴン＝ウォルク。アンタを殺しかけてたイヤンクツクを昇天させてやったお人好し」

「わ、私、シエルクです！ シエルク＝エイタワーズ！ あの、助けてくださってありがとうございますとうございまして！」

そこで黒髪の男 レイヴンはチラリとこちらの風体の顔立ちを一

警すると……

「フルスの子供か？ あそこはガキが剣持ってハンターごっこする場所じゃない」

「……ごっこじゃないですっ！！」

「なお悪いな。まったく……親はどういう教育を……竜車が見付けてくれたから良かったもの……」

どうやらレイヴンの頭の中では「フルスの子供が密林でハンターごっこをしていてイャンクックに襲われた」という結論に達しているようだ。

「私、リリアから来たハンターです！！竜車がイャンクックに襲われて……！！」

そこで、レイヴンは初めてこちらをしっかりと見た。

気だるそうな雰囲気はそのままに、訝しげな視線を送ってくる。

「……その、乗ってた竜車は？ 辺りには見当たらなかったぞ？」

「それは……」

そつえばはどうしたのだろうか？

街道から外れた小径に避難してもらい、それきりだ。

救いと説明を求めるように、今乗っている竜車の御者の背中を見た。

視線に気付いた初老の御者が至極柔らかかな物言いで説明する。

「……彼には先にフルスに行つて、ギルドの者を手配するようにしてもらいました。翼が斬り飛ばされた怪鳥の骸が転がっているのは、他の竜車や馬車も安心して進めません故……」

シエルクはほつとして、「ほらっ！」と言わんばかりにレイヴンを見る。

レイヴンは視線を前に戻し、また座席に深く腰掛ける。

「……一応訊くが、歳は？」

「今年で22!!子供じゃないです!!」

「ハンター歴は？」

「まだ……2年ですけど……」

レイヴンがおもむろに、後ろの積み荷スペースから何かを引っ張り出す。

鉄製の片手剣だ。

血で汚れた柄で、自分の持ち物であったことが分かる。

だがその剣は今や、真ん中辺りで刃が湾曲してしまっていた。

戦いの最中にイヤンクックに踏まれたことを思い出す。

レイヴンが曲がった片手剣をマジマジと見つめて呟いた。

「戦闘中に武器を手放すとはな……ハンター向いてないんじゃないか？」

レイヴンの言い放った台詞に言い返す言葉が見つからず、唇を噛み締めた。

そんなつもりは無いのに、何故か涙まで目に溢れてくる。

確かに独学だけでハンターを続けてきて、成長がみられないのは事実だ。

2年も経ってイヤンクック一頭倒せないのではハンターを名乗る資格は無いのかもしれない。

レイヴンはチラリとこちらを見ると僅かに困ったような表情を見せ、片手剣を後ろの積み荷の山に返す。

「……ん、まあ。なんだ。集会所で誰か手慣れたハンターに付いて技術を磨くなり、訓練所で教官に教えてもらうなりすれば上達するさ」

「……みんな子供だと思って相手してくれませんか……教官には『ここは子供が来る所じゃない』って……」

「……彼らに罪は無いが……災難だな」

自分が童顔で年端もいかぬ少女にしか見えないというのは自覚しているつもりなのだが、やはりツライものがある。

「……ま、とにかくその傷を治すのと武器を直すのが最優先だ。フルスには馴染みの鍛冶屋がいる。アイツなら直せるかもしれないし、もしできなくてもマシな武器を作ってくれるだろう」

竜車はいつの間にか密林を後にし、草の生い茂る平地を進んでいた。

遠方には石造りの建物が密集する街の石門と、街を南北に分かつ川が見える。

川の両岸に発展した河川都市フルス。

彼らの新たな拠点は、彼らにどんな変化をもたらすのだろうか……

「うわぁ〜……」

「……………」

竜車の配車場からギルドのフルス支部に向かう道のり。

レイヴンとシエルクはその途中で、フルスの北岸側を東西に貫く大通りの1つを通っていた。

竜車が4台はすれ違えるような広い石畳の大通りには、所狭しと露天が立ち並ぶ。

武器、防具、野菜や果物などの食品、ハンターの道具、毛皮、日用雑貨、骨董品や貴金属。

どれもに人が群がり、威勢のいい掛け声や喧騒で溢れていた。

シエルクはさつきから口をポカーンと開けたまま、左右の店々に並ぶ品物の一つ一つを興味津々といった感じで眺めている。

「すい〜い……」

ミニチュアサイズのリオレウスの、精巧な骨格標本に目移りしているシエルクを尻目に、レイヴンは先ほどからズンズンと人混みを進んでいた。

「あゝもう、待ってくださいよレイヴンさん!!」

「……………」

シエルクは敬語だが、初対面のレイヴンに対する話しぶりに遠慮は見られない。

不快感を覚えることもないので、レイヴンは放っているが。

「……………あ!!レイヴンさん見てくださいよ!!これこれ!!」

レイヴンの黒衣の裾をシエルクの右手がグイグイと引っ張る。

「……………あのな、シエルクさん。これからギルド行って、キミの治療のために診療所行って……………やることはたくさん……………」

「この黒い鱗、何のモンスターののでしょうか？ テカテカしてますけど」

シエルクの言葉に、レイヴンが慌てて振り返った。

殊に、“黒い鱗”という単語を聞いて。

だが、シエルクの屈んだ肩越しに露天の陳列台の上に並べられたその“黒い鱗”を見ると、レイヴンはまたつまらなさそうな顔をして前進を再開する。

「……………あれ？ レイヴンさん!!」

シエルクが、三角巾で固定された左腕を通行人にぶつけられないように注意しながらレイヴンに追い付く。

「……あれはイヤンガルルガの鱗だ」

レイヴンの言った名前に、シエルクが首を傾げる。

「いゃん……がるる……？」

「……つまり黒いクック」

「そんな飛竜いるんですか？」

純粹に「知らない」という顔をするシエルクを見、レイヴンは嘆息。

「……少しは勉強したほうがいいぞ、半人前ハンターさん」

「よし、と……これで大丈夫でしょう」

右腕は丁寧に包帯を巻き直され、患部が固定される。

「右腕の裂傷は全治二週間、左腕は三週間ですな。二週間後に抜糸するのでまた来て下さい。くれぐれも安静に……」

「はい、ありがとうございました」

白い口髭の似合う、診療所の年老いた医者に礼を言い、シエルクは診察室を出た。

ギルドに行つてハンター登録をした後、応急処置しかされていなかったシエルクは、レイヴンに連れられて集会所の近くの診療所に来ていた。

だが待合い室に行くと、そこにレイヴンの姿は無い。

キョロキョロしていると、カルテを運んでいた看護婦が気を利かせてシエルクに問い掛けてきた。

「どなたかお探しですか？」

「あ、えと……真つ黒の服来た男の人っていませんか？」

「あの方なら……ついさっきお帰りになられましたよ？」

「そう、ですか……」

まあ、当然と言えば当然かもしれない。

あちらとしてはこれ以上、シエルクの世話をあれこれとする義理も無いのだから。

だがちゃんとしたお礼もできていなかったので、シエルクは少々不本意でもあった。

「ん〜……でもこの街を新しい拠点にするみたいだし……また会えるかな」

そう結論付けて診療所を出ると、曇り無き青空を貫くような高い尖塔が、街の中心部に幾本も突き建っているのが見えた。

シュリフトトゥルム王立図書館。

国内でも有数の巨大図書館で、この都市の学術の中心地でもある。

「……どうせ暫くは狩りにも出られないことだし……行ってみようかな？」

父の影響で、幼い頃から書物はたくさん読んできたので、少しは興味がある。

だが何より……

『……少しは勉強したほうがいいぞ、半人前ハンターさん』

“半人前”

レイヴンに言われた屈辱的な言葉がシエルクの闘争本能を静かにかき立てていた。

シエルクを診療所に送り届けた後、レイヴンは川を挟んだ南側の街に来ていた。

商業や行政施設が集中している北岸に比べて、居住区の多い南岸の地区は比較的静かな街並みを有している。

北岸と南岸を結ぶ4つの橋の内、一番東端の橋から南側地区を南端まで貫く大通りも北側のそれに比べれば洒落た雰囲気のお店構えが並ぶ。

その内の一つ、鉄製の看板が掲げられた鍛冶屋の前でレイヴンは足を止めた。

看板には「コンツェラルト鍛冶店」の文字が刻印されている。

無言で分厚い木の扉を押し開くと、落ち着いた木の色合いで統一された店内は思いの外明るかった。

どうやら吹き抜けになっている二階の天窓から光を入れているらしい。

その光を受け、店内に整然と並べられた武器達が自己主張するかのように輝きを放っている。

「やあ……久し振りだね。」

カウンターに立つ男がレイヴンに笑いかけた。

細身の体に大きな四角いフレームの眼鏡。

嫌味の無い、朗らかな笑み。

初対面の人は十中八九、カウンターの接客係だと信じて疑わないだろう。

それも、あながち間違いでもないのだが。

「ああ、相変わらずの優男だな」

「褒め言葉として受け取っておくよ」

そしてまた男が微笑む。

ボックスIIコンツェラルト。

少なくともレイヴンが知る限りでは最も器用で腕利きの武器職人だ。

ボックスは友との再会に嬉しさを満面の笑みで表しながらカウンタ―から出てきた。

「……何年振りかな？前にドンドルマで会ったのが2年くらい前だ
と思うけど」

「2年と3ヶ月だ。見ない内にまた痩せたんじゃないか？」

「太っていくよりましさ。……あれを取りに来たんだろう？」

「ああ、勿論。お前が性能を秘密にするから、期待しながら来たんだが」

レイヴンの言葉に、ニコニコ顔だったボックスが僅かに表情を曇らせる。

「ん、はっきり言ってまだ完成とは言えないんだよね……」

「……？ どういうことだ？」

「百聞は一見に如かず。とりあえずは現物を見てくれよ」

そう言うとボックスはカウンターの奥に消えていったかと思うと、すぐに長大な包みを持って再び現れた。

全長2m半はあろうかというその巨大な布の包みの中身は、大剣であることに間違いは無さそうだ。

「よいしょっと……」

カウンターにそれを載せると、テキパキと包みを解いていく。

中から現れたのは、鏡のように磨き上げられた鋼の刃を持つ大剣だった。

大剣という割には刃幅は細めだが、普通の刀剣の類に比べたらかなり幅広ではある。

片刃で、峰側の鍔の前には50cm×30cmくらいの、何かの補

強板が取り付けられているくらいで、他にこれといった特徴は無い。

「刀身はドラグライト鋼とカブレライト鋼の特殊合金で、クリスタルと大地の結晶で丁寧に研磨してある。簡単には刃こぼれしない」

輝く刀身を指でなぞりながらボックスが誇らしげに言う。

「確かに斬れ味は良さそうだが……これじゃ普通の鉄の大剣だな」

「そう。これじゃ何の変哲も無いただの大剣さ。でもこの特殊合金はかなり過酷な使用にも十分に耐えうる素質を持つてる」

ボックスが意味深にニヤリと笑う。

さっきとは違う、まるで悪巧みを考える子供のようにだ。

「例えば……高熱の炎に晒されても膨張することはない。極度の低温にも極端な収縮を起こさない」

「……属性添加か」

レイヴンがふと閃いたように呟いた。

ボックスはその言葉に満足したように笑みを濃くする。

「そう。鉄素材の武器でありながら、モンスター素材由来の属性を付加することができる」

「だが……そういう大剣は幾つか存在するはずだぞ？ クリムゾンゴートや、フルミナントソードや、鬼薙刀もそうだったな」

「もちろん。属性強化を施した鉄素材の大剣は幾つかは存在する。けどこの大剣の凄い所はね……」

ボックスが刀身の上の指を、例の謎の補強板に移す。

「……ここだ」

「……？」

補強板をよく見てみるが、何ら特殊な機構があるようには見えない。だがボックスは悪戯っぽく笑った。

「ふふふ……確かにこれは真正正銘、ただの鉄の補強板さ。だけど本来ここにあるべきなのは、別の物」

「なんだボックス？ 勿体ぶらないで見せてくれ」

「まあまあ……これさ」

ボックスがカウンターの後ろの棚から、おもむろに何かを取り出し大剣の横に置く。

それはガンランスに取り付けるような、巨大な8連装シリンダーだった。

「……？ ガンソード（銃剣）にでもするつもりか？」

ボックスは「分かっているなあ」と言わんばかりに肩をすくめて

首を振ると、説明を始める。

「レイヴン、僕がこの剣で試したいのは、複数の属性を一つの剣に付加させ、状況に応じてそれらを使い分けられる機構さ」

「ん〜……このシリンダーは何か関係あるのか？」

「おおありさ！！ この機構の最重要部分の一つといっても過言じゃない！！」

熱弁を振るうボックスを置いて、改めて大剣とシリンダーを見る。

どちらも、鉄製で特徴に欠ける部品だ。

だがボックスの言うことが本当なら、鉄の斬れ味と骨の強力な属性強化を同時に達成することのできる大剣が手に入る。

「とにかく、この大剣が未完成なのは分かった。なんでその、『複数の属性を一つの武器に付加させ、それらを状況に応じて使い分ける機構』を早く積まないんだ？」

「そう……そこなんだ、レイヴン」

ボックスはまた困ったような顔になり、大剣を見つめる。

「シリンダーを大剣にただ積むだけでは 当たり前だが その能力は得られないのさ。そこで、だ」

ボックスが顔を上げ、レイヴンを見る。

「とある岩竜の素材を採ってきてもらいたいんだ」

「バサルモスの？」

「市場には出回らない代物でね。ついでに甲殻も幾らか要るんだが」

「甲殻はともかく……ある素材って？」

ボックスは満面の笑みで告げた。

「岩竜の骨髄さ」

コンツェラルト鍛冶店を出ると、夕焼け色に染まった静かな石の街並みがレイヴンを迎える。

携帯用の市街地図を広げ、ゲストハウスの位置を確認すると、地図をしまって歩き出した。

岩竜・バサルモスの骨髄。

この街のギルドでは確か、A2級取扱制限品目に含まれていたはずだ。

分かり易く言えば、『研究用途を除き、採取・取引は禁ずる』というもの。

この辺りではバサルモスの生息数は少ないため、乱獲を防ぐためにこのような措置がとられている。

(だけど岩竜の骨髄が無ければ、あの大剣は完成しない。でも制限品目密猟となるとギルドナイトが黙っちゃいけないし…)

来たばかりの街のギルドナイトに楯突いて得なことはない。

悩んでいると、河を挟んだ北岸に夕焼けのオレンジ色を跳ね返す幾つもの尖塔が立ち並んでいるのが見えた。

しばらくそれらを眺め、嘆息。

(どの道、狩りの準備もいるし、岩竜討伐が募集されるまでは時間がかかるはずだから……明日は図書館にでも行くか)

シュリフトトゥルム王立図書館。

レイヴンがこの街を新たな拠点とした一つの要因とした尖塔群は、夕陽を浴びる街を静かに見下ろしていた。

「えつとー……」

移動式の台に乗って、本棚の本を抜き取っていく。

台に取り付けられた傍らの荷台には既に数冊の本が載せられている。

モンスター生態「密林編1」、基本調合解説書「1」、図解・鳥竜編、ハンター生活入門など……

更に幾つかの本を追加し、右腕だけで器用に抱え込むと移動台を降りた。

シユリフトウルム王立図書館は円形に並ぶ8本の蔵書塔と、それらの真ん中に位置する中央管理棟、そしてその地下に広がる封印書庫から成る。

各建物は全て繋がっていて、貸し出し管理は中央の管理棟で行うようになっていて。

蔵書塔には一本につき100万冊の図書が保管されており、8本で約800万もの書籍が保存されている。

封印書庫には、何らかの理由で封印せざるを得なくなった図書約120万冊が保存されていて、全館合計で920万もの蔵書数を誇っていた。

尖塔の内部は20階建てで、塔の中心は最上階まで吹き抜けとなっており、塔の突端は採光用のガラス張り。

各階は2ヶ所の階段で繋がっていて、二階置きに学習室階が設けられている。

つまり、

学習室

蔵書階

蔵書階

学習室

蔵書階

蔵書階

という作りになっている。

シエルクは今、第三蔵書塔の10階にいた。

この蔵書塔の難点は、上の階に行くにはかなりの苦労を要することだが、上階にはそれ相応の貴重な書籍が多く眠っている。

司書に頼めば、翌日には所定の本を取ってきてもらえるのだが、八

ンターたるものがこんなことで弱音を吐いていても始まらない。

シエルクは数冊の本を小脇に抱え、階下の学習室に繋がる階段を降りた。

学習室は、それぞれ塔の内と外を向いた二列の机が配置されていて、各机にはランプが置かれている。

館内は塔先端の天窓があるとはいえ昼間でも薄暗いため、細かい文字の並ぶ書物を読むのにランプは必須なのだ。

ちなみに学習室を使うには管理棟で申し込む必要があるが、これらの机が全て一杯になることはあまり無い。

シエルクは整理票を見ながら席を探す。

「253番、254番、256番、ここか」

整理票の「257」の数字と、木製の机の端に取り付けられた「257」のプレートを照らし合わせ、抱えていた本を静かに机の上に置く。

椅子を引いて座ると、隣の机の人が目についた。

薄暗い館内の中でも、更に目につくくらい真っ黒な服を着ている。

黒衣の男はそこらの辞書よりも分厚い、どこかの村の歴史書を、真剣な表情で読んでいる。

そして何より、シエルクはその黒髪黒眼の横顔に見覚えがあった。

「……レイヴンさん？」

図書館の中なので一応、小声で呼び掛けてみる。

すると黒衣の男　レイヴンは一瞬、驚いた様子でこちらを向いたが、すぐに普通の表情に戻った。

「腕、大丈夫か？」

レイヴンはまた歴史書に目を戻し、極めて簡潔に聞いた。

「はい……お医者さんには三週間は安静にしてなさい、って釘をさされましたけど」

シエルクが笑いながら言うと、レイヴンは左腕の三角巾と右腕の包帯を見、申し訳なさそうに返した。

「悪かったな……もう少し早く行ければ良かったんだが……」

「いえ……私は助けてもらえただけでも……本当にありがとうございまして。」

「いや……」

レイヴンは歴史書のページを繰る手を休めることはない。

会話はそれきり止まってしまった。

異性を過剰に意識し合う時期は2人ともとうの昔に過ぎたはずなの

に、これだけ静かな空間でこれだけ近い距離に（多少なりとも）見知った異性があると、妙に意識してしまう。

竜車の中では戦闘後の疲労ですぐ眠ってしまったし、市場の時は新しい街に対する好奇心の方が勝っていた。

そして数分後、その静寂を打ち破ったのは意外にもレイヴンの方だった。

「……勉強熱心だな」

ポツリと呟くように放たれた言葉はおそらく、シエルクに向けられたものだろう。

周りの机に人はいない。

「……レイヴンさんに言われましたし」

レイヴンに『半人前ハンター』と言われた時の悔しさは、本人を前にして今や心の奥底で急速に萎えてしまっていた。

「あの、レイヴンさんは……何を読んでるんですか？」

「ん……メンティスガルドの歴史書」

メンティスガルドとは、ここから遙か南へ800km、海に面する港湾都市だ。

シエルクは名前を知っているだけで、行ったことは無い。

「なんでメンティスガルドの歴史書なんて読んでるんです？」

レイヴンの隣へ、ゾリゾリと椅子を移動させて分厚い歴史書を覗く。細かい文字と図表で埋め尽くされたページには、メンティスガルドがモンスターに襲撃された事件について記されている。

「あ、ああ……ちょっと、な」

そう言つてレイヴンは歴史書をパタンと閉じる。

そこでレイヴンはシエルクの方を見た。

が、レイヴンはお互いが意外と近い距離にいることに気づき、慌てて目を逸らす。

「『黒い火竜』って聞いたことあるか？」

「黒い、火竜……？」

今し方読んでいた『飛竜辞典「上巻」』には無かった。

シエルクが首を傾げていると、レイヴンが続けた。

「黒い火竜。俺は『黒火竜』と呼んでいるんだがな」

「こっぴかりゆう、ですか……」

火竜・リオレウス。

竜盤目・獣脚亜目・甲殻下目・飛竜上科・リオス科に属する飛竜で、空の王者と呼ばれている。

空中機動に適した強靱な大翼を有し、火炎を自在に吐く。

飛竜の代名詞とも言えるとても有名な大型モンスターである。

「聞いたことないです……蒼火竜や銀火竜なら知ってますけど……」

「……俺も、一度しか見たことはないんだがな……」

「その黒火竜がどうかしたんですか？」

そこでレイヴンは歴史書を脇に退け、傍らに積んであった大判の厚い書物を引き寄せた。

それはドンドルマで発行されている新聞の過去の号の写しだった。

表紙に書かれた年は今から13年前。

「ティディエン事件って知ってるか？」

レイヴンがパラパラとページをめくりながらシェルクに尋ねる。

「13年前の……たしか村一つが……」

「……消えた事件だ。それもたった数分間でな」

ページを繰るレイヴンの手が止まった。

日付は13年前の7月12日。

ページには大きく、『ティディエン襲撃される』の文字が踊っている。

レイヴンから本を渡され、記事を読み始めると、徐々にシエルクの幼い頃の記憶が蘇ってきた。

『ティディエン襲撃される』

『昨日、西方のロンザン山脈の麓にある边境の村・ティディエンが何らかのモンスターに襲撃された』

『偶然付近の街道を通りかかった商人によると、飛竜の類の鳴き声が聞こえたかと思ったら、遠方に見えていたティディエンの村に黒い影が降下するのを目撃』

『数分後、黒い影が村から飛び上がった時には既にティディエンの建物は焼け落ちて消えていたという』

『目撃者である商人がギルドに通報し、ギルドナイトが駆けつけた時には、村はあらゆる物が燃え尽きており、生存者は狩りに出ていたために一命を取り留めたハンターのみであった』

『調査を行ったギルドによれば、ナナ・テスカトリかテオ・テスカトルの襲撃にあったものと報告。近辺ではあまり目撃されない種だけに、備えが無かったようだ』

記事を読み終えると、レイヴンを見る。

レイヴンは顔の前で組んだ手に額を乗せて囁くように、しかしはっきりとした輪郭を持つ強い声で言った。

「唯一の生存者である若いハンターは、燃え尽きた村を発って旅に出た」

その声は誰に向けられたものかはシエルクには分からない。

少なくとも、言葉の本質的には自分では無い気がした。

「あらゆる街で情報を集め…故郷を、両親を、村人を……己の全てを焼いた飛竜に、己の剣で復讐するために」

虚ろな声とは対照的に、その黒い眼には強い力が宿っている。

恐ろしいほどに。

「村を襲った飛竜の影の黒さを忘れぬ為、その身に漆黒を纏ってな」

「まさか……」

「俺の故郷が消えて、もう13年だ」

シエルクは何も言えなかった。

ティディエン事件の生存者は、目の前で復讐に燃えるハンターとなっていた。

レイヴンはなおも言葉を継ぐ。

「確かに、モンスターに襲撃されたのなら諦めるのが普通かもしれない。前触れなく訪れる災厄だ。地震や雷と大差は無い。だがな……」

レイヴンが目を閉じる。

その瞼の裏に浮かぶ光景をシエルクは何い知る余地は無い。

そして次の言葉は静かな怒気をはらんだ。

「……自分の母が体に炎を纏って死んでゆくのを目の当たりにしたら、どうだ？」

レイヴンの目から涙はこぼれず、ひたすらに憎しみがほとばしるのが分かった。

組まれた手に力がこもる。

「父が……狩りに行く息子を笑って見送ってくれた父が……そこらの木材の燃え屑同然の姿で転がっていたら……！」

開かれたレイヴンの眼からはやはり涙はこぼれない。

まるで涙など、13年前に枯れ果ててしまったかのように。

シエルクはただうつむいていた。

話を聞いたただけなのに、胸が苦しくなる。

これ以上無いくらいの力で、拳を握っている。

事件の本当の犠牲者の声は、シエルクの胸を打ちのめした。

そして、ついにその紅い瞳から一筋の涙が零れ落ちる。

傍で涙を枯らしてしまった男の分も、涙を流すかのように。

「レイヴン……さん」

レイヴンはシエルクの声に、はっとして顔を上げた。

目から憎しみの黒い光は消えていた。

「……すまないな。昼間っから辛気くさい話して」

シエルクは涙を拭い、首を振る。

「いいんです……その、ごめんなさい……無遠慮に聞いたりして」

「……キミに罪は無い。むしろこっちが詫びたいくらいだ」

そう言ってレイヴンはシエルクの手から本を取り、閉じる。

そしてシエルクを見、出し抜けにこう尋ねた。

「……そういえば、武器はあるのか？」

シエルクは、「あ」という顔をする。

そういえば憎きイヤンクックに、唯一持っていた片手剣を踏み潰されたのだ。

武器が無ければ、狩りをしようにもできないではないか。

「よし、修理してもらいにいこう」

「でも……鍛冶屋がどこにあるかも知りませんし……」

「フルスに来るときに言っただろう？ 馴染みの鍛冶屋がいるって」

「……なんだかお世話になってばかりですね」

「女の子泣かせた罪は重いんだよ。しかも二回」

そういえば、フルスに向かう竜車でも泣いた覚えがある。

今更恥ずかしくなって、つつい照れ笑いをしてしまう。

レイヴンは机に積んだ本をテキパキとまとめながら、シエルクに言った。

「あの片手剣持って図書館前に集合。いいか？」

「……はい……」

レイヴンは黒衣を翻して階段に消えていった。

シエルクも自分の持ってきた本をまとめながら考える。

(レイヴンさん……大変だったんだ……)

重い復讐の宿命を自らに負わせながら、そんな素振りは見せなかったレイヴンは尊敬に値する。

初めて会った時に比べたらかなり打ち解けて、ピリピリした雰囲気も和らいできた。

見た目は冷たそうな人だが、根は案外優しい人なのかもしれない。

シエルクは黒衣の消えた階段を見て、そう思ったのだった。

「……そういえば、レイヴンさんは何で黒いリオレウスだと分かったんですか？」

街を南北に分かつ川に架けられた橋の1つを南側に渡りながら、シエルクがレイヴンに問う。

シエルクの手には、布に包まれた自分の片手剣があった。

「ヤツが飛び去る姿を見たんだ。あれは決して牙獣種なんかじゃない。リオレウスの大きな翼だった。間違いない」

あの話題を掘り返すのはあまり良くないとは思いながらも、気になっていたことなのだ。

「それに、目撃者の商人が聞いた吼声は飛竜種のものだった」

「ならそれをギルドに話せば……」

「ギルドは信じなかったよ。リオレウスにこんな破壊力は無いし、人里を襲うことは無いとな。まあ正常な判断だが……あれは確かに黒いリオレウスだった」

そこまで言うのなら間違い無いのだろう。

「だが、ギルドの言う通り通常のリオレウスにそんな破壊力は無いし、仮に銀火竜だとしても人里を襲うことはないだろう。だから、突然変異種か何かじゃないかと思うんだが……と、着いたな」

レイヴンが歩みを止めた。

鉄製の看板には「コンツエラルト鍛冶店」とある。

レイヴンが扉を開けて中に入ると、シエルクもそれに続いた。

店内には所狭しと様々な武器が整然と陳列されている。

「やあレイヴン。例の素材は手に入ったかい？」

カウンターに立つボックスがレイヴンに親しげに話し掛ける。

「あんなモンがそう簡単に手に入るわけないだろ……」

「ん？ そっちの包帯のお嬢ちゃんは？ レイヴンの連れ子かい？」

その言葉に、レイヴンが笑った。

当事者であるシエルクはその言葉に、膨れっ面をしている。

「違う違う……このコはシエルクだ。新米ハンターでな、ココに来たばっかなんだ」

「なるほど……レイヴンのカノジョか。未成年とは……意外と守備範囲広いんだな、レイヴン」

するとレイヴンは更に笑う。

怒っているのか照れているのか分からない顔のシエルクが、やっと

口を挟んだ。

「ち、違います!! それに未成年じゃありません!!」

「ははは……このコは22だよ。シエルク、コイツは鍛冶屋のバツクスだ」

なるほど、と言った後、ボックスが軽く会釈してシエルクに名乗る。

「これはこれは……失礼したね。このフルスで鍛冶屋をやってるバツクス」コンツェラルトです」

「シエルク……エイタワーズです」

よろしくシエルクちゃん、とボックスが笑みを返した。

この人の笑みには、人の怒りを治め、安心させる力があるとシエルクは感じた。

母親の包容のような……

(あ、男だから父親かな?)

「さて……ボックス、この片手剣の修理はできるか?」

レイヴンがシエルクの右手にある包みに視線を送ったのを見て、シエルクは慌てて包みをカウンターに乗せ、中から片手剣を取り出した。

改めて見ると、なかなかヒドい曲がり方をしていた。

ボックスは丁寧に片手剣を調べ始める。

刃を見、グリップを見、刃の曲がり具合を丹念に見た。

幾つかのピンを抜いて、刃を柄と鐔から外した時、初めて渋い顔を見せた。

「……これは難しいね」

「何故？」

レイヴンが聞くと、ボックスが取り外した刃の根元　柄との接続部分を見せた

「ここ　茎なかじというんだが　まで酷く曲がってしまっている。刃だけならまだしも、ここは一度湾曲すると修理するのに大変な苦勞が要るんだ。それに曲がった時に目釘で圧迫されて、目釘穴が歪んでしまっている。こうなるとグリップまで交換することになるね……」

曲がっているのは刃ばかりだと思っていたが、どうやらもっと重要な部分が曲がってしまっていたらしい。

「……シエルクさん、この片手剣には何か思い入れはあるかな？」

「いえ、特には……」

これはリアの鍛冶屋に勧められて買ったもので、さして深い思い出は無い。

強いて言えば、イヤンクックに踏まれたことである。

「それならば、武器を新調することをお勧めするね。同じレベルの片手剣ならそんなに高価でも無いからね」

「うーん……」

果たして今さら武器を変えることはできるのだろうか？

(どっしり……?)

とレイヴンに視線を送ると、レイヴンも少し思案し、ボックスに尋ねる。

「これと同じくらいの感じの片手剣は何になる？」

「そうだね……」

ボックスはまた無残に曲がった片手剣を見て考える。

「ハンターカリング改辺りが一番近いんじゃないかな。」

「ならそれをちょっと借りれないか？」

「オーケイ、貸し出し用があったかどうか見てくるね」

そう言うとボックスは奥の工房に消えていった。

「武器なんか借りれるんですか……？」

「ああ、ここは武器の感触を確かめるために、しばらく貸してくれるんだ。キミも一回試せばいい」

へえ、とシエルクが感心していると、ボックスが片手剣を持って戻ってきた。

「あったあった。とりあえずこれで試してみるといいよ」

ボックスは貸し出し登録用紙を取り出すとペンと共に差し出す。

シエルクはそれに名前とゲストハウスの住所を書き記すと、丸い盾とハンターカリングが改を受け取った。

大きく反った片手剣は、確かに長さといい柄の太さといい、今まで使っていた片手剣に近い。

シエルクが感覚を確かめている間、レイヴンはボックスと例の素材について交渉をしていた。

「なあボックス、なんとか他の素材で代替できないか？」

「うーん、難しいね。甲殻の代替はまだしも骨髄の方は……」

「……分かった。何とかしてみる」

レイヴンは渋い顔をして、何か考え込みながら店を出て行った。

「え？ あ、レイヴンさん！！ あ、ボックスさん、ありがとうござい

ざいます……」

シエルクは一礼すると、慌ててカウンターの上の曲がった片手剣を布で梱包し、ハンターカリングと盾を脇に抱えて出ていこうする。

「ちよつとちよつとシエルクちゃん！！ 裸の剣持って街歩くのは……」

ボックスは苦笑して、革のケースを投げてよこした。

「あ……！！ ありがとうございます！！」

シエルクはまた深々と礼をすると、片手剣をケースにしまい、パタと店を出て行った。

店内は再び静寂を取り戻す。

「……まさかレイヴンが他人を連れてくるなんてね」

「シエルク、エイタワーズ…… エイタワーズ？」

ボックスは少し考える仕草をする。

「どこかで聞いた名前だな…… エイタワーズ…… どこかの研究所の……？」

「ねえねえレイヴンさん？」

「なんだ？」

川沿いの道をレイヴンとシエルクが並んで歩く。

穏やかなフルスの午後、街を両断する川には輸送用の船が多く行き来していた。

「さっきバックスさんと何を話してたんですか？」

「ああ、新しい武器の素材のことで……ちょっとな」

「骨髄がどうとか……」

「……聞いていたのか？」

入手しようとしている素材が素材なだけにあまり外に漏れるのは好ましくない。

レイヴンが厳しい表情をすると、シエルクは慌てて言う。

「あ、あの、その、盗み聞きしていたわけじゃ……」

「……構わん。新しい大剣の製作のために岩竜の骨髄を探していて

な」

「なにか……問題があるんですか？」

「A2級取扱制限品目。研究用途を除いて採取・取引は厳禁だ」

レイヴンの難しい顔を見ると、その制限を破ることにさして罪悪感
は無いが、バレた時の処遇がよっぽど厳しいらしい。

何とかしてレイヴンにお礼をしたいので、これは良い機会だ。

入手方法をレイヴンと一緒に考えてみる。

(A2級取扱制限品目……)

そこでシエルクはポケットを探る。

その手には一枚の名刺サイズの紙が金属ケースに収められた物が。

シエルクはしばらくその紙を見つめ、やがて満足気に頷いた。

「これでやっと、レイヴンさんの役に立てます！」

「は？」

シエルクが得意気に見せた紙にはこう記されていた。

『リリア飛竜研究所・特務調査研究員身分証明書』

『この証明書はリリア飛竜研究所に所属する特務調査研究員である

ことを証明するものである』

そして裏返すと……

『本証明書の所有研究員は、A級取扱制限品目を研究用途として取扱する事が許可される』

『認可責任者リリア飛竜研究所所長・ダンラストIIエイタワーズ』

「……は？」

「あれ？ 言いませんでしたか？ 私の実家は飛竜研究所だって……」

「……初耳だ」

(でも……これでなんとかなるな)

あれから10日後、レイヴンとシエルクは火山にいた。

「ふは〜……さすがに暑いですね〜」

連絡船から降りたシエルクが伸びをしながらレイヴンに言った。

ハンターシリーズを装備して、腰にはボックスから借りたハンターカリング改を携えている。

丸い盾をつけた左腕は、一応ギブスはとれたが完治はしていない。

「ここは麓だからまだマシな方だ。頂上付近は、常に脱水症状と戦うことになる」

続いて砂浜に降り立ったレイヴンは、全身を金属製の漆黒の鎧で包んでいる。

ベースはクロムメタルシリーズだが、同シリーズは脚用装備と腰用装備しかないはずなので、胸用と腕用はボックスに特注で作らせたのだろう。

ちなみに頭に装備は無く、本人曰わく「視界が狭まるのがイヤ」らしい。

背中には至極シンプルな作りの両刃の鉄製大剣を背負っている。

研究員が同伴しないと岩竜を狩っても骨髄の採取の許可が下りないため、今回はシエルクも岩竜狩りに付いてくることになったのだ。

二艘式の連絡船の荷船から荷物を下ろしながら、レイヴンはシエルクに尋ねた。

「それにしても……実家が飛竜研究所の割には飛竜の知識は浅いんだな」

打ち寄せる波に注意しながら荷物を下ろしながら、シエルクが答える。

「研究者になるのが嫌で……あんまり研究所には近寄らなかつたんです」

「なるほどね……なら何で研究員の証明書を？」

「最初はハンターになることに凄く反対されてたんですけど……何とか説得してハンターになって……今回リリアを出発する時に父が渡してくれたんです。『何かの役には立つだろう』って……」

「優しい親父さんだな……と、これで全部だな」

レイヴンが最後の荷物を砂浜に下ろし、2人は必要な装備を装着していく。

回復薬、閃光玉、モドリ玉、砥石……

最後に防具の締め付けを確認し、2人は火山の地図を覗き込んだ。

「バサルモスは大抵、このエリア2にいることが多い。くそ暑いエリア6にいないことを祈るが」

レイヴンが火山への入り口のエリアとなるエリア2を指した。

「ひとまずここへ向かおう」

「はい！」

「バサルモス……通称・岩竜は文字通り、岩みtainな飛竜だ」

レイヴンが先を行きながら言う。

シエルクも、バサルモスは図書館の本で数回見たことがあるが、実物は見たことはない。

「その甲殻は……甲殻というより岩の塊といった方がいい。てか、甲殻からマカライト鉱が採れる時点でほぼ岩だ」

巨大な岩に囲まれた山道を、火山の溶岩に温められた生暖かい風が吹き抜ける。

不安と期待が入り混じる、狩りの前の独特の心境を煽るかのような風だ。

「ちなみに岩を主食にして成長していき、成体はあの鎧竜……グラビモスだ」

そこでエリア1に差し掛かった。

開けた場所には、火山の気候に耐えうる生態を持つ特異な形の植物がチラホラと自生していて、何頭かの草食モンスターがそれらをもしましやと食べている。

背中には体色と同じ茶色の甲羅を背負い、尾の先端には鋭い棘が発達しているのが特徴的だ。

10mほど離れた所にいる一頭がレイヴン達を向いた。

「……草食モンスターのアプケロスだ。テリトリーに他種の生物が侵入すると、積極的に攻撃を仕掛けてくる」

そう言った直後、アプケロスで後ろ足だけで立ち上がり、唸り声を上げた。

その高さはゆうに9mを超える。

「わ、わわっ!?!」

シエルクが慌てて武器に手をかけた。

しかしレイヴンは気にするふうもなく先をズンズン歩いていく。

「相手にしているとキリが無いぞ。そいつら足は遅いが、テリトリーを侵した者は執念深く追ってくる」

「そ、そんなあ〜」

「ほらほら、早く逃げないとタックルがまされるぞ〜」

そう言ってレイヴンはエリア2に通じる山道に向かって軽い駆け足で逃げ始めた。

シエルクは慌てて、猛然と追撃してくるアプケロスに背を向けてレイヴンの後を追っていく。

「ま、待ってくださいよ!?!」

「バサルモスについて気を付けないといけないのは……毒ガスだな。かなり離れないと……って聞いているか？」

エリア2に繋がる道。

シエルクはゼエゼエと肩を上下させて喘いでいる。

「……レイヴンさん、が……先に、行っちゃうから……」

「……もう少し体力つけた方がいいな」

シエルクが息を整えるのを待ち、レイヴンは話を再開させる。

「あと、たまにグラビモスを使うような熱線攻撃をしてくることもある。だいたい失敗するんだが……まあ、気を付けるに越したことは無いな」

「レイヴンさんは何度も戦ったことあるんですか？」

「前の前の街で4頭、前の街で6頭だ。それと基本攻撃は対して強くない。タックルは直線的だし、尻尾は短いから避けるのも簡単だ。一番の戦法は、どんなに弾かれても根気よく斬り続けることだな」

そこでシエルクがおずおずと尋ねる。

「……あのぉ……戦うのはレイヴンさん、ですよな？」

「ん？ ああ、俺だ。だがもし俺がキャンプ送りになったらキミにも戦ってもらう必要があるからな。今の内にアドバイスしておいた方が安心だろ？」

レイヴンがサラリと言い放った言葉に、シエルクが凍り付く。

「あの、私イヤンクックも倒せないんですけど……」

「気にするな。人間死ぬ気になれば何でもできる」

「……あの時も結構、死ぬ気で頑張ってたのに……」

シエルクはレイヴンがキャンプ送りにならないことを切に願うハメとなった。

「……いませんね？」

シエルクがエリア2を一目見て言った。

エリア3に繋がる奥の通路付近には山頂から運ばれてきた溶岩が流

れ出し、陽炎を作り出している。

エリア1より広いエリア2には、幾つか岩石の塊が露出しているだけで飛竜の姿らしきものは無い。

「やっぱりエリア6に……」

「いや、いる」

シエルクはレイヴンが呟いた時、地面が微かに揺れ始めたのに気付いた。

(地震……!?)

「たぶん知っているだろうからさっきは付け足さなかったが……」

レイヴンがゆっくりと、背に担いだ得物の柄に手をかけた。

それを見たシエルクも、慌ててハンターカリング改を抜く。

揺れは更に激しくなっていく……

「……バサルモスには擬態能力がある」

(そうだった……岩への擬態!!)

「二時の方向だ!! 30m先の岩!!」

レイヴンの警告にその岩を見た瞬間、動くはずの無い巨岩がもぞもぞと蠢く。

そして敵が地上に現れた。

土や小石を弾き飛ばしながら地面から飛び出た巨体に圧倒される。

岩石の鎧と化した甲殻に、岩山と見紛うばかりの巨大な体躯。

その巖つい顔面はさながら岩の仮面となっている。

岩竜・バサルモス。

その咆哮は大気と大地を等しく震わせ、そのまま戦いの開始の合図となった。

「はあっ！！！」

振るわれた剛直な大剣　カブレライトソードがバサルモスの体軀に叩き込まれる。

右肩から袈裟斬りの軌道で振り下ろされた渾身の一撃はあえなく硬い甲殻に弾き返されるが、レイヴンは弾き返された勢いを殺すことなく頭の上で手首を返し、続けざまの左上段からの一撃に繋げる。

刃がその甲殻を襲う度、鉄と岩との衝突に火花が弾け、削られた甲殻が小石のように散っていた。

と、バサルモスが不意に空を見る。

その動きに呼応するかのようにレイヴンが一旦、バサルモスの懐から飛び退いた。

直後にバサルモスが体を縮こまらせるようにして毒ガスを噴出させる。

（致死性では無いが…吸い込めば面倒くさいからな…）

紫色の毒々しい霧が霧散していくのを確認した後、レイヴンが再びバサルモスの足元に潜り込み、斬りかかる。

今度は下段からの一撃。

目一杯振り上げられた重量級の大剣は確実にバサルモスの胸部を捉えた。

そしてその一撃は、確かな手応えと共に弾き返されることなく振り切られた。

見ると、胸部を守っていた甲殻が砕け散っている。

さらに露出したピンク色の肉には深々と刻まれてた斬撃痕。

バサルモスが苦痛と怒りに絶叫する。

「よし……あと一息だ」

カブレライトソードの斬れ味はまだ落ちていない。

脆弱な部分をさらけ出した胸部に更に斬撃を重ねようと構えると、バサルモスが咆哮した。

バサルモスの体が前のめりになる。

「くそ……」

レイヴンは攻撃を諦め、走り出そうとするバサルモスに向かって突進する。

この至近距離では普通の回避じゃ、その巨大な体躯に巻き込まれる。

レイヴンはとつさに剣を右手で握ったまま地面に置くと、剣を握った右手を支点に前転。

その動きは、ちょうど突進を開始したバサルモスの両脚の間を抜けた。

レイヴンはすぐに立ち上がって振り返ると大剣を再び眼前に構え、獲物を見失って地面を滑走するバサルモスに相對した。

「おい、生きてるかシエルク!!」

「は、はいいいい!!」

繰り出されたイーオスの爪をハンターカリング改の刃で受け流し、後退。

すぐさま攻勢に転じ、左肩から右下に振り下ろした剣は凶らずもイーオスの頸動脈を断ち切った。

口と喉から断末魔の代わりに血を吐き出したイーオスが倒れ、数度痙攣した後完全に動きを止める。

肩で息をしながら背後を振り向くと、バサルモスに剣を振るう黒い姿が見えた。

レイヴンが再び叫んだ。

「ちょっと手を貸してくれ!!」

「は、はいっ!!」

「コイツの尻尾をぶった斬ってくれ!!」

「は……ええええっ!?!」

さっき「手を貸してくれ」と言われた時は邪魔なイーオスの駆逐だったが、飛竜の尻尾を斬るなどという要請は簡単にはと云えない。

「そ、そんな……」

「気を引くだけで構わん!! このままじゃコイツにトドメを刺せん!!」

よく見ると、バサルモスの胸部の甲殻が破壊されていた。

確かに、あそこに剣を突き立てれば心臓を貫いてトドメを刺せるが、バサルモスはその胸部を守るようにして前かがみで戦っている。

シエルクは決断した。

「わかりましたっ!!」

駆け出した足は止まることなく、バサルモスの後方に向かう。

バサルモスはレイヴンだけで手一杯で、こちらに気付いていない。

距離はすぐに詰まり、岩竜の短い尻尾が射程圏内に入った。

「はあああつ！！」

大跳躍。

フルス近郊の密林でイヤンクツクに放てずに終わった一撃を、今、放つ。

振りかぶった剣に、体の捻りを利用して体重を乗せながら振り下ろす。

ヒット。

が、目も眩むような激しい火花と硬い衝撃音と共に剣は見事に跳ね返された。

「やっぱり……！！」

バランスを崩しながらもバサルモスの足元に何とか着地する。

見上げた尻尾は無論、無傷。

バサルモスが鬱陶しそうに、視線を新たな敵に遣る。

それが勝敗を決した。

「よくやった!!」

眼前のバサルモスが一瞬、自分の尻尾にぶつかったシエルクに意識を取られた瞬間、さらに深くバサルモスの懐に飛び込む。

見上げれば、岩竜の心臓に繋がる道。

「俺達の…勝ちだっ!!」

左脇に抱えられるようにして構えられた大剣を、右足を前にした態勢で上に突き上げた。

繊維を断ち切るような心地良い感触が連続した後、確かな手心えを感じた。

飛竜の生温かい血液が降りかかるのも厭わず、心臓に突き立てられた剣をさらに180度捻る。

バサルモスは苦悶の悲鳴を上げ、レイヴンの頭にはさらに多くの鮮血が降り注いだ。

レイヴンは急いで朱に染まった大剣を胸部から引き抜くと、バサルモスの下から退避する。

心臓を貫かれた岩竜は天を仰いで何度か吼えた後、轟音をたてて地面に倒れ伏した。

そして最後に力無く鳴くと、ついには息絶える。

「ほ、本当に飛竜を討伐したんですね！」

「……さっきから何度も聞いている」

キャンプに帰ってきた2人は、とりあえずクエスト完了を信号弾で報せると、少し休息をとることにした。

「だって……初めて間近で飛竜を……」

シエルクは剥ぎ取った岩竜の甲殻を前に、ずっとそれを繰り返している。

よっぽど興奮したのだろう。

所々にマカライト鉱の青い点が混じる甲殻を見つめる紅の瞳は、新しい玩具を前にする子供のようにキラキラと輝いている。

レイヴンはキャンプの傍の湧き水の溜まる泉の水でバサルモスの血を落としていた。

火山の熱で温められた地下水は、さながら沸かした湯のように温かい。

「で、どうだ。ハンターカリング改を使った感想は」

上半身裸の状態のレイヴンが髪をタオルで拭きながらシエルクに聞く。

「ん〜……ちょっと、重いですね……」

シエルクは傍らに置いたハンターカリング改を持ち上げて呟く。

確かにシエルクの腕は細く、これから力がつくことを考慮しても鉄製の片手剣は重いかもしれない。

「そうか……まあ、その辺はまたボックスに相談してくれ」

「レイヴンさんの……その大剣は重くないんですか？」

シエルクが、船に立てかけてあるレイヴンのカブレライトソードを指差した。

特に飾りつけがあるわけでもない鉄の塊のような大剣は、確かに大きい。骨素材のものよりは薄い刃を持っている。

「ん〜？」

黒い肌着を着たレイヴンが剣に近付き、おもむろに地面に蹴り倒した。

地面に転がるカブレライトソード。

「持ち上げてみ」

レイヴンは上着を着ながらシエルクを面白そうに眺める。

シエルクは馬鹿にされたような気がして、倒されたカブレライトソードの前に立ち、柄を握った。

そして持ち上げようとするが……

「んんんんん〜！！！！」

稀少金属の合金で作られた大剣は、わずかに地面から離れた程度でそれ以上動こうとしなかった。

諦めて剣を地面に落とし、ハアハアと息をするシエルクを見てレイヴンが笑う。

「ははは……コレはそんなに軽そうに見えたか？」

「だって……！！ さっきバサルモスと戦ってた時はそんなに重そう

に見えなかったんですもん!！」

シエルクが子供のように口を尖らせ、レイヴンが笑いながらカブレライトソードを片手でまた立てかける。

和やかな雰囲気のカンプ。

火山の麓の砂浜はオレンジ色に染まり、夕日は水平線に落ちようとしていた。

日が落ちた後でもフルスの集会所は活気に溢れていた。

カウンターに立つ受付の女性が、目録に目を通しながら報酬の清算を行う。

カウンターを挟んだ向かい側には黒髪黒眼の男と赤髪紅眼の少女のようなハンター。

「契約金の220zと、報酬金の2700zで合計2920zですね」

2人にそれぞれ渡された小袋には金貨がジャラジャラと入っていて、シエルクにとってはクエストで得た金額としては大金だ。

「次に素材報酬ですね。今回は甲殻とマカライト鉱石と鎧石と……研究用途の岩竜の骨髄」

レイヴンがああ、と答えると受付の女性は笑顔でレイヴンに目録を渡し、一礼して奥に去っていった。

シエルクが大きく伸びをして、集会所の真ん中にある長椅子の端に座り込む。

「疲れましたね……このまま眠っちゃいそうです」

笑うシエルクの顔には確かに疲れが見え隠れし、気を抜けば本当に

眠ってしまいそうだった。

レイヴンは目録を懐にしまいながら、そんなシエルクを見て嘆息する。

「キミはイーオスとじゃれあつてただけじゃないか……」

「ちゃんと戦つてました〜！……それとそれ、やめませんか？」

「は？」

「その『キミ』っていう二人称です！ 無理してるのがバレバレですよ〜？」

「しよーがないだろ。何て呼べばいいか分からないだから……」

実際、レイヴンは何と呼んでいいか分からないのだ。

『あんだ』じゃ突き放してる気がするし、『あなた』なんて呼んだ日にはシエルクに笑われるだろう。

シエルクは「ん〜」と考えると、真顔でこう言った。

「普通に、『シエルク』とか、呼びやすいなら『お前』でいいんじゃないですか。私年下ですし」

「……出会つて間もない、素性もわからんような男に呼び捨てされて嫌な気はしないのか？」

「大丈夫ですよ〜！ レイヴンさん悪い人じゃなさそうだし〜」

シエルクはカラカラと笑う。

「不用心な……んじゃ、俺に対する敬語もいらんだろっ」

「ヤダなあ、これはレイヴンさんに対する敬意の現れじゃないですかあ〜！」

またも楽しそうに笑うシエルクを見、レイヴンも少し笑う。

そして、気付いた。

(この二週間でよく笑うようになったな、俺……)

その安楽の源は今、目の前で笑顔を振りまいていた。

「……ったく、いつから俺はお前の保護者になったんだ!？」

許可された二人称を早速使いながら夜の街を歩く。

背には穏やかな寝息をたてる赤髪のハンターを背負っている。

あの後、報酬素材の配達手続きで場を離れた直後、シエルクは椅子に座ったまま眠ってしまっていた。

それだけ疲れていた、ということは認めるが、さすがに防具や武器をフル装備したハンターを1人背負って歩くのは容易な話ではない。ちなみにカブレライトソードは報酬素材と共にゲストハウスに送って貰った。

「くそ、重い……まだまだガキ……」

シエルクの両腕はちゃっかりとレイヴンの首周りをホールドしていて、全体重はレイヴンの背中に託されていた。

夜でもフルスの街は煌々と光を放ち、多くの人々が往来している。

食品の多くを都市外に依存しているフルスで物流が止まることはないのだ。

都市を南北に隔てる大河、ノルスデモン川には4つの橋がかかっている。

西から、ザクス大橋、ツコビヤ大橋、イリユーセ大橋、ヴゲン大橋。

レイヴンは今、北岸の南レンベル地区と南岸のランツクネヒト地区を繋ぐツコビヤ大橋を渡っていた。

そこでレイヴンがふと思い出したように立ち止まり、呟く。

「……読者の皆さんにはフルスの構造をまだ説明してなかったな」

しかし首を振るとまた橋を渡り始める。

「まずはシエルクをゲストハウスに送ることが先決だ……」

「よっ、と」

真っ暗な部屋を手探りで進み、ベッドにシエルクをゆっくりと寝かせる。

当たり前だが、防具の類は外せるだけ外しておいた。

シエルクは目を覚ますことなく、ベッドの心地よさに寝返りをうつている。

疲れた顔のレイヴンは呑気なその様子に溜め息をついた。

(つつたく……ここまで来るのに苦労したんだからな……)

まずはランツクネヒト地区のゲストハウス群を一括管理する管理事務所に行ってシエルクのゲストハウスを突き止め、さらにシエルクのポーチの中から鍵を見つけ出す。

ろくろく明かりも無いところで何とか開錠し、シエルクを抱えたまま真っ暗な部屋を歩いてベッドを捜し当てたのだ。

「さて、あんまりここにいってもしょうがないし……帰るとするか」

熟睡するシエルクを見、踵を返して入ってきたドアに向かうレイヴンの目に、ベッドの傍の文机が止まる。

その上には読みかけと思しき本が数冊積まれていた。

「なにになに……？」

『片手剣・基本戦法指南』

『鳥竜狩りのすすめ』

『属性と武器・スキルと防具』

おそらくシユリフトトウルムから借りてきたのだろう。

いくつか栞も挟んである。

一つを手に取りパラパラと捲った。

見たところ、初心者用の入門書といったのがほとんどのようだ。

「……よく勉強してるな」

ベッドを見ると、やはりすやすやと寝息をたてる赤髪のハンター。

その顔は疲れてはいるが、大きなクエストをこなしたという満足感に浸っている。

若い頃の自分もこんな顔をしていたのだろうか、とレイヴンは一瞬考えたが、笑って首を振って一言だけを告げる。

「……お疲れ様。」

レイヴンはわずかに微笑むとゲストハウスを後にし、光り盛る街へと消えていった。

窓から射す陽光が閉じた瞼を貫通し、シエルクを夢の世界から引きずり出す。

「ん……む……っ痛!！」

手をついてのつたりと起き上がった瞬間、右腕に痛みが走る。

傷が悪化したのかと恐る恐る腕の包帯を見るが、出血は無い。

おそらく傷はほぼ完璧に閉じている。

ならばと軽く腕を振ると、さっきよりは幾分控え目な鈍痛。

何のことは無い、ただの筋肉痛だった。

(やっぱり剣が重かったのかな……?)

そう考えてゆっくりと身を起こすと、やっと体に血が巡って頭が働き始める。

そして、気付いた。

「私、どうやって帰ってきたの……?」

記憶は集会所の喧騒までしかない。

自分で帰ってきた覚えも無いので……

(たぶん……)

軋む体を思いつ切り伸ばすと、腕だけでなく肩や背筋も筋肉痛になっ
ていることに気付き、顔をしかめて右腕をさすった。

照り輝く太陽は高く、まだ頭上を越えていない。

「朝ご飯食べたら、バックスさんと共に武器を返しに行こー！」

「重い？」

「はい……筋肉痛が酷くて……」

あの後コンツエラルト鍛冶店に赴いたシエルクは、ハンターカリン
ガ改をバックスに返すと早速相談する。

「確かに……キミが持ってきた片手剣は、造りはシンプルだったが
かなりの軽量化が図られた剣だったよ。ハンターカリンガ改より遙
かに軽い」

そう言ったボックスは何気なしにシエルクの腕を見た。

か細い……とまでは言わないが、確かに細くて華奢な腕だ。

鉄製の剣をブンブン振り回すには向いてないかもしれない。

ボックスはしばらく口に手をあてて思案した後、何かを閃いたように店内を歩き始めた。

そして並べられた武器の中から一対の小型の剣を取る。

「これはどうだい？」

シエルクに渡されたのは骨素材を用いた簡素な双剣だった。

たしかに軽い。

「片手剣に比べれば幾分威力は落ちるがその分軽いし、手数を増やせる」

「本当に……軽いですね。」

武器とは思えない軽さだ。

試しに振ってみると、ヒュン、と空気を裂く鋭い音が鳴った。

更に振る。

左手の剣も加える。

連鎖的に振りを連続。

自然とステップも追加。

「盾が無いからフットワークを磨く必要があるけど、骨素材だから属性付加もしやすい。どうだい？ 気に入った？」

振りを止めたシエルクは、初めて触れる双剣を手にして自然と頬が緩む。

今までは重たい鉄製の剣に振り回されていたような感じだったが、この双剣はまさに振っているという心地だ。

これなら片手剣の時のように振り遅れて隙ができることもない。

「これ……ください!!」

シエルクのキラキラ輝く目を見てボックスは愉快そうに笑った。

「ああ。双剣ならレイヴンの大剣の鈍さを補える……」

「え？」

シエルクの意外そうな声に、ボックスは微笑みながら言った。

「シエルク、キミならレイヴンの良いパートナーになれると思うんだよ」

双剣を持ったシエルクは、ボックスのその言葉に赤面する。

あやつく両手の双剣を取り落とすところだった。

「パ、パパ、パトナー!?」

「ああ、狩りのね」

ニコニコと笑うバックスの言葉に、シエルクはさっきとは違う意味の恥ずかしさで更に赤面する。

「レイヴンの生い立ちと黒火竜のことは聞いたろう？ アイツは黒火竜の事になると我を見失いがちになる……」

その言葉を聞き、ふと図書館でのレイヴンを思い出す。

悲しみを燃料に、憎しみを赫灼と燃やし続ける彼の心。

あの時の彼の眼は未だに心の奥底に焼き付けられたかのように鮮明に覚えている。

「レイヴンと、狩りをしてやって欲しい。あんな状態ではいつ命を落とすかも分からない……」

「でも……たぶんレイヴンさんは相手にしてくれないです……私なんかまだまだ弱いし……」

俯くシエルクを見て、バックスは可笑しそうに笑った。

まだまだ若いな、と。

「……パトナーと狩りをするっていうことはね、そりゃ第一目的

は、単独では狩れないような、強大なモンスターや飛竜を狩ることもかもしれない」

「はい、だから……」

「でもね、仲間と狩りをするっていうのはそれだけじゃない」

「仲間……」

「友達とお喋りしたり、遊びに行くのと一緒さ。一人で狩りするより友達と狩りをした方が何倍も面白くなる」

「でも……レイヴンさんは一人でいる方が好きな感じがしますけど……」

その言葉に、ボックスは笑みを強くしてシェルクに言う。

「確かにそういうハンターも多いが……レイヴンは違う」

ボックスは目線を吹き抜けになっている天井の天窓に向けた。

青い空が垣間見えるその窓を見るボックスの目は過去を見ていた。

「一見そう見えるけどね、アイツは前はあんなに笑わなかった。少なくとも最後にドンドルマで会ったときよりは確実に表情が良くなってる」

「……………」

「ああ見えて案外寂しがり屋だね。隠すのが上手いだけなのさ」

「レイヴンさんが……？」

「アイツは黒火竜への復讐だけが人生の目的だと思ってるんだ。……正直、見てて哀れだよ」

「そんな……」

「だから……レイヴンの支えになってやってくれないか？」

……ボックスは本当にレイヴンを心配している。

シエルクにはそれが分かったから明瞭な返事をしたのだろう。

「はい！ 私、レイヴンさんと一緒に……」

しかしそれを打ち消すように別の声が店に響いた。

「……ボックス。お前が友達思いなのには頭が下がるよ。本当にな」

「え？」

シエルクとボックスが声を揃えて声のした方を見る。

開いたドアにもたれかかる黒衣。

「レイヴン……」

「レイヴンさん……」

開け放たれた扉の前にはレイヴンが立っていた。

その眼と表情に心は無く、ただ2人を見据えている。

……まるで飛竜に睨まれたかのように硬直する2人だった。

Fluss Introduction

「フルス - Fluss -」

レイヴン「以下レ」：フルスは多くのハンターの拠点になっている商業都市だ。

シエルク「以下シ」：街はノルスデモン川で両断される形になってまして、それぞれ北側を北岸、南側を南岸と呼び、合計13の地区に分けられています。

レ：北岸と南岸を繋ぐ橋は4本架かっていて、荘厳な石造りの建造物が大半を占めている。

シ：都市外縁に面する地区にはそれぞれ1つずつ都市に入るための通用門があつて、そこから伸びる道は「大通り」と呼ばれています。大通りには色んなお店があつて楽しいんですよ

レ：んじゃ、北岸から説明してください。

「北岸 - North Side -」

レ：北岸は主に8地区に分けられていて、行政や商業は主にこちら側に集中してる。

「メステイオ地区 - Messio Area -」

レ：北岸最東端の地区だ。東側にランビエ門があつて、フルス北岸

東側の通用門になっている。
電車の配車場があり、俺とシエルクの乗った電車もこのランビエ門からフルスに入ったんだ。

「ザルトフライツ地区 - Saltflights Area -」
シ：メステイオ地区のすぐ西に接する地区です。南岸のテリオラ地区に繋がるヴンゲ大橋を有しています。

「ノルスフライツ地区 - Northflights Area -」
レ：ザルトフライツ地区の北にある地区で北にルデリオ門がある。フルスで一番巨大な地区で、北岸の地区では最も人口が多い地区だな。

「南レンベル地区 - South Rembell Area -」
シ：この地区は北岸中央の南端に位置してまして、南岸のハンザ地区に繋がるイリユーセ大橋と、ランツクネヒト地区に通じるツコビヤ大橋を擁しているので、フルスの交通の要所になっている地区です。
おつきな大通りが二本も走ってるので商業も盛んです。
ギルド支部や集会所もこの地区にあるみたいですね。

「中央レンベル地区 - Central Rembell Area -」
レ：ここは北岸中央の地区だ。巨大な商業都市フルスの中心で、地区中央にはシュリフトウルム王立図書館があり、行政施設も集中している。
フルスン中じゃ一番小綺麗な地区だな。

「北レンベル地区 - North Rembell Area -」
シ：フルス最北端の地区です。フルスで一番農地が多いそうです。
北にはレンベル門がありますね。

「バルバリア地区 - Valbalia Area -」

レ：ここは南レンベル地区、中央レンベル地区、北レンベル地区、ドルデキオ地区の4地区に挟まれたフルスで最も小さい地区だ。鍛冶屋の工房が多くて、バックスの鍛冶屋仲間も沢山いるみたいだな。

「ドルデキオ地区 - Doldekio Area -」

シ：北岸で最も西にある地区です。西にはシエリ工門を有し、南端のエストヴァルサ地区に繋がるザクス大橋があります。北部の一部居住地域は前に、古龍の襲撃にあつたみたいで、復興が為されないまま廃墟になっちゃってるみたいですよ……

シ：次は南岸ですね。

レ：ああ。南岸の方が俺達のホームベースと言えるかな。

シ：キリキリ行きましょー

「南岸 - South Side -」

レ：南岸は5地区に区分されてて、居住区が大半を占めている。

「テリオ＝ララ地区 - Telio＝Lara Area -」

シ：南岸最東端の地区です。南岸の地区の中で一番大きいです。フルスの皆さんのお家が地区面積のいたい8割くらいを占めていて、南東にはヒエ工門があります。

バックスさんのコンツェラルト鍛冶店があるのもこの地区なんですよ。

ウンゲ大橋で北岸のザルトフライツ地区と接続されています。

「ヨードル地区 - Yodol Area -」

シ：テリオ＝ララ地区とハンザ地区の南に接する、フルス最南端の地区だ。南にサンゼリオ門を有していて、ここは北レンベル地区に次いで農地が多い。

「ハンザ地区 - Hanza Area -」

シ：南岸の真ん中にある地区でして、イリユーセ大橋で北岸の南レンベル地区と繋がってます。

お隣のランツクネヒト地区の次にハンターさんのゲストハウスが多いです。

南にはデール門があります。

「ランツクネヒト地区 - Rantzcnehit Area -」

レ：東側をハンザ地区、西側をエストヴァルサ地区に挟まれた地区で、ハンザ地区と共にゲストハウスが集中している地区だ。

南にはミフパレス門を有し、ツコビヤ大橋で北岸の南レンベル地区に繋がってる。

シ：レイヴンさんと私のゲストハウスがあるのもこの地区なんです
よ

「エストヴァルサ地区 - Estvalsa Area -」

シ：南岸最西端の地区です。フェベラ門があつて、ハンターさんのための商店や飲食店が多いです。

ザクス大橋で北岸のドルデキオ地区に接続されています。

「たあ！！」

振り下ろした双刃は虚しく空を切った。

剣の軌道上にいたはずの敵は素早く真横に跳んだのだ。

「ほらほら、さっさと動かないと切り裂かれるぞ」

少し離れた岩の上で見物しているレイヴンの言葉に、反射的に前転転がる瞬間、耳元でヒュツという鋭い音が鳴り、間一髪で攻撃を避けたのが分かる。

すぐに立ち上がって振り返ると、そこには青い鳥竜が一頭。

発達した四肢の鋭利に爪。

肉を捕らえ、引き裂き、噛み砕くための強靱な顎とズラリと並ぶ牙。

そして特徴的な青い皮膚と、オレンジ色の大きなトサカ。

鳥竜種・ドスランポス。

ランポスの集団を束ねるボスであるドスランポスは、通常のランポスより一回り体躯が大きい。

しかし動きはランポスより俊敏で、且つ一撃のダメージは大きい。その発達した後肢が生み出す跳躍力は一蹴りで十数mを軽くひとつ飛びする。

そしてシエルクが間合いに入ろうと踏み出すのと同様、敵は跳んだ。ドスランポスの着地目標地点はシエルクの真後ろだ。

背後から奇襲しようというのだろう。

(させない……！！！)

青い影が頭上を過ぎる瞬間、とっさに完治した右手に握られた剣を、真上に突き上げた。

ザシュ……ドシャ……

確かな手応えと落下音と共に、シエルクに赤くて生暖かいシャワーが降り注ぐ。

「ひゃあっ！？」

「ひゃあっ、じゃない。追撃できるチャンスだぞ」

「は、はい……！」

振り向くと、太ももに深い傷を負ったドスランポスが何とか立ち上

がろうともがいていた。

すかさず二歩の助走で跳躍。

右手の剣を素早く逆手に握り、左手の剣は腰の辺りでしっかりと構える。

ドスランポスが出血する左脚に力を込め、無理矢理に体を起こそうとした直後、その動きが止まった。

爬虫類らしい細長い頭部は地面に叩き付けられ、地面に接する側頭部からは剣の切っ先が生え、地面に達している。

右手の剣はドスランポスの頭を側頭部から見事なまでに串刺しにしていた。

頭蓋骨の破損で歪に歪んだ頭部の黄色い眼は、見開かれたまま静止している。

そして左手の剣は胸の辺りに根元まで突き刺されていた。

ドスランポスの体内にある刃は確実に心臓を貫いているはずである。

思考と鼓動の源を同時に断たれたドスランポスは一度痙攣すると、グッタリと地面に伏した。

頭と心臓から双剣を引き抜く。

頭の方がうまく抜けずに引っかかり、振り払うように無理やり抜くと同時に血が吹き出したが、拍動が止まった今ではそれも頼りない

勢いだ。

「はあ……………はあ……………はあ……………」

「お疲れさん」

「レイヴンさん……………」

岩から黒鎧のレイヴンが降りてきた。

背には前と同じようにカブレライトソードを担いでいる。

「……………この仕留め方は残酷だと思うか？」

レイヴンがドスランポスの惨めな死骸を見下ろして言った。

シエルクは首を振る。

「さすがにもう、慣れました。それに、ハンターとモンスターはこういう関係だと思えます。モンスターはこちらを殺す気で戦っているのですから、私達ハンターも同じように殺す気で挑まなければ……………中途半端な気持ちでは死んだモンスターに失礼だと思えます」

シエルクはそう言って双剣の血を払い、腰にホルドしながらドスランポスを見た。

その緋眼に哀れみの情など無く、ただ勝利の達成感が宿っている。

それを見たレイヴンはふと口元を緩めた。

「……案外、しっかりしてるんだな」

「そりゃ、レイヴンさんに師事するって決めたんですから、それくらい強い心を持ってなくちゃ!」

「……………」

……………一週間前。

「……………ボックス、お前が友達思いなのは頭が下がるよ。本当にな」

「え?」

カウンターで向かい合っていた2人が同時にこちらを向いた。

「レイヴン……………」

「レイヴンさん……………」

2人は、まさに蛇に睨まれた蛙のように立ち竦んでいる。

「……いつも言ってるだろ？俺は1人でしか狩りはやらない」

レイヴンがカウンターにいる自分とシエルクにそう言いながら、扉の側の木箱にどっさりと言掛け。

「別に今の所はソロで不自由してない。パートナーなどいらん」

不味い所を本人に見られてしまったが、逆になんとか説得をしようと試みる。

「だが……今回の岩竜狩りはシエルクと行ったじゃないか？」

「シエルクがいなきゃ骨髄の採取許可が下りないんだ。仕方なかったんだよ。別にいてもいなくても」

レイヴンが不意に言葉を切った。

口を嚙むと、なんとなくやりにくそうな顔をし、そっぽを向く。

ボックスはその不自然な様子を見、次に目の前のシエルクを見た。

「あ……………」

シエルクの頬を一筋の雫が伝った。

悲しいような寂しいような、よく分からない負の感情が心を蝕んでいくのがはっきりと分かる。

涙でぼやける視界に映るレイヴンの表情は分からず、ただ黒衣の無彩色ばかりが重く映えている。

「レイヴン、さん……」

己の口からこぼれ落ちた声は、消え入りそうに小さな声。

(レイヴンさん……あんなに楽しそうに一緒に狩りしてたのに……)

『別にいてもいなくても』

レイヴンの何気ない言葉は予想以上に自分の心を貫いていた。

嫌な沈黙が店内を支配する。

時間が泥の流れのように、ひたすら緩慢に進むような錯覚さえ覚えた。

レイヴンは、何も言えない。

ボックスは、何も言わない。

「ごめんなさい……私……」

重い沈黙を破るには小さすぎるような、消え入りそうな声でそう言い、涙を拭いながら扉に向かって駆け出した。

「あ、シエルク……!!」

カウンターにいるボックスの音が聞こえたが、その声は足を止めるに至らず、銅製のドアノブに手を掛けた。

しかし次の瞬間、その動きをつい止めてしまった。

ドアノブに掛けられた自分の左手を別の誰かが捕らえている。

「……」

ドアの側の木箱に腰掛けていたレイヴンは突差に立ち上がり、シエルクの腕を掴んでいた。

ドアノブに掛けられたその左腕に。

シエルクは涙を隠すように顔を伏せ、しかし素直に驚いた様子だ。

だが一番驚いたのはレイヴン自身だった。

シエルクが出ていこうとする姿を見て、体が反射的に動いていた。

去ろうとする人間を引き止める事など今まであっただろうか？

「その、なんだ……」
「ごめん……」

自分でした行為なのに、何がしたいのかわからないとは何とももど

かしい。

原因は自分の言動にあることは分かっているので、とりあえず謝った。

謝るためにその手を掴んだのだろうか？

……違う気がする。

「その……シエルクが嫌いだとか邪魔だとかいう意味じゃなくて……」

レイヴンは、もはや謝りたいのかどうかも分からなくなってきていた。

シエルクは顔を上げ、不安と寂寥と僅かばかりの期待が入り混じったような目でこちらを見上げている。

(そんな目で見られても……)

とりあえずもう一回くらい謝っておこうかと口を開こうとした時、バックスが沈黙を破る助け舟を出してくれた。

「ふふふ……珍しいね、レイヴンが女の子を引き止めようとするなんて」

「……語弊のある言い方をするな」

「何にせよ、レイヴンが珍しく反省の態度を示してるんだしシエルクも許してあげなよ」

珍しくはないだろ、と言いながらシエルクを見る。

「私は……許すとかじゃなくて……」

「いや、ハンター歴が元々違うのにあんな言い方したから……」

そんな2人を見て、第三者であるボックスは口元を緩めた。

「よし、じゃあこうしよう!」

ボックスがパン、と手を叩いて2人の注目を引く。

「2人の実力が違いすぎるなら近付ければいい」

「何をするんだ……」

訝しげな視線を向けるレイヴンに、ボックスは極めてにこやかな顔で提案した。

「シエルク! レイヴンに狩りを教えてもらおうといい! うん、名案だ!」

「却下」

レイヴンが冷たく提案を潰した。

「……なにゆえ?」

「……やっぱり私なんかじゃ……」

レイヴンは疑問のボックスも落胆のシエルクの声も無視して、ある物を指差す。

それはシエルクが腰に携えている双剣。

「片手剣から乗り換えたみたいだが……双剣は俺の専門外だ」

それを聞いて新しい事を考えたボックスはニヤリと笑った。

「でも意外ですよ〜」

シエルクがドスランポスの爪を剥ぎ取る。

メリメリと筋の切れる音と共に、ドスランポスの足から鮮やかなオレンジ色の鋭利な爪が引っぺがされた。

あまり気持ちの良い光景ではないのだが、まだ剥ぎ取りも上手くできないのでこうして監督しているのだ。

「……なにがだ？」

「レイヴンさんが双剣使えないなんて」

「……ウルサイ」

レイヴンがふてくされたようにそっぽを向いた。

そんなレイヴンの珍しい反応にシエルクはクスクスと笑う。

「なんだかレイヴンさん、どんな武器でも使えそうなのになあ」

「じゃあレイヴンも双剣の扱い方を訓練すればいい。いい機会じゃないか」

こんなボックスの提案を渋々受け入れたレイヴンだったが、実は双剣の扱いについてはシエルク以下だった。

一週間前、店でそれを聞いて大笑いしたボックスには鉄拳制裁が加えられたが、シエルクにはさすがに手は上げられない。

「俺だって万能じゃない。弓矢と狩猟笛も専門外だ。狩猟笛なぞソコ狩りじゃ大した効果は期待できんし」

「でも双剣持った時のレイヴンさんは笑っちゃいました」

「やめる、トラウマになる……」

事が決まり、ボックスはレイヴンがどれだけ扱えるかを見るために、双剣を渡して振らせてみたのだ。

……10秒後、レイヴンは両手に持つ別々の武器を同時に使うことができないことが分かった。

特に左の剣はほぼ振ってないに等しい。

何とか形になって見える右の剣の太刀筋も片手剣の流用だ。

「……だいたいな、人には向き不向きってものが……」

「だあくかゝらっ!!」

シエルクが急に振り返り、剥ぎ取ったばかりのドスランポスの爪の切っ先をビシッとレイヴンに向ける。

「2人で一緒に訓練するって決めたんでしょ？」

「……不本意だがな」

レイヴンが吐いた軽い溜め息は丘の爽やかな風にさらわれ、森に溶け込んでいった。

「破壊力の大剣と機動力の双剣……」

2人が帰り、誰もいなくなった店内でボックスがふと呟いた。

「各々の長所を生かしつつ、相互に短所を補い合える組み合わせだ……」

ふと、眼鏡を外した。

茶色がかった色の瞳には、いつものような人の良い笑みは皆無。

冷たくはないが、鋭い。

「レイヴン1人では無理があつたが、あの赤髪とならば……」

視線をあげた。

2人が去っていったドアを見つめる。

小さめの明かり採りの窓からは赤い夕日が差し込み、店内を鮮やかに染める。

そのオレンジ色の光は、ボックスの顔に暗い影を作り出していた。

その目線はさらに上がって天窓の向こうの夕焼け色の空を射て……

笑った。

天上から降り注ぐ夕陽は影を打ち消し、彼を柔らかな表情に戻す。

安堵の瞳。

紡がれた言葉は穏やかな声で……

「黒火竜を、処分できる」

「はい。ボーンシックルの派生型のチーフシックルだ」

カウンターのの上に新しい双剣が置かれる。

初級クエストをいくつかこなしている内に細々とした素材がたくさん集まっていたので、これを機にボーンシックルを強化しておいたのだ。

見た目はボーンシックルから大した変化は無いものの、その刃は見るからに鋭くなっていた。

「わあ……」

「ボーンシックルより斬味も威力も上がっているからね。もっと強いモンスターや甲殻種とも渡り合えるはずだ」

嬉々として新しい得物をブンブンと振っていると、いつものニコニコ顔で店内を整理していたボックスが尋ねてきた。

「シエルクは着実に双剣の腕前を上げているみたいだけど……レイヴンの調子はどうなんだい？」

シエルクはチーフシックルを振るのをやめて、ボックスに振り返った。

「レイヴンさんは、あー、えーと……」

互いに苦笑いしながら真実を語るのを躊躇していると、不意に店の扉が開いた。

黒衣。

「レイヴンさ……？」

違う。

黒い長衣を纏った女性だ。

年の程は50か60か。

ただの買い物客ではなさそうだ。

「グローリアさん？ 珍しいですね？」

ボックスの言葉には全く耳を貸さず、その女　グローリアは、コツコツと硬い靴音を響かせながら一直線にシエルクに迫ってくる。

シエルクの前で歩みを止めると、後ろに束ねた長い白髪が揺れた。

細い体をしているが、それは老人特有の痩せた細さではなく、引き締まった細さだ。

背丈はシエルクより少し高いくらいなのだが、シエルクを見る（と　いつか見下ろす）その眼光には厳しい光が宿っていて、見かけの歳にはそぐわぬ威圧感を持っている。

初めて会った人物なのに、強制的に上下関係が作られたような感覚。

シエルクが恐怖や畏怖より嫌悪感や不快感を感じていると、グローリアはふとその高圧的ですからある表情を緩めた。

さつきとは打って変わって、上品な貴婦人のような楚々とした微笑だ。

「……………あなたがシエルクさん？」

女性の割には低い声だ。

笑っているのはあくまで口元だけで、やはり目には鋭い光を湛えている。

そのギャップに言い得ぬ不安を感じ、シエルクが応えられずにいると、グローリアはシエルクの手元に視線を落とした。

「ボーンシツクル改……………いえ、チーフシツクルね。私も若い頃に使っていました。双剣の訓練の調子はどうかしら？」

「どうしてそれを……………？」

シエルクが驚きと同時に辛うじて搾り出した声に、グローリアがゆっくりに答えた。

「どうしてかって？……………貴女をずっと見ていたからですよ」

さも当たり前といった口調で言われたその言葉に、シエルクは得体の知れない恐怖を覚えた。

「見ていた」というグローリアの言葉が、シエルクには「監視していた」というある種の脅迫に聞えたからだ。

そこに、しばらく2人のやり取りを傍観していたバックスの音が交じる。

「……そりゃ、注目だつてされるよ。あのレイヴンが他人と狩りをするようになったんだからね」

「あれでいてレイヴンはこらじゃ名の知れたハンターでしてね。貴女と訓練をしている合間にクシャルⅡダオラを狩っていたりしていたんですよ?」

グローリアが「口元だけ」の微笑のまま、バックスの言葉を補足した。

クシャルⅡダオラといえば、別名「鋼龍」とも呼ばれる、所謂「古龍」に分類されるモンスターだ。

確かに強いのは知っていたが、レイヴンが古龍を狩るほどの実力者だったとはシエルクは全く知らなかった。

だが今はそんなことより気になることがある。

「あの……あなたは……?」

シエルクのおずおずとした声に、グローリアは笑みを濃くした。

「あら……自己紹介がまだでしたね。私の名前はグローリアⅡスラムスⅡギ・フィアット」

強い眼差しがシエルクの赤い瞳を刺した。

まるで「決して忘れるな」と命ずるかのように。

「この街の……フルスのハンターズギルドを統べるギルドマスター
です」

レイヴンが店の扉を開くと、入れ替わりに誰かが店を出て行った。

「あ……ギルドマスター？」

声をかけるとグローリアがゆっくりと振り返る。

「……レイヴンですか。良いパートナーを見つけましたね。」

それだけを告げるとグローリアは去っていった。

（シエルクのことか？　なんでまた……）

前々から行動の真意が読めない人物ではあるので、レイヴンはあまり深くは考えないことした。

改めて店内に入ると、こちらの姿を認めたシエルクが小走りで駆け寄ってきた。

「ああ、シエルク。来てたのか」

シエルクは返事もせず、俯いたまま無言で黒衣の裾を掴んでくる。

今日は、こちらの行動の真意も読めない。

「ボックス、何かあったのか？」

「グローリアさんが来ててね。どうやらシエルクが怯えちゃったみたいでさ……」

ボックスが苦笑しながら告げた。

「ん〜……まあ、確かにあの人は第一印象が良いタイプではないが……あれでも黒火竜の捜索に協力してくれてる人なんだ。あんまり怯えなくてもいいぞ？」

シエルクはやはり無言で小さく頷く。

こういうところを見ると、本当は見た目相応の十代の少女なんじゃないかと思うことがある。

まあ、本人が言う年齢を信じておこう。

「それよりレイヴン、コレを取りに来たんだろ？」

ボックスはいつのまにかカウンターの向こうに戻り、長大な包みを抱えていた。

それを見てレイヴンがニヤリと笑う。

「ああ。やっとできたか」

ボックスとレイヴンの間に白い布に梱包された、長さ2m半程の包み。

「……最強の大剣。基本コンセプトは話したね？」

カウンターに置かれた包みをボックスが開封していく。

「斬味はカブレライトソード以上。加えて複数の属性添加機能を兼ね備えること。お前が前に話してた機能だ」

「本当にそんなことが可能なんですか？」

俯いていたシエルクが驚いた様子で言う。

幾つかの例外はあるものの、斬味を求めるなら鉄素材、属性攻撃能力を欲するなら骨素材というのが常識である。

(それを同時に……？)

シエルクが驚いているその間にも、ボックスは包帯の様に幾重にも巻かれた布を丁寧に解いていく。

「ドンドルマにいた時にね、レイヴンにこう提案したんだ。『最強の大剣が欲しくないか』と」

シエルクにも分かるようにボックスが説明する。

「俺はその誘いに乗って多額の代金をボックスに払った。二年後にフルスで完成させるのを約束にな」

やがて、剣先から順に刀身が現れ始めた。

鏡のように磨き上げられた金属性の刀身。

「ベースになる大剣とシリンダーは前に見せたね？」

「ああ。ドラグライト鉋とカブレライト鉋の特殊合金だったな？」

刀身が完全に露出した。

大剣のわりには細めの刀身だが、その片刃の刃は岩でもスライスできそうなくらいに鋭い。

刀身の中心線には、大理石のように磨かれた光沢を持つ岩石質の素材の何かの機構が組み込まれている。

そしてついに全ての包みを取り払われた。

刀身の根元とグリップの間には、ガンランスに使われるような巨大な8連装シリンダー（回転式弾倉）が、その底部にはリボルバー式拳銃のようにハンマー（撃鉄）が装着されている。

それはちょうど、以前にレイヴンが見た時に補強板が打ち込まれていた箇所だ。

グリップには黒い大型のハンドガードが装備されていて、その素材は恐らくグラビモス亜種の甲殻だろう。

「おお〜……」

今までのどの大剣にも似ていないその大剣の姿に、2人が感嘆の声をあげる。

「……このシリンダーはね、勿論、弾丸を発射する機構じゃない。バレル（銃身）もないしね」

ボックスが指したシリンダーは少し下向きに装着されていて、確かに弾を撃ち出す機能は無いようだ。

「このシリンダーは剣の中心線に対して138度/42度の角度で装着されていて、その先は『浸透機構』に接続されている」

シリンダーと刀身の中間に存在する、何かの機械装置をボックスが示す。

「浸透機構？」

「順を追って説明するよ。浸透機構はそのまま『末梢浸透髓』に接続し、剣先付近まで達する」

浸透機構に置かれたボックスの指がツツと剣中心線を貫く岩石質

の機構を、剣先の末端まで辿った。

「え……髓……？」

シエルクの声に、ボックスが微笑む。

「気付いたかい？ この末梢浸透髓には、あの岩竜の骨髓が使われているんだ」

次にボックスがグリップ側部のリリースレバーを操作すると、大きなシリンダーが横にスイングし、薬室が現れた。

「シリンダーは直径300mm、全長500mm、弾室直径120mm、左回り・8ホール・サイドスイング式」

「デカいが構造は標準的だな」

「そしてこの薬室に装填するのが……これだ」

ボックスが取り出したのは、ガンナーが使うボウガンの弾に良く似た物だった。

骨製の薬莢に発火装置の雷管。

しかし弾頭となる物の代わりに真鍮製の円筒が差さっている。

「『挿薬子』だ。カラ骨の薬莢の中身はボウガンの弾と同じ炸薬と雷管だが、先つぼの円筒の中に充填するのはこれらだ」

そう言って今度はカウンターの下から幾つかの薬瓶を取り出す。

剣の横に並べられた色とりどりのそれらの液体の名前をレイヴンは全て知っていた。

それらはハンター達にとって至極ポピュラーな物だったからだ。

「火竜の体液、雷光エキス、毒袋の抽出液……そうか……」

レイヴンの頭の中でキーワードが繋がりはじめ。

高熱や低温に耐えうる強靱な刃。

状態異常を引き起こす攻撃を持ちながらも自らは状態異常を起こさない、バサルモスの骨髄。

そして『浸透機構』と『末梢浸透髄』。

「そう。この大剣は、炸薬爆発の圧力によってこれらの属性特性を持つ薬品をモンスター素材によって作られた浸透機構に圧縮注入し、更に末梢浸透髄を媒体として金属製の刀身自体に属性を付加させることのできる、可変属性型機械大剣なんだ」

ボックスが得意げに言い切った。

レイヴンは感心した様子で大剣を再び見つめ直しているが、シエルクの頭の中はクエスチョンマークで一杯である。

「えーと……？」

「……なんだ？ お前は頭の中まで10代で止まってんのか？」

「そ、そんなことないですっ!!」

シエルクはむきになって頭を働かして、ボックスの言った説明の意味を理解しようと再度試みたが、かなり早い段階で話を見失っていた。

「むう~~~~~」

悩むシエルクを見てボックスが苦笑しながら、簡単に説明し直してくれた。

「つまりね、これらの薬品を使うことによつて、無属性のこの大剣に様々な属性を付加させることができるんだ。その役目を果たすのが『浸透機構』と『末梢浸透髓』ってわけ」

「ああ、なるほど。さすがボックスさんですね!」

やっと理解できたシエルクが感心していると、レイヴンが大剣を手を取った。

両手で持ち上げられたその長大な刃は、天窓からの光を燦々と浴びて煌びやかに輝いている。

「刃だけでも2m以上あるからね。シリンダーのせいで重量バランスも偏ってるから、使いこなすのは難しいはずだよ」

真っ直ぐに天井に向かって伸びる煌びやかな白刃を見、レイヴンがにやりと笑った。

「良い大剣だ……使いこなしてみせる」

「この大剣、名前は何ていうんですか？」

シエルクの問いに、ボックスは己の鍛え上げた剣を眩しそうに見つめて言った。

「名は……『パーヘリオン』。相容れぬ二つの力を封じた、僕の最高傑作だ」

パーヘリオン Parherion。

意味するのは、『幻日』。

黒き災厄を焼き殺す、灼熱の双陽の名を冠する最強の剣はこうして生まれた。

「うっ……重いっ……」

旅人やハンター、行商人で溢れる昼下がりの大通り。

広い通りに敷き詰められた石畳の上には所狭しと露天や屋台が並び、日用品から見慣れぬ骨董品、異国の品物までありとあらゆる商品が売られている。

ツコビヤ大橋とイリユーセ大橋を擁し、北は中央レンベル地区と接する南レンベル地区　その露天大通りの雑踏の中にレイヴンとシエルクはいた。

「次は雷光エキスだな。小瓶5つも買えば事足りるか」

「……おっもっいっ!!」

「あ、トラップツールがあと2、3個しか無かったな。買い足しとかなきゃ……」

「おっもっ、痛っ!!」

振り返りもせず、レイヴンはパートナーの頭をはたいた。

「何するんですかレイヴンさん!!　こんなか弱い女の子に!!」

「よく言う……ハタチ過ぎたら“子”は取っとけ阿呆」

「もう……レイヴンさんが珍しく面白い物に誘ったから来たんですよ？　なのに荷物持ちさせるなんて……」

シエルクは両手に、パンパンに膨れた大きな紙袋を抱えている。

その中身はそこら中で買い集めた多種多様な薬品やカラ骨で、パーヘリオンの挿薬子の材料だ。

「1人じゃ持ち切れなくてな。うん、やっぱり持つべきものはパートナーだな。バックスも案外、間違ったことは言っただけなんだなあ」

「なんか……ちょっと違う気がします」

シエルクの懨然とした声を聞き、レイヴンは笑いながら歩く。

「違うない違うない。たく……そうふてくされるなって。どっかで埋め合わせはしてやるから」

「絶対ですよ！？」

シエルクと他愛もない会話を続けながら雷光エキスの小瓶を幾つか買う。

実際、シエルクと話しているとつまらないことは忘れて楽しく過ごせるので、さっきの言葉はあながち嘘じゃない。

我ながら、ほんの数ヶ月前とはエライ変わり様だと思つ。

「……それはそうとシエルク」

「なんですか？」

振り返り、紙袋に埋もれるほど小さい赤髪の同伴者に話し掛けた。

「リベンジ、しないか？」

「リベンジ？ なんのことです？」

シエルクが首を傾げる。

買った雷光エキスの小瓶をシエルクの持つ紙袋に放り込んだ。

「重……」

「怪鳥だよ怪鳥。イヤンクック」

「イヤンクック……」

シエルクの顔から微かに血の気が引く。

フルスに来たときに散々にやられたのをやっと思い出したらしい。

「えーと……まだ、早いんじゃない？」

「何言ってるんだ。いつまでも鳥竜の相手しててもしょうがないだろ？ レベルアップしてかなきゃ」

「うーん……私に倒せるでしょうか……？」

「あのな、シエルク。倒せるか倒せないかじゃない。強い飛竜と戦うこと自体がレベルアップに繋がり、経験を積むことになるんだ。一步先の目標に挑戦し続けることでハンターとしての力は磨かれていく。勝てる相手に勝ち続けるのも大事だが、勝てない相手に勝てるように努力する方がもつと大事なんだぞ？」

レイヴンが先輩ハンターらしく説くと、シエルクはしばらく思索した後、頷いた。

「……わかりました。イヤンクック狩りに挑戦してみます！」

「よし！！ そうと決まれば集会所行くぞ集会所！！ 二頭狩り申し込みに行くぞ！」

「……なんで二頭狩りなんですか？」

「一頭はパーヘリオンの試し斬り用だ！ ずっと使いたかったんだよな〜」

レイヴンは軽い足取りで、南レンベル地区の南西にある集会所に歩き始めた。

「そっちが目的だったんですね……」

嬉々として集会所を目指すレイヴンを追いながら、“試し斬り”に使われるイヤンクックがなんだか不憫に思えてくるシエルクだった。

「んじゃ、死なない程度に頑張れよ」

「レイヴンさんもキャンプ送りにされないように頑張ってくださいね」

「それはこっちの台詞だっつーの」

眩しい陽光が降り注ぐ密林に着いたレイヴンとシエルクは砂浜にキャンプを設営して装備を整えた後、各々が目指すエリアに走り始めた。

黒鎧の大剣使いが、白い砂浜が広がる海岸線を軽快な足取りで駆けて行く。

レイヴンは島を左回りに周回してイヤンクックを搜索、シエルクは、島中央に位置し飛竜が住処として使うことが多いエリア6付近を搜索することになっている。

今回のクエストは付近の辺境の村から依頼されたもので、原種と亜種が一頭ずつ出現したらしい。

自分とシエルク、どちらがどちらのイヤンクックに出会うかは分か

らないが、師匠(?)としてはシエルクにはまず原種を討伐させたかった。

行動範囲が原種より広い亜種の方が島の外縁に出現しやすいと考えた結果、自分が島の周りを搜索することにしたのだ。

「まあ……殺されることは無いと思うんだが……」

双剣についてだけ言えば、シエルクは自分より遙かに上達している。

この間など、火山のクエストでドスイーオスに圧勝したと言って嬉しそうにバックスに語ったという。

同時期に双剣を使い始めて未だにドスランポスに苦戦する自分とは雲泥の差だ。

だからといって自分に何も得るものが無かったかといえ、そうでもない。

長い間大剣しか使ってたから分からなかったが、一撃の攻撃力や斬味よりも手数の方が必要となる場面も決して少なくないのだ。

(破壊力と機動力を一つの武器に備えるのは難しいが……使い手が二人いればそれは容易い。2つの武器にそれらの力を分担させればいいからな)

(2人なら黒火竜も……)

言いかけてやめた。

笑って首を振る。

「私怨に他人を直接巻き込むわけにはいかないな……と、いた!!」

ちょうどエリア3に差し掛かった時、少し先の熱帯植物の茂みの中にその大きな影が見えた。

そして顔をしかめる。

「……まずいな……こっちに原種が来ちゃったか」

ジャングルの茂みの中から現れたイヤンクックは鮮やかな桃色の甲殻を纏った原種だった。

予想は、外れた。

「ま……仕方ないな。とりあえず……」

背の得物の柄に手をかけ、ゆっくりとホールドを外した。

敵との距離は直線距離で約100m。

まだ気付かれてはいない。

「……試し斬りはさせてもらおうか」

シリンダーには「硬化」の挿薬子と「雷」の挿薬子が四発ずつ装填されている。

「……よし」

初弾位置に「雷」の挿薬子があることを確認すると、踏み出した。
ジャングルの湿った土を蹴る。

疾走開始、80m。

ふと、フルスに来た時の場面を思い出す。

(あの時はアイツの前にシエルクがぶっ倒れてたけどな)

接近50m。

そのシエルクは今、双剣使いとなって同じ密林で怪鳥と戦っている。

(……まさか俺のパートナーになるとまでは思わなかったけど)

笑みをこぼす。

嫌な気は、しない。

接敵30m。

(……そういえば、あの時はこうしてたっけな……)

走りながら右手だけでパーヘリオンを右肩に支え、左手でアイテム
ポーチを探る。

(……あった)

左手には紙に包まれた玉。

肉迫10m。

遂にイヤンクックが気付いた。

翼をばたつかせ、襟巻き状の耳を全開に開いて驚きと威嚇を同時に表す。

「……相変わらず遅えな、バカ面飛竜」

パーヘリオンを右肩に載せたまま振った左手から放たれた閃光玉が、二者の間で炸裂し、眩い光が視界を埋める。

その僅かな隙に、両手で得物を握り、グリップ部にあるトリガーを引いた。

トリガーに連動した撃鉄がスプリングの力によって高速で下ろされ、シリンダーの薬室に収められた挿薬子の後ろの雷管を思い切り叩く。

発火、「雷」属性添加開始。

光が消え、視界が晴れる。

「うおおっ!?!」

右肩から袈裟斬りに振り下ろそうとしたレイヴンは思わず叫んだ。

自分の後頭部に、針が刺されたような鋭い痛みが走ったのだ。

痛みが脳天を貫ぬき、髪がピリピリと逆立つのが分かる。

耐え、振り下ろした。

「っ……!？」

レイヴンが見たのは振り下ろされた白刃でも怪鳥の鮮血でもなかった。

至近距離の落雷。

紫電、爆音、そして衝撃。

体が宙を舞っているのが分かる。

ほんの僅かな時間だが意識が飛んだ。

「痛……うあ……」

地に転がり、本能的に立ち上がろうとするが、目眩と平衡感覚の狂いで再び臥した。

何が起こったかいまいち理解できないが、明滅する視界からでもはつきりしていることが一つ。

10mほど先に、大きな口を全開にして、異臭を放つ煙を吐くイヤンクツクの屍が転がっている。

左翼の付け根から胸にかけて斬撃痕が刻まれていて、時折、痙攣し

ていた。

「おいおい……」

レイヴンはなんとか立ち上がって木にもたれかかった。

いくらイャンクックでも一撃食らった程度で昇天することはないだろう。

攻撃した際の、強烈な雷光が脳裏に鮮やかに蘇る。

（まさかパーヘリオンの雷属性添加で……）

ふと足元を見ると、件のパーヘリオンが転がっていた。

レイヴンが見下ろした磨き上げられた刃は一度だけ、その身に細くて青い電流を走らせたが、それだけ。

恐る恐る持ち上げてみたが、感電はしなかった。

「一発で……飛竜を……」

レイヴンは今、手にしている大剣を頼もしく思い、同時に恐怖を感じた。

刃は何も語らず、悠然と晴れ渡る青空を映している。

まるで、「それがどうした？」とでも言いたげな金属光沢を放ちながら。

「……………」

エリア6に到着したシエルクが見たのは、巣の中央で丸まり、寝息をたてているイヤンクックだった。

一頭はエリア6にいるというレイヴンの予測は一応、当たったのだ。

だが今、目と鼻の先で熟睡しているのイヤンクックの色は、青。

怪鳥の亜種。

「うーん……………まさか青イヤンクックに当たるなんて……………」

原種よりも亜種、亜種よりも希少種の方が戦闘力が高いのはハンターの常識だ。

それはイヤンクックにも無論、例外なく当てはまる。

後でレイヴンさんの助けを借りるのが無難かな……………？

そう思った矢先、熟睡しているはずのイヤンクックに異変が起きた。

うつすらとその眼を開いたのだ。

刹那、足が動いた。

それは条件反射の類に近い動き。

シエルクは一瞬自分の行動に戸惑い、しかし、次の瞬間には動きに心を委ねた。

疾走感は心地良くさえある。

両手には剣を。

視線は怪鳥に。

足は唯、前へ。

そして、跳躍。

「たああああっ!!!!」

イヤンクツクの睡眠からの覚醒と同時に、第一撃が振り下ろされた。

「生きてっかな、シエルク」

草木の生い茂る密林の道を、出来る限りの速さで駆け抜ける。

“人工落雷”による目眩とふらつきが回復した後、レイヴンはシェルクがいるであろうエリア6に向かっていった。

「くそ……バックスめ、アイツは使うヤツのこと考えて武器作ってるのか!？」

「雷」の装薬子はあの一撃の後、効果が無くなっていた。

つまり数分かけて消費していくはずの強力な属性攻撃力を一瞬の内にイャンクックに叩き込んだのだ。

「そりゃ飛竜でも死ぬわな……お、まだ生きてるな」

……先ほどから密林に響く剣戟の音が、シェルクの唯一の生存の証しだ。

そして、それが次第に大きくはつきりと聞こえ始めたことは確実に近付いている印である。

「やっぱりエリア6か。……こっちの予想は当たったわけだ。」

皮肉だな、と呟きながら、行く手を遮っていた亜熱帯植物の枝束をパーヘリオンで寸断する。

直後、いきなり視界が開けたと思うと2、30m離れた所にいる青いイャンクックが目に入った。

その影にいるシェルクは必死で双剣を振るいながら攻撃を回避している。

「シエルクッ!!」

パーヘリオンを構え、シリンダーに残っている『硬化』の挿薬子を刃身に叩き込もうとトリガーに手をかけた時、シエルクがレイヴンに気付いて叫んだ。

「だめですっ、レイヴンさんっ!!」

禁止を示す言葉に、反射的に人差し指の動きが止まる。

「きゃ……………!!」

注意がレイヴンに逸れた際にイヤンクツクの突進をシエルクはモロに受け、吹き飛ばされた。

それを見たレイヴンはトリガーに指をかけて、パーヘリオンを構えたまま拘泥する。

「大丈夫です……………!!」

シエルクは何とか立ち上がり、イヤンクツクに向き直る。

イヤンクツクの方も無傷というわけではなく、体中、取り分けその鳥のような脚部には生傷がいくつも見られた。

脚を攻撃して転倒させるといふ、双剣特有の攻撃方法をシエルクが実践できている証である。

「私にだって……………ハンターとしてのプライドがあります!!」

ブレスを回避しながらシエルクは話す。

視線はイヤンクックから離さない。

「できるだけ助けを借りないで戦いたいです!!」

ブレスが終わったのを見計らい、シエルクが突進をかける。

「それに……私だってレイヴンさんと一緒に……!!」

不意に繰り出された尻尾の一撃を屈んで避ける。

そのまま脚部に攻撃開始。

接近戦を嫌ったイヤンクックが豪快に羽ばたいた。

その風圧に圧され、攻撃は中断する。

強風になびく真紅の髪は、燃え盛る炎を思わせた。

それはシエルクの内に燃え上がる闘争本能を顕しているのか。

イヤンクックとの間合いが開く。

「一緒に狩りをしたいんです。だから……足手まといにならないようにしたいから……だから……!!」

イヤンクックが翼を広げ、鳴いた。

その脚爪で土を巻き上げながらシエルク目掛けて突っ込んでくる。

「……一人で狩らせてください!!」

シエルクが走り出した。

真っ正面に迫るイヤンクツクに向かって。

「……わかった」

シエルクがイヤンクツクの攻撃を紙一重でかわし、すれ違い様に一撃を喰らわせる。

シエルクが振り返った時、そこに見えたのは勢い余ってヘッドスライディングしている怪鳥だけで、師でありパートナーである黒鎧の男はいなかった。

シエルクは不意に、一瞬だけ寂しさと不安を覚えたが、慌てて心からそれらを払拭する。

「頑張らないと……!!」

双剣を握り直し、転がっているイヤンクツクを追撃するために駆け出しました。

この岩壁の上に座ってから、どれくらい経ったのだろう。

レイヴンの視線はずっと、直下の怪鳥の巣で戦う二者に向けられていた。

シエルクが怪鳥に攻撃を仕掛けようとするが、怪鳥は尻尾を一振りしてそれを阻止する。

しかし怪鳥もふらつく脚では尻尾の回転を制御しきれずによたつく。

そこにシエルクが再度攻撃をする。

だがこちらの疲労もピークに達していて、繰り出した攻撃に鋭さは見られない。

そんな戦闘がずっと続いていた。

「……善戦してるな、シエルク」

決め手にはかけるものの、着実にイヤンクツクの体力は削られていき、傷は増えていく。

いつの間にか日は沈みかけていて、密林の内部に位置するエリア6は薄暗くなってきた。

紫がかった洛陽の残滓が黄昏の密林の緑を照らし、響く剣戟の音と、赤と青の色彩。

見守るのは漆黒と幻日。

やがてイヤンクックが戦闘を中断し、片方の脚を引きずりながらエリア6を去ろうと逃げ出した。

しかし狩人は獲物の撤退を許そうとはしない。

極度の疲労でふらつく足に鞭打ち、背を向けて退こうとするイヤンクックを追撃。

地面に垂れ下がる尻尾を足がかりに、一気に怪鳥の背中に駆け上がった。

「おお……また大胆かつ型破りな……」

怪鳥はそれに構うことなくそのまま羽ばたき始め、シエルクを載せたまま徐々に高度を上げ始める。

舞い上がっていくイヤンクックの背で振り上げられた双剣の刃が、没する直前に放たれた一欠片の夕陽に輝き、その光は容赦なく振り下ろされた。

イヤンクックは一度空を仰いで嘶いたが、次の瞬間には翼の力は抜

け、背に載せたシエルクもろとも墜落を開始。

シエルクは赤い髪を風になびかせ、突き刺した双剣を引き抜くことも忘れ、大きな達成感と爽やかですらある疲労感、そして心地良い落下感に全てを委ねていた。

「……………んうん？」

眩しい、というほどでもないが、久々の光が目には滲みる。

太陽光ではないようだ。

起きがけ独特の倦怠感を感じながら、重い瞼を開いて光を許容する。

まず見えたのは防水布の天井と、吊されたランプだった。

どうやらキャンプに設営されたテントの簡易ベッドで眠っていたらしい。

「目、覚めたか？ お嬢さん」

上体を起こして、声の主を探す。

黒衣のハンターは椅子に座って本を呼んでいた。

「おはようございます……」

「礼儀正しいな。だが、今は夜だ。しかも真夜中」

レイヴンは分厚い本から目を離すことなく受け答えをしている。

シュリフトトゥルムでよく読んでいた学術書や歴史書ではないようだ。

「あの……わたし、イヤクックを倒したんですか？」

「背中飛び乗って首ぶっ刺したの覚えてないのか？」

「あ、いえ、ちゃんと覚えてますけど……なんだか信じられなくて……」

「倒したよ。しかもいきなり亜種だ。チーフシックルなんかでよく狩れたな？」

「そっか……私一人で狩れたんだ……」

実感が湧いてくると自然に頬が緩んだ。

不思議な高揚感に気持ちが高ぶる。

「……どっかの誰かさんがぶっ倒れたから街に戻るの諦めて、ここまで運んで一人でテント設営したのは俺なだけだな」

「え？ あ、すみません！」

そういえば、記憶はイヤンクックと墜落する直前までしかない。

いつかの岩竜狩りの時のように運ばせてしまったらしい。

やっぱり防具と双剣はベッドの側に整理して置いてある。

レイヴンは随分と長い間読者をしていたらしく、本に栞を挟んで文机に置き、体を伸ばしていた。

ふと気になって本をしてみる。

「よん……みゃこ……」……かなで？」

「あん？」

レイヴンが怪訝な顔でこちらを見た。

……読み方は違ったらしい。

「何か今、不可思議な呪文をかけられた気がしたんだが……」

「……違うなら違うって言えばいいじゃないですか」

「“しとこ”そう”だよ。よく見えたな？」

ベッドから文机までは結構、距離がある。

レイヴンが驚くのも無理はない。

「子供の頃から視力にだけは自信があるんですよ」

昔はよく、空高く飛ぶ鳥の名前を言い当てていたものだ。

「リリアは標高が高いからな……もしかしたらハイランダー（高地民族）の血が混じってるのかも……ふぁ……」

そう言いながらレイヴンは大きな欠伸を一つして、荷物から毛布を引っ張り出した。

「あれ？ ベッドで寝ないんですか？」

「ベッドを占拠しながら言う言葉か？それとも何だ、その小さいベッドで添い寝しようというお誘いか？」

レイヴンは引っ張り出した毛布を肩にかけながら、天井に吊されたランプを取った。

「え？ あ、い、いえ、そういうつもりじゃなくて……」

「……冗談だよフロイライン」

そう言って笑うと、ふっとランプの火を消した。

テントの中が闇で満たされる。

シエルクはいきなりの視界の変化に頭がついていけず、少し慌てた。

「ね、レイヴンさん？」

「おやすみ〜」

柱の付近で衣擦れの音が聞こえ、レイヴンが柱にもたれ掛かって眠りにつこうとしているのが分かった。

「……そういえば、そっちのパーヘリオンの試し斬りはどうだったんですか？」

ふとレイヴンの方の怪鳥狩りの目的を思い出し、尋ねてみると、暗闇から疲れた声が返ってきた。

「……確かに最強の殺竜兵器でもあるけど殺人兵器でもあったよ。危うく感電死するところだった……」

それだけ属性添加が強力ということなのだろう。

「やっぱり……ボックスさんの言うとおりパーヘリオンはすごい武器なんですわね」

「ああ……性能面では申し分ないが、威力を抑制しなくちゃ使い物にならないな……明日は朝一でフルスに帰ってボックスにクレームつけにいかなきゃならん……お前も早く寝ろよ？」

「はい……おやすみなさい、レイヴンさん……」

仕方なく、自分も毛布にくるまって眠りについた。

深夜の密林に1人の女が佇む。

夜を照らすはずの月光は雲に遮られ、密林にほとんど光は無い。

女の目の前には青い怪鳥の骸。

「……順調、ですね。」

雲の切れ間から月光が射した。

束の間の光は女の顔を照らす。

顔が光に照らされ、逆に影も落ちる。

女　グローリアは月を見上げて言った。

「あと少しで最後の仕事を終わりますね。……私の手で片付けられないのがもどかしいですが」

グローリアに睨まれた月はまた厚い雲に隠れてしまった。

再び暗闇に包まれた密林で呟く。

「もうすぐ……もうすぐで黒火竜を処分できますね……」

「チーフシックルの派生？」

お世辞にも広いとは言えない空間に、鎚や鑿の音が響く。

鉄を溶かす大きな炉や作業台、製図台などがあり、鉱石や竜骨などがそこから中に散らばっている。

「そうだねえ……チーフシックルは主に5系統に派生させることができるんだ」

ボックスがいるのは鍛冶屋の奥にある武器工房。

作業台でクックメールにするためのイヤンクックの甲殻を加工しているのだ。

シエルクは作業台の傍の椅子に座って防具が製作される工程を見学中である。

初の怪鳥討伐から数週間でイヤンクックを狩れるようになったシエルクが素材を持ち込んで防具作製を頼んだのだ。

「まずは鎌蟹 ショウグンギザミの素材を使うブレイドエッジ。属性付加は無いけど、斬味は最初から高い水準にある」

カブレライト鉱で作られた鑿の刃が、甲殻を柔らかな生木のように削っていく。

ボックスは手を休めずに言葉を繋いだ。

「次に、黒狼鳥・イヤンガルルガの素材を使って強化するテッセン。……ちょっと素材入手の難易度が高いかな？」

黒狼鳥と言えば、フルスに来た時に鱗は見たことがある。

確か市場でレイヴンと歩いていた時だ。

今思えば、あの時レイヴンが“黒い鱗”に反応したのは、黒火竜の鱗だと思ったからだろう。

上位のハンターでさえ苦戦することがあるという黒狼鳥は腕前に少々つらい。

「あとはクックツインズかピンクボンボンかガノカットラスかな……」

「どんな武器なんですか？」

「クックツインズとピンクボンボンは名前の通りさ。クックツインズはミニサイズのクックの頭が付いた双剣だよ。エリマキのところが刃になってるんだ。ピンクボンボンはコンガの毛がフワフワと付いてて……」

「へえ……面白そうですね！」

「どっちもシエルクが持つと可愛いと思うよ〜」

ボックスは、素材入手が簡単なこの2つを推すつもりで言ったのだが、シエルクは逆に顔をしかめた。

「……じゃあ、いいです」

「な、なんで？」

可愛いと言われて気分を害する女の子はそういないはずである。

しかしシエルクの場合は、その常識が通用しなかった。

「またレイヴンさんに『ガキ』だとか『子供』とか言われるのがオチですから……」

原因はレイヴンだったらしい。

身長が低く、顔立ちが幼いため、事あるごとにそう言って笑われているのだから。

シエルクの言葉に、ボックスは苦笑。

「レイヴンは相変わらずだなあ。素直に可愛いと言えはいいのに……」

「歳は4つしか変わらないのに……何かにつけて過保護に子供扱いするんですよ!？」

「まあまあ……」

胸当の厚みを確かめながらボックスがシエルクをなだめる。

「放っておけないくらい…それだけ大事に思われてるってことだよ。」

ボックスの言葉に、シエルクは一転して頬を紅潮させる。

無論、ボックスは『弟子として』という意味で言ったのだが。

「ち、違いますよ！ だって……」

シエルクの勘違いを承知でボックスは小さく笑いを漏らした。

「ふふふ……違うない違うない。ガノカットラスの説明がまだだったね。ガノカットラスは水竜　ガノトトスの鱗と砂竜　ガレオス種のヒレを刃に用いた双剣だ。片手剣で同じ素材を使うスリープシヨテイルが睡眠属性を持つのに対して、こちらは水属性を持っている」

「水属性……」

「レイヴンが持つパーヘリオンは複数の属性添加ができる万能性を持つてはいるけど水属性は属性素材が見つからなくてね…。レイヴンの補佐をするならガノカットラスは打ってつけだよ」

シエルクは頬に手を当てて考えている。

素材の入手難度から見ればテッセンは最も難しく、次いでガノカットラス、ブレイドエッジ、クックツインズ、ピンクボンボンと続くだろう。

だがシエルクの心は実は今さっきのボックスの言葉でほとんど決まっていた。

(レイヴンさんの役に立ちたいですから！)

「……ガノカットラスにします！」

「水属性を取ったね。悪くない選択だ。だけど素材入手が少々困難だよ？」

ボックスによれば、必要な素材は水竜の鱗が4枚、砂竜のヒレが2つ、キレアジが4尾だそうだ。

砂竜のヒレについては、訓練のクエストで狩ったガレオスの素材があるし、キレアジは市場に行けば買える。

問題は水竜の鱗だった。

加工を施さずに乾燥させると脆くなる性質を持つ水竜の鱗はあまり流通しないのだ。

それにハンターたる者、武器の素材は極力己の実力で入手したいもの。

レイヴンに言わせたら、おそらく「水竜などまだ早い」と一笑に臥すだろうが、だからこそ手に入れて驚かせてやりたい。

「……よし……！」

椅子から勢いよく立ち上がったシエルクを横目でみながら、バック

スは微笑んだ。

「お、やる気になったね。ガノトトスは怪鳥なんかよりも遙かに強いからね。気をつけなよ」

「はい!」

ガノトトスが怪鳥より高位にある飛竜であることは分かっている。

怪鳥と水竜の間の、踏むべきステップを飛ばしていることも。

「レイヴンさんにこのこと言っちゃ駄目ですからね!」

「はいはい。でもクツクメイルができてからでも遅くは無いんじゃないかな?ガノトトスの一撃はイヤンクツクよりかなり痛いよ?」

「大丈夫ですよ! 『当たらなければどうということはない』って
という言葉もありますし!」

「……赤い彗星?」

「じゃ、行ってきます!」

「あ、ああ、いつてらっしやい……」

元気に工房を出ていくシエルクの後ろ姿を見送るボックスは少しばかり不安になったが、すぐに作業に戻った。

「ま、あの人が止めてくれるだろう……」

「んん」と……」

南レンベル地区の集会所に足を運んだシエルクは、依頼されたクエストが張り出される掲示板の前にいた。

素材採集ツアーから古龍討伐依頼まで、様々な募集チラシが所狭しと張り出されている。

「……あつた!」

シエルクがパツと顔を輝かせて一枚のチラシに目を留めた。

夜の密林での水竜討伐クエスト。

契約金は450z、報酬は5400z。

難易度を表す は4つだ。

(4くらいなら頑張れば……)

そう思い、チラシを取るうと手を伸ばす。

「むう~~~~」

高いところに貼られたチラシに、爪先立ちになって精一杯手を伸ばすが、それでも届かない。

シエルクは、こんな時ほど自分の身長の高さが恨めしく思うことはなかった。

ピョンピョンと飛び跳ねてやっと指先がかするぐらいだ。

周りからは“少女”の微笑ましい仕草に対する温かな視線が向けられていたが、当人はチラシに必死で気付いていない。

「あ、と、ちよっ、とっ!」

だから、真後ろに誰かが立ったことにも気付かなかった。

シエルクの背後から音も無く伸びた手が、チラシを掲示板から事も無げに取る。

「あ……」

シエルクが驚いて振り返ると、そこにいたのはグローリアだった。

反射的に背筋が伸び、シエルクの体に畏怖の念と緊張が駆ける。

集会所にいた他のハンター達も、ギルドマスターの登場に、言い知れぬ緊張感を感じた。

グローリアの、微笑みながらも鋭さを秘めるその眼差しが、取ったチラシを眺めた。

「巨大湖の主……水竜・ガノトトスの討伐クエストですか。」

「……………」

グローリアがシエルクに視線を移す。

目を逸らしたいのに、それが許されないような、そんな視線。

「お久しぶりですね、シエルク。このクエスト、貴女にはまだ早いと思いますか？」

「……………」

シエルクは気丈にもささやかな抵抗を試してみた。

文字にすれば2文字の、本当にささやかな抵抗である。

「……………」

シエルクの抵抗は、グローリアの放つプレッシャーと攻撃的なオラの前に易々と潰えた。

「貴女はついこの前、イヤクツクを狩ったばかりでしたね。……飛竜は貴女の経験の浅さなど考慮に入れることなく攻撃してきますよっ。」

「はい……ですけど……」

「貴女に抗う力はありますか？」

あくまでも貴婦人のような優しげな微笑を張り付けたまま、問うてくる。

いや、一方的に押さえつけてくる。

まるで“勝手な行動は許さない”とでも威嚇するかのよう。

自分の思慮が浅くて、それを諫めたのは分かるが、どうもそれ以外の思惑も感じるのだ。

シエルクにはその思惑が何であるかは全く分からないのだが。

「おおかた、チーフシッケルの強化の為の素材採集でしょう。もっと実力をつけてからか、レイヴンと一緒になさい。フルスのギルドマスターとして、貴女のこのクエストの単独受注は禁止します」

それだけをいうとチラシを元の場所に貼り直し、グローリアは集会所の奥に去っていった。

まるで魔法が解けたかのように、集会所にハンター達の喧騒と活気が戻ってくる。

シエルクも緊張が抜け、掲示板の前に突っ立っていた。

「シエルクちゃん……ギルドマスターとも知り合いだったの？」

赤と白の制服を着たギルドの受付嬢が、掲示板の前で固まっていたシエルクに話しかけてきた。

彼女は、この集会所でクエスト受注の受付をしている受付嬢の1人で、名をセシリアという。

クエストのことで何かと世話になっている同い年の友達の1人だ。

「あ、セシリア……うん。知り合い……といえは知り合いかな……」

「昔はすっごく強い双剣使いだったって噂よ、あの人。なんでもまだ現役だったころは、この街を襲った古龍を1人で撃退したとか」

「そんな強い人なんだ……」

「それにしてもシエルクちゃんは色んな有名人と知り合いよね」。

“漆黒の衝風”や“竜鎧の毀ち手”だけじゃなくて“灼雷の迅光”とも知り合いなんてね」

「そんな〜、成り行き上知り合っただけだよ」

セシリアの言った三つの通り名は、“漆黒の衝風”はレイヴン、“竜鎧の毀ち手”はバックス、“灼雷の迅光”はグローリアの称号だ。

レイヴンやバックスは普段何気なく付き合っている友人だが、ここらでは名の知れたハンターであり、武器職人なのである。

「しかも〜、この頃は“漆黒の衝風”と何だか良い雰囲気らしいじゃない？シエルクちゃんもなかなか侮れないわね」

「ね、レイヴンさんはただのパートナー！！ 何でもないんだから！！」

「はいはい　そういうことにしといてあげるわよ。ま、頑張りなさいよ」

「もお〜〜……」

手をヒラヒラ振りながらカウンターに戻っていくセシリアを睨むシエルクだったが、からかわれるのはいつものことなので慣れてしまった。

そんなことより、ギルドマスター直々に水竜討伐禁止を喰らってしまったので、当分の間はチーフシツクルで頑張るしかなかった。

「しよーがないかな〜……」

名残惜しげに水竜討伐クエストのチラシを一度だけ見上げ、シエルクは集会所を出て行った。

フルスは賑やかな街だ。

多くのハンターが集まり、旅人が中継点とし、更にそれらを相手に商売をする商人が集まる。

昼夜を問わず賑わう大きな街。

そんな活気のある街の中では異質とも言えるほど、閑とした場所があった。

フルス北岸最西端・ドルデキオ地区北部の旧市街地。

北レンベル地区との境も近いこの地区にはかつて、居住区が集中しており、活気もあった。

しかし今では崩れ、焦げた建物が寄り集まっているだけの廃墟となっている。

賑やかな市街地から見捨てられ、発展から切り離されたこの地区に今、レイヴンは立っていた。

長黒衣が風に揺らぐ。

「クロア歴22年5月5日、古龍の襲撃により壊滅……」

手にした本のページをめくる。

「撃退に成功するも、被害区域の住民の死亡者多数。復興進まず……で、この有り様が……」

黒い煤が染み付いた石畳が敷かれた、かつての大通りを歩く。

左右には焼け焦げて崩れた石造りの建物が墓標のように連なっている。

少なくともここら一帯、2km四方は焦土と化しているようだ。

「襲ったモンスターは……」

ページをめくろうとした時、レイヴンが立ち止まった。

「……誰だ？」

振り返ると、そこには小柄な老女。

フルスギルドマスター、グローリア。

「今更この廃墟を彷徨く変わり者は誰かと思ひまして」

「……そんな俺を付けてくるアンタも十分変わり者だよ」

グローリアは小さく笑い、レイヴンに背を向けて廃墟を見渡した。

「……ここを襲撃したのは黒火竜ではありませんよ」

「……………」

「襲撃したのは古龍の一種、炎妃龍、ナナ・テスカトリ。……もう40年以上も前の事件です」

「で、ソイツを撃退したのはアンタだな？ “灼雷の迅光”」

「よく知っていますね。古龍が街に侵入した……その情報が入ってすぐにドルデキオ地区に駆けつけましたが……居住区の住民は手遅れでした」

「だろうな。数分もしない内に居住区は灰になったと書いてある」

レイヴンが本のページに目を通す。

「猛る古龍に誰も手を出せずに避難するしかできない中、粉塵爆発の中を単独で挑んでいった、と……」

「……まだ若かった頃の話です。力を欲して技のみを信じ、ひたすらに強くなるうとしていた、純粹だった頃の……」

グローリアは己の若かりし頃を想い、おかしそうに笑った。

「あなたのパートナーを見ていると昔の自分を思い出しますよ、
“漆黒の衝風”」

レイヴンは本を閉じ、笑った。

「アンタみたいに強くはないけどな」

「現状の実力はともかく、あのハンターは強くなろうと必死ですよ

？ レイヴン、あなたのためにね。ついさっきもガノトトスの討伐クエストを受注しようとしてましたよ」

「バカかアイツは……」

「勿論、止めましたよ。……弟子の監督は師匠の責務ですよ、レイヴン」

レイヴンは「ふん」と笑うと、グローリアに背を向けて歩き出した。グローリアは追わない。

しかし言葉をかけた。

「……黒火竜が目撃されたそうです」

レイヴンが足を止めた。

「遠方からの人伝の情報なので信頼性は高くありませんが……」

「……何処だ？」

「北西へ1400kmあまり……北部辺境の針葉樹林地帯にある小さな村、クレイル」

村の名前に、レイヴンが口の端だけでニヤリと笑った。

「……襲撃されたのか？」

「いえ、地元住民が目撃したようです」

「……分かった。ありがとう」

レイヴンは再び歩き出した。

グローリアはやはり追わない。

再び廃墟を見渡した。

焼けた地と崩れた建物。

（レイヴン、ティディエンも…貴方の故郷もこんな風になったんですか？）

（私が間に合わなかったかのように、貴方も間に合わなかったのですか？）

レイヴンの後ろ姿を見送るグローリアが呟くほどの声で言った。

「貴方の黒火竜への憎悪はよく分かりますよ……だからこそ、利用させていただきます……」

廃墟に吹く風はどこか空虚な風音をたてて大通りを駆けていく。

黒き狩人に纏わりつくように。

小雪がちらつく針葉樹林を行く。

北の辺境に石畳の敷かれた街道は無く、ほとんど獣道のような未整備の道を、レイヴンはクレイル目指してもうかれこれ二時間は歩いている。

なるほど、こんな道では馬車も通れないはずだ。

だいたい体を動かしているはずなのに、体は冷えたままである。

「……寒いな」

何となく呟いてみる。

この一言で雪が止むわけではないが、応えは返ってきた。

「ですね〜……私、こんな北の村に来るのは初めてです!」

「……なんでお前が付いてくんだかな」

後ろを付いてくるシエルクを首だけで振り返って溜め息混じりに言った。

赤髪のパートナーは疲れを感じさせないような楽しげな足取りで付いてくる。

「なんでって……私が付いてきちゃ迷惑ですか?」

「……迷惑ってわけじゃないが……」

シエルクが付いてくるからと言って、移動速度が落ちるわけではない。

かなりのハイペースでこの林道を行っているはずだが、シエルクは苦もなく付いてくる。

最初にあつた時に比べて、確実に体力はついているようだ。

「じゃ、いいじゃないですか　だいたいそんな質問の答えなんて決まってるじゃないですか!」

「……一応、聞こう。なんだ?」

シエルクは満面の笑みで言った。

「パートナーだからに決まってるじゃないですか!」

「あーそー、ふーん」

「あ!　なんですか、その適当な返事はっ!　こんな可愛い弟子が慕って付いてきているっていつのにかっ!」

「あ?　誰が可愛いって?　ちょっと童顔だからって……」

「レイヴンさんも素直じゃないですね。バックスさんも『素直に可愛いって言えばいいのに』って言うてましたよ?」

「子供「可愛い」という方程式は誰にでも成立するとは限らないんだぞ。知ってたか？」

「ああ〜!! また子供子供って!! レイヴンさんと4つしか変わんないですよ!？」

「年齢詐称は聞き飽きたぞ未成年」

「違っつてば〜!! もっつ〜……」

シエルクが道端に積もっていた雪で雪玉を作って振りかぶった時、空気が震えた。

針葉樹林を貫くように響いたのは、高いとも低いとも言えぬ竜の咆哮。

飛竜。

和やかな雰囲気は消え、戦慄が走る。

「……近いぞ!」

「は、はい!」

レイヴンは気を張り詰め、シエルクは雪玉を取り落とし、目を凝らして敵の姿を探った。

雪が音を飲み、冷気が感覚を研ぎ澄ます。

何秒か、何十秒か、何分か。

響く、第二声。

「あっちだ!!」

「ま、待ってくださいよ」

道を逸れ、林を駆け抜けていくレイヴンをシエルクが慌てて追った。

「……………いましたね。」

「……………」

「黒では、ないみたいですね。」

「……………」

2人は大きな岩の裏に隠れて敵を窺う。

視線の先には針葉樹林をノシノシと歩いているリオレウスがいる。

しかし原種の赤い甲殻ではない。

だからといって黒火竜でもない。

甲殻は、青。

雄火竜・リオレウス。

……の、亜種である蒼火竜・リオソウル。

「……違ったか」

確かにリオソウルにしては体色は黒みを帯びてはいるが、黒というには程遠い。

あの日、砂漠で見た漆黒の鎧はしっかりと目に焼き付いている。

「装備だけ村に送ってもらったのは間違いでしたかね……」

「いや、あの装備を背負ってあの道は歩くことはできなかった……何にせよ、村を襲いかねない飛竜を放ってフルスには帰れん……一度村に行つて……」

装備を調べよう、と続けようとした言葉が詰まった。

林を闊歩していたリオソウルがいきなりこちらを振り返つたのだ。

慌てて岩陰に引っ込み、気配を殺す。

「どうしたんですか？ レイヴンさん？」

(黙れっ！)

人差し指を口に当て、ジェスチャーで伝える。

察したシエルクは慌てて岩に張り付いた。

重い足音。

完全にこちらを向いたようだ。

(あの距離からなら5歩……)

1……2……3……4……

止まった。

心臓の音とリオソウルの息遣いだけがイヤに大きく聞こえる。

そのリオソウルの息遣いが変わった。

吐くのを止め、大きく吸い込む。

(まずいつ!?)

思った刹那、リオソウルのブレスが2人の隠れる大岩に直撃した。

腹に響く爆発音が岩を隔てて伝わり、背後から火花と、ブレスで表面が砕かれて白熱した岩の破片が飛来。

冷や汗が滴る。

まだ、バレてはいないはずだ。

防具も武器も無いまま襲われれば、確実に殺されるだろう。

数秒。

再び息を吸い込む音を聴き、直後、耳をつんざくような飛竜の咆哮が大気を貫いた。

「 つつ！…！！ 」

「 つつつつきゃあああああ！！ 」

耳をつんざく叫びが、今度は隣のパートナーから発せられた。

「 ばっ…… 」

馬鹿、と言いつつになり、躊躇う。

耳を塞いだシエルクはしゃがみこみ、そのつぶった目には涙すら浮かんでいた。

リオソウルはバインドボイスをこれだけの至近距離で聴けばこうなるだろう。

……実はレイヴンは、直前に耳を塞いでいたから無事なのだが。

リオソウルはテリトリーへの侵入者の存在を確信し、勢いよく飛び

上がった。

怪鳥のそれとは格が違う、“空の王”の王たる所以の能力。針葉樹より更に高い空から、岩に隠れる2人を見下ろす。

「シエルク!! 逃げるぞ!!」

「は……はいつ!!」

シエルクを立ち上がらせると、手を引いて林を走り出す。

リオソウルの雄叫びが追ってくる。

レイヴンはとっさにシエルクを抱き寄せると、右側に横つ飛びした。ついさっきまで2人がいた地面が、空から降ってきた火焰の塊によって白熱し、抉られる。

火花と燃える土くれがレイヴンの頬をかすった。

余りに、無力。

「くそ……!!」

レイヴンはシエルクを立たせると、再び林をかいくぐって走り始める。

「何が何でも逃げ切るぞ、シエルク!!」

「で、でも何処に……」

「クレイルだっ……！」

「でもそれじゃ村が……！」

「クレイルの前で止める……！！！」

レイヴンが長黒衣の懐から円筒形の物を取り出した。

操作し、筒先を天上に向ける。

発火、射出。

青い強光を放つ弾が白煙を吐きながら針葉樹林を突き抜けて空に昇った。

「信号弾……！？」

「よし、あとはひたすら逃げるぞっ……！」

レイヴンが筒を捨てて、疾走する。

シエルクは遅れないように必死で長黒衣を追いかけた。

リオソウルは侵入者を逃すまじと空から追撃する。

……そして、林中のある者は空に光る信号弾を見た。

「……ふむ、来たか」

己の得物を担ぐと、走り始めた。

「久し振りだなあ……可愛い弟子よ!!」

担いだヘヴィボウガンが、渋い鋼鉄の輝きを放っていた。

雪の積もる針葉樹林をひた走る。

断続的に飛んでくる火球はレイヴンの的確な指示で何とか避けてはいるが、足が疲れてきていて、耳先を火花がかかることも多くなってきた。

敵は背後にはいない。

敵は、空。

「きゃっ……!!」

針葉樹の尖った葉を燃やしながら頭上から降ってきたプレスが背後に着弾。

爆ぜた時の爆風で背中が押され、危うく転びかける。

「大丈夫か!？」

「は、はい!!」

「くそ……あのオッサン、一体何処ほつつき歩いてんだ!？」

レイヴンが悪態をついた時、シエルクは右手の木立に、影を見た。

「……? 今、何か……?」

見間違いだったのかもしれない。

狐や狼だったかも。

敵から逃げて走ってる途中では、確かめる暇さえ無かった。

「どうしたシエルク!? ぼっとしてると殺されっぞ!!」

「いえ……今、何か影が見えた気が……」

そう言ってもう一度だけ右を見るが、影はもういない。

しかしレイヴンはニヤリと笑った。

「よし……」

「……?」

レイヴンの笑みにシエルクが疑問を感じたその時。

砲声が響いた。

「え……!?!」

一発、二発、三発。

蒼火竜の叫びが砲撃音に合わせて跳ねる。

レイヴンとシエルクは足を止め、攻撃者を探す。

「……遅かったな、師匠」

「……さっきオッサン呼ばわりしたのもしっかり聞いてたぞ、レイヴン」

いた。

右手の茂み。

短銀髪の壮年のハンターだ。

長身で、抱えているのは鋼鉄の巨大なヘヴィボウガン。

彼 たぶんレイヴンの師匠 はこちらを一目見て笑いかけ、ヘヴィボウガンを操作する。

笑つと口元と目尻に皺が深い刻まれ、それなりの年齢であることが見て取れる。

排莖、装填、頭上に向かって再発砲。

重い発射音が数発響き、空から何かが降りてきた。

さっきまで自分を追ってきていたりオソウルである。

「レイヴン、さっさとクレイルに向かえ。コイツは私が引き留めておく」

「できれば脳天ぶち抜いて昇天させてやってほしいんだがな」

「獲物は弟子に残しといてやるう」

「師匠、俺の手間増やすなよ……」

「弟子に対する愛情だよ」

「ふん……シエルク、行くぞ」

「え？ あの、あの方一人で大丈夫なんですか？」

ガンナーはまた笑うと、ヘヴィボウガンを持ってない左手をヒラヒラ振った。

「お嬢さん、ご心配なく。私はそこのハンターよりは腕がたつからね」

「……そういうことだ。どっちみち、装備が無い俺らがここにいても何もできんからな」

そう言ってレイヴンはまた走り出した。

シエルクも慌てて後を付いていく。

背後には砲声と咆哮が響き続けていた。

クレイルにあるヴェアスターの家に勝手に上がり込んで暖をとっている、外で何やら音がした。

「あ、帰ってきたみたいですね」

シエルクがドアを開けようと、玄関に近づいた瞬間……

「私はヴェアスター……マーテンだ。よろしくね、お嬢ちゃん」

件のガンナーはドアを開けて入ってきたかと思うと、そう言っているなりシエルクを抱き締めた。

「は、え、あ、ど、どうも、よろしくお願ひします……？」

シエルクが戸惑って為されるがままにしていると、背後で何かしらの金属音がした。

「色ボケオヤジ、斬るぞ」

「クレイル流の歓迎の仕方だ」

「そ、そうなんですか？」

「騙されるなシエルク。そんな歓迎聞いたことない」

「無知だな、弟子よ。」

「オッサン、どっちでもいいから早く離してやれって」

それもそうだな、とヴェアスターはシエルクを抱擁から解放する。

「うーん、まさかレイヴンがカノジョ連れて帰ってくるなんてなあ。」

「パートナーだ」

「人生の？」

「……斬るぞ」

レイヴンが再びパーヘリオンを構えると、ヴェアスターは笑って担いでいたヘヴィボウガンを床に置いた。

間近で見ると、その素材は金属のようで金属でない。

金属光沢を放ってはいいるが、どうも金属特有の均一感が無いのだ。

シエルクが屈んでまじまじとボウガンを見つめっていると、ヴェアスターが同じように屈んで、ボウガンを挟んだ反対側から笑いかけた。
きた。

この人の笑顔は、同じように常にニコニコ顔のボックスのものとはどこか違う気がする。

屈託が無いというか……その年齢にも関わらず、少年のような無垢な笑みである。

「コイツが気に入ったかい？」

ヴェアスターはそう言ってヘヴィボウガンを手の甲でコツコツと叩く。

叩いた音も、どことなく金属ではない乾いた響き方をしていた。

「このボウガン……素材は何ですか？」

「ふふ……金属だと思うかい？」

ヴェアスターが中折れ機構を展開させてボウガン然とした形にした。

「このボウガンはね、グラン・ダオラというヘヴィボウガンで……」

そういえば、このボウガンには弓のような弦機構が無い。

レイヴンのパーヘリオンに似たりボルバー機構が搭載されている。

「鋼龍……クシャルダオラの堅殻や古龍骨をフレームに使ってるんだ。他と比べてかなり重いが、それによって反動の軽減と精度の向上を達成している」

「クシャルダオラの……！」

しかも堅殻といえば上位クエストの素材のほずである。

上位の古龍種など、自分にはほとんど無縁なモンスターだ。

ヴェアスターの、腕がたつというのはあながち嘘ではならしい。

シエルクが感心してグランニダオラを見ているとヴェアスターは笑顔のまま立ち上がり、防具を脱ぎながらレイヴンに話し掛けた。

「リオソウルなんて追い回してるところを見ると、まだ黒火竜の追っ掛けやってるのか？」

「……ああ。」

「このコマで巻き込んで？」

レイヴンは少し間を置いて言葉を選んだ。

パーヘリオンを置く。

「……シエルクを黒火竜の狩りには巻き込んだ覚えは無い」

「このコマで付いてきてるの？」

「……俺の意志じゃない」

シエルクは、まるで尋問のように感じた。

口調は優しく、笑顔のままだが、ヴェアスターは何か一つの答えを欲するかのよう質問を重ねている。

「ふう……相変わらずだな、レイヴン。10年前と何も変わってい

ない」

ヴェアスターは防具を木箱にしまつとシエルクに向き直る。

「シエルクちゃん、コイツと会ったのはいつだった？」

シエルクは記憶を辿る。

「もう半年くらい経ちますね……」

「最初、コイツはどうやってキミに接してきたか覚えてるかい？」

「そうですね……っつけどんで、あんまり積極的に関わろうとは

……」

「その時に比べて今はどう？」

「よく話すようになりましたし、一杯笑うようには……そうだし！
やけに子供扱いするようになったんですよ！」

シエルクが言うと、ヴェアスターは声をあげて笑った。

レイヴンはソファに座つて何だかふてくされている。

「会った時はそんなことなかったから、いい人なのかと思ったのに
……」

ヴェアスターはレイヴンがクッションを投げつけるまでひとしきり
笑つと、レイヴンの隣に座った。

「……それがコイツなりの愛情表現なんだよ。相変わらず人の愛し方を知らんヤツだなあ」

「……会っていきなり抱き付くのが正しい人の愛し方か？」

「私なりのな」

「……師匠こそ10年前と何も変わっちゃいない……」

「変わるほど若くはないさ」

「よく言う……さっきのリオソウルはどうなった？」

「勢い余って殺してしまったよ……まあ、遅かれ早かれ討伐するつもりだったが。シエルクちゃんのお手並み拝見といきたいところだったのに……」

「……シエルクはこの前クック狩れたばかりだよ。リオソウルなんて早すぎる」

「過保護だな？」

「師匠が厳しすぎなんだよ」

「私はそんなに厳しかったか？」

「やっとクック狩った弟子を翌日、レイアの巣に放置してきた師匠が優しいと言えるか？」

「いい経験にはなっただろう？」

「キャンプ送り3連発でクエストリタイアしたのは、後にも先にもあの時だけだよ」

それを聞いてヴェアスターが愉快そうに笑うと、レイヴンも小さく笑う。

快活とした、シエルクといる時とはまた違う笑い方だ。

「……ところでレイヴン、この後すぐに帰るのか？」

「狩るべき飛竜もいなくなったしな。明日の朝にでも発つよ」

「もう帰っちゃうんですか？」

「もうって……ここにあるのは雪と森と色ボケオヤジだけで、シエルク」

「それは……そうですね……」

「オジサンとしては一番最後のは否定して欲しかったんだけどなあ……」

シエルクはこの小旅行を少しは楽しんでたわけであり、なんだかこのまま帰るのも残念な気がした。

「別にお前だけクレイルに残っても構わんけどな」

「オジサンと同棲するかい？」

「……前言撤回。首輪つけてでも連れて帰るぞ」

「冗談さ。まあちょうどいい。私も一緒にフルスに行くからな」

「……あ？」

レイヴンの思い切り訝しげな視線をヴェアスターに送った。

その視線をサラリと流すと、ヴェアスターは続ける。

「私もフルスに行くんだよ。……私のハンター人生も長くは無い……」

ヴェアスターは笑顔のまま窓を見た。

外には雪が降り続いていて、徐々に村を白く彩っていく。

クレイルにはもう、冬が来ているのだ。

「飛竜の相手も老体にはキツくなってきていてね。体力の限界が近いんだ。……限界が来る前に……」

窓辺で冬を見るヴェアスターの横顔は、リオソウルと戦っていた時よりもずっと年老いて見え、弱々しく見えた。

「……狩りを楽しんでおきたいんだ。いろんなモンスターと……強い飛竜と……」

ヴェアスターは向き直った。

横顔に垣間見えた表情はかき消えている。

「それにはクレイルにいるよりも、大きな集会所があるフルスに行った方がいいだろう？」

レイヴンは、ふいと視線を外すと、ポツリと呟くように言った。

「……好きにしてくれ、師匠」

「……ありがとう」

三日後、準備を終えた3人は雪降るクレイルを発った。

フルスで待ち受ける大事件のことなど知る由も無いまま。

「……様子がおかしい」

竜車でクレイルからフルスに帰ってきて開口一番、レイヴンが言った。

ランビエ門からフルスに入った二台の竜車（一台は荷物用である）は、メステイオ地区を東西に貫く大通りを進んでいた。

昼下がりの大通りはいつものように、人と喧騒に溢れている。

だが、喧騒の種類がいつもとは違う。

活気があるというより、無秩序に言葉が飛び交っているのだ。

市場の喧騒というより、災害の避難所の喧騒の方に近い。

そんな不穏な空気の大通りを進む竜車の脇を、数人のハンターが追いつ越していった。

「……フル装備だね」

ヴェアスターが遠ざかるハンターを目で追いながら呟く。

街で何かが起こっている。

3人が何が起きているかを測りかねていると、何者かが走って竜車

に追い付いてきた。

「レイヴンさん!!」

「あれ、セシリア?」

追い付いてきたのは集会所の受付嬢をしているセシリアだった。

シエルクがグローリアに水竜討伐クエストを止められた時に、話しかけてきた彼女である。

「ああ、シエルクちゃんも……」

ヴェアスターが気を回して竜車を止めるように御者に言ってくれた。止まった竜車の横でセシリアはハアハアと荒い息を整える。

「……俺に何か用か? フルスで何かあったのか?」

「ギルドマスターが“漆黒の衝風”を呼んでこいって……何が起きてるか知らないんですか!?!」

「……生憎、今帰ってきたばっかだね」

「とにかく……大変なんですよ!!」

「セシリア、落ち着いて……」

その時、轟音が街を揺らした。

次いで何かの咆哮が遠くから聞こえる。

それに伴って竜車の周りの喧騒が大きくなった。

誰かが叫ぶ。

「ヤツがツコビヤ大橋の阻止ラインを突破したぞ!!」

セシリアが「ええっ!？」と驚いた時にはレイヴンは竜車を降りていた。

「あ……レイヴンさん、どこに……」

シエルクの呼び掛けには振り向きもせずセシリアに簡潔に訊ねる。

「飛竜か？」

「え、あ、はい!!」

「……こんな大きな都市を襲うなんて滅多に無いんだが……」

「その上、よっぽどの特大サイズみたいだね」

「はい……あなたは……?」

レイヴンに続いて降りてきたヴェアスターに、セシリアが戸惑った顔を見せた。

ヴェアスターは例のごとく、やわらかな（殊に女性に対する最上級の）笑顔で答える。

「レイヴンの父お……」

「さっさと行くぞ、師匠」

ヴェアスターの軽い冗談はレイヴンの呆れた声によって一蹴された。

レイヴンは後ろを付いてきていた荷物用の馬車に走っていく。

ヴェアスターは「やれやれ」と言った顔で黒衣を追った。

後にはセシリアとシエルクだけが残されてしまった。

「シエルクちゃんは避難した方が……」

「私も……行く!」

シエルクは勢いよく竜車から降りると、レイヴンとヴェアスターの後を追った。

セシリアは止めようとし、しかしそれを諦めると心配そうな目で、駆けていく友人の後ろ姿を見送った。

「シエルクちゃんの手には負える相手じゃないわよ、あの水竜は……」

遠くからは遠雷のように水竜の咆声が響いていた。

水竜にしては少々大きすぎる咆声だ。

イリユーセ大橋。

フルスを横断するノルスデモン川に架かるこの橋は、他の3つの橋と同じく重厚な石造りでしっかりと組まれていて、北岸と南岸を結んでいる。

いつもなら沢山の通行人で賑わう橋の上には今、数十人のハンターが横一線に構えていた。

そのほとんどがガンナーであり、色とりどりのヘヴィ・ライトボウガンが並ぶ光景はなかなか圧巻である。

皆、視線は川上に向けている。

「来たぞーっ！！」

誰かが叫び、ガンナー達が構える。

橋から1kmほど先の水面が割れた。

割れ目からは巨大で鮮やかな背ビレが突き出ている。

南北両岸で待機していたハンター達が背ビレに向かって一斉に何かを投げた。

それらは川上で一斉に弾け、金属音にも似た高音の不協和音を発生させる。

無数の音爆弾。

水中や地中に潜った敵を炙り出すには最も効果的な狩猟道具だ。

普通の水竜ならたまらずに水中から踊り出しただろう。

普通の水竜ならば。

「やっぱり、駄目か……！」

1人の大柄なガンナーが呟いた。

リオソウルシリーズを纏い、強力なライトボウガン「蒼桜の対弩」を構えた、第3阻止ラインのリーダーだ。

大音量の高音が頭上で弾けたにも関わらず、水竜はどこ吹く風と水中を進み続けている。

イリユーセ大橋 第3阻止ライン到達まで500m。

「総員、初弾装填！！ 射撃用意！！」

リオソウルシリーズのガンナーが叫んだ。

装填、照準。

距離、200m。

背ビレが僅かに沈み込んだ。

「撃てー！ーっ！！！！！」

発砲開始。

水中にいる影に無数の弾丸が飛来。

川面に貫通弾や雷撃弾の弾着痕が穿たれる。

飛沫が連続し、連続射撃によって橋上に硝煙が立ち込めた。

しかしそれが続いたのは3秒足らず。

敵の動作は突然、かつ一瞬。

水面から何かが、とてつもなく巨大な何かが信じられないスピードで弾丸のように飛び出したかと思うと、顎アギトを開き、何の躊躇いもなく橋の上部構造に激突した。

まるで橋上のハンターごと橋を呑み込もうとするかのように。

「なっ……！！！」

硝煙と弾雨を突き抜けて現れた強襲者。

橋のちょうど中央にいたりオソウルシリーズのガンナーは何が起きたかも分からないまま口中の闇に消え、その周りにいた数人のハンターも同じ運命を辿り、他のガンナーもその巨体に弾き飛ばされる。

橋の上部構造とハンター幾人かを呑み込んでイリユーセ大橋を通過したそれは、再び川に潜った。

飛び上がって、橋上を通過し、再度飛び込むまでは3秒とかかかっていない。

数秒前まで荘厳とも言える風格を持っていた石造りの橋は、今や上部構造の真ん中1/3を砕き、呑み込まれ、残った上部構造の上には呻く怪我人や屍が散らばっていた。

飛沫が散り、しばらく空気が静かに凪いだかと思うと、思い出したように恐怖や憤怒の聲が上がって人が動き始める。

ある者は地獄と化した橋上に向かって走り、ある者は信号弾を打ち上げ、ある者は泣き崩れ、そしてある者はただ呆然と立ち尽くした。

竜と人とは古来、こういう関係なのだ。

竜は強く、人は弱い。

しかし、この3秒足らずの出来事は何かが少し違っていた。

どこかが、不自然に歪んでいた。

「……イリユース大橋が落ちたな。」

西に上がる赤い信号弾を見てレイヴンが呟いた。

最終阻止ライン・ヴンゲ大橋の広々とした橋上にはレイヴンしかない。

ザクス・ツコビヤ・イリユース大橋での戦況を見て、橋の上にはあまり多くのハンターを配置しない方が犠牲を少なくできるとグローリアが判断したのだ。

ガンナーは両沿岸に配置され、橋の両端には腕のたつハンターやランスを装備した屈強なギルドナイト達が控えている。

シエルクモレイヴンと行きたいと言ったが、グローリアに睨まれて橋の両端に配置された。

ツコビヤ大橋を突破されれば、ノルスデモン川下流域の街にも被害が広がる可能性がでてくる。

何としてでもフルスで止める必要があるのだ。

「あー！！ 来ました！！」

北岸側の橋端にいるシエルクが不意に声を上げた。

指差すのは川上。

遙か遠くの水面に微かに覗くヒレ。

常人には見えぬ小ささだ。

他のハンターが訝しがりながらも川上を見つめる中、レイヴンは肩に担いだパーヘリオンを下ろした。

シリンダーリリース。

「『雷』『雷』『雷』『火』『火』『硬化』『硬化』『硬化』」

呪文のように虚ろに、装填されている挿薬子を順に確認した。

ゆっくりとシリンダーを戻し、思い切り回転させる。

チャラララー、と小気味良い音を回転する重いシリンダー。

ロシアンルーレットの要領だ。

両橋端のハンターが彼方にいる（はずの）水竜の探索を諦め、橋上の黒鎧の大剣使いの行動を見つめる。

回転するシリンダーが止まった。

初弾位置にどの挿薬子があるかは分からないままである。

「さて……どれが出てくるのか……」

再び鋼鉄の芸術品を担ぐ。

刃の切っ先が指向しているのは碧落。

双眸が捉えるのは微かに見える波頭。

「……いずれにせよ、貴様のたどる運命は同じだ」

ハンター達が前を見据えた。

いつのまにか水竜のヒレはもう間近に迫っている。

「漆黒の衝風を……フルスのハンター達をナメるなよ？」

トリガープル。

一発の乾いた発火音が響く。

刃が振動する。

両手でホールドしたパーヘリオンを左下段に構え、静止。

川面をかき分ける音だけが届く。

最終阻止ライン到達まで、500m。

水面下を走る巨影が射程圏内に入ると同時に、沿岸に並んだガンナー達が射撃を開始した。

両沿岸にいくつも白煙があがり、影を追うかのように幾重にも水柱が立つ。

突然、影がその姿を現した。

巨大水竜。

通常の、恐らく三、四倍はあるつかという巨体が水を離れて空を飛ぶ。

その凶体にはそぐわぬスピードで、巨大な砲弾のように飛んでくるのだ。

ガンナーの撃つ弾丸が、運良く何発かが滑空する巨大水竜に命中したが、異常な硬さを持つ鱗に全て弾かれた。

巨大水竜が狙うのは橋上のハンター。

欄干や上部構造を砕きながら、多重構造の牙が並ぶ顎があつと言つ間にレイヴンの目前に迫る。

水竜の餌食になるまでに要する時間は恐らく一秒を切るだろう。

しかしレイヴンは、その一瞬とも言える間隙に、攻撃動作に入った。真っ正面から迫り来る巨大水竜に向かって右斜め前に跳躍回避。ギリギリのタイミングと移動距離。

少しでも遅れたり跳躍角度を間違えれば次に踏む大地はあの世のものだ。

そして左下に構えたパーヘリオンで、左真横を通過する巨大水竜に水平に、思い切り斬りつけた。

パーヘリオンに属性効果は付加されていない。

『当たった』のは斬味を一時的に強化する『硬化』の挿薬子だった。開かれた巨大な口の端から入ったパーヘリオンの刃が、斬撃を開始。凄まじい強度を得た刃は強靱な鱗を斬り砕きながら、巨大水竜の慣性によってそのまま首、胸、腹と切り裂いていく。

斬撃が進むごとに瑠璃色の鱗が剥がれ、煌めき、空中に舞った。

やがて後脚大腿部の上で刃が巨大水竜の体内から脱出する。

巨大水竜が叫ぶ。

レイヴンは一瞬、上手くいったことで安堵感を覚えた。

そして、それが命取りとなる。

「！！」

気付いた時にはしなる尾ビレが前方の視界を埋めていた。

自分の甘さを恨むが、遅い。

回避不能。

「レイヴンさん！！」

すれ違いざまに巨大水竜に一撃を見舞ったレイヴンが尾ビレに打ち据えられ、吹っ飛ばされた。

橋の欄干に叩き付けられる。

倒れ、動かない。

巨大水竜は再び川に飛び込んでいた。

橋は真ん中をえぐりとられたように崩壊している。

シエルクの前に、巨大水竜の血にまみれたパーヘリオンが転がってきた。

息が詰まる。

上手く呼吸できない。

何人かのハンターが慌ててレイヴンを助けに行くのが見えたが、シエルクの足はまるで筋肉を失ってしまったかのように動かない。

ただ、臥したレイヴンを見る。

心臓が早鐘のように打つ。

まばたきもできない。

自分でもよく分からない感情がただ心から溢れ出し、もう一度名を叫んだ。

「……………レイヴンさん……！」

視界が霞む。

まばたきをしなかったせいで目が乾いたのか、悲しいのか。

シエルクにはどちらか分からない。

ただ、今、目の前の疑いような現実を受け入れるだけで精一杯

だった。

やがてレイヴンを乗せた担架が横を通り過ぎていく。

顔は青白く、生気は無い。

足下を見ると、パーヘリオンの刃が赤く輝いていた。

指先にまで鼓動が伝わる。

感情の昂ぶりが抑えようも無く溢れる。

巨大な災厄はレイヴンを傷つけた。

シエルクの知る中では最強の、負けるはずのない絶対的存在を。

己の、パートナーを。

シエルクは顔を上げた。

その目はどこか虚ろで、しかし鋭い。

岸にいるガンナーの1人が叫んだ

「引き返してきたぞ!!」

無意識に腰から、己の双刃を抜く。

「許さない……!!」

やり場の無い怒りと悲しみをぶつける相手を探すかのように、動か
なかつた足が動いた。

隣にいた長身のハンマー使いが止める間も無く、シエルクは走り出
す。

青怪鳥を狩った時に似ている、と感じながら、双剣を逆手に握り直
した。

両橋端にいたハンター達が、1人の無謀な双剣使いに気付いたが、
止める暇も無い。

橋上にはシエルクしかいなかった。

視界左の川下から引き返してきた水竜が川上、つまりもと来た方向
に向かって水面下を走るのを確認する。

橋下を通過して、フルスに再攻撃を仕掛けるつもりか。

シエルクは崩壊した橋中央の縁まで来ると、向かって右側の欄干の
上に飛び乗った。

ハンター達が赤髪の双剣使いが何をやらんとしているかに気付き、
何かを叫ぶ。

間に合わない。

躊躇など、皆無。

シエルクは宙に舞った。

今考えれば、何故あんな無茶苦茶なことを実行したのか我ながら理解に苦しむ。

一歩間違えれば自殺行為だ。

いや、一歩間違わなくても自殺行為。

高さ10mもある橋から飛び降りて水竜を仕留めようなど。

足が欄干から離れる。

一瞬宙に浮いたかと思うと、すぐに重力に引かれて落下を開始した。

何故だろう、不思議と恐怖は無い。

頭を下にし、飛び込みの姿勢をとって急降下。

水竜が橋下を抜けてきた。

スルスルと水面下を走る影は、真紅の帯を引いている。

水面が近づく。

水竜の真上。

迫る。

タイミングは申し分ない。

「！！」

川にダイブ。

ほぼ同時に、水面下の水竜に右手の剣の一撃が届いた。

鋭い剣は落下速度を以て水竜の首の上側の強固な鱗を砕き、刃の根元まで深々と刺し貫く。

着水の衝撃に脳が揺れ、鼻と耳がキーンと痛んだが、それより水竜の方が重要だ。

右手は剣から離さず、すぐに水竜に引かれて水中を高速で疾駆し始める。

水竜は、己の首に突き刺さった剣をさして気にはしていないようだ。

シエルクにとつても右の剣は水竜にしがみついたための持ち手に過ぎない。

凄まじい速さで押し寄せる水流（川の流れに逆らっているのだから尚更だ）に、ろくろく目も開けないが、顔を横に向ければなんとか視界を確保できた。

見えたのは川を赤く染める傷。

と、もう一つ。

(番号…?)

4213。

四桁の番号が首に焼き印で印されている。

怪しげな物だが、残念ながらシエルクにはこれが何を意味するのは分からない。

(いや、そんなことより……)

改めて水竜の傷の方を見た。

刃長が短い双剣では、一撃で巨大な水竜に致命傷を与えるほどの攻撃は期待できないだろう。

が、今はレイヴンが刻んだ傷がある。

それを利用すれば……

(……できるかな?)

考えるのは止めた。

無駄な思考は無駄な酸素を消費する。

更に首を回して後ろ、つまり水竜の尻尾側を見た。

相変わらず長大な体躯。

体にピッタリと張り付けている左手が震えるのが分かる。

そろそろ息が保たなくなる。

(……よし)

意を決する。

もし地上だったら深呼吸をしたいところだが、水中ではそれは叶わない。

代わりに目標をしっかりと睨んだ。

傷口を。

(3……2……1……!!)

シエルクは躊躇うことなく、水竜に突き刺さる剣から右手を離れた。

もちろん川の水流に押され、すぐに水竜から引き剥がされる。

チャンスは一瞬、一回限り。

(……今!!)

水流に高速で流されていく中、シエルクは在らん限りの力で朱の帯

の根元　水竜の傷口の胸部付近に左手の剣を突き刺した。

傷口の、さらにその奥へ。

水竜が吼え、思わぬ一撃に暴れた。

シエルクは振り払われるように水中に投げ出され、再び流れに呑まれる。

だが傷口に剣は突き刺さったままだ。

シエルクの視界から猛る水竜はあつと言う間に消え、川に流される無力感だけが肌と視覚を通じて伝わった。

流れに翻弄され水面上に上げられる気配は無いが、恐れや怯えも無い。とうとう堪えきれなくなって息を吐いた。

大小の泡沫が冷たい水中に踊り、為す術無く大量の水が口と鼻から侵入する。

急激に薄れる意識の中、天地も分からぬ奔流に転がされながらも、シエルクは自分の生死よりもパートナーの生死をひたすらに案じていた。

「……生きてたんですね」

「その台詞、そっくりそのまま返してやるよ」

診療所のベッドに仰向けに寝る二人のハンター。

黒髪の男の方は体のあちこちを包帯で巻かれている。

隣のベッドの赤髪の女ハンターは外傷こそあまり見られないが、顔色は優れない。

「バックスとヴェアスターから聞いたぞ。橋から飛び降りて水竜の心臓えぐったらしいな？ 結果的に討伐できたから良かったもの……」

「レイヴンさんだって人のこと言えませんよ？」

「あ？」

「あんなでつかい水竜をすれ違い様に斬るなんて……結果的に生きてるから良かったもの……」

ベッドとベッドの間の通路を挟んで互いの顔を見る。

「……あんまり無茶すんなよ？」

「……あんまり無茶しないで下さいね？」

同時に放った言葉に、同時に笑みがこぼれた。

「……これからもよろしく頼むぞ、マイパートナー」

「いちばんこそ！」

「……どうして『あの』水竜がフルスに侵入したのです？」

『1年前に脱走した一頭でして……こちらでも消息を辿っていたんですが……』

「黒火竜の災厄を忘れたのですか？ 村や街が一つ消えてからでは遅いのですよ？」

『国王もすまないと……』

「……とにかく、復興資金はしっかりと回してもらいます。今回はそれで水に流しましょう。幸い、犠牲者も僅かに止まりましたからね」

『グローリア殿、本当にすまなかった』

「あなたのような末端の連絡員の謝罪など意味を為しません。そんなことより、黒火竜の調査の方はどうなっただんですか？」

『数週間前に火山で確かな目撃情報がありましたか……おそらくもう移動しているでしょう。最新の目撃情報は、北の湿地帯です。商人が遠目から見たという話だからあてにはなりませんか……』

「……………」

『……何処へ行くので？』

「あなたも来なさい。処分を手伝ってもらいます」

『処分？』

「……………決まってるでしょう、『4213』のですよ」

フルスでは巨大水竜に破壊された4つの橋の修理が急ピッチで行われていた。

北岸と南岸を結ぶ4つの連絡橋が寸断されてしまったのは物流や住民の移動に大きな影響を与えており、一刻も早く建て直す必要があるのだ。

慌ただしく人が動く大河・ノルスデモン川のほとり。

対照的にのんびりと歩く人影が二つある。

「うっっん！！やっぱり外は気持ちいいですね！！」

空は雲ひとつなく晴れ渡り、数日前に水竜との血みどろの戦いがあ

った場所だとは思えないほど穏やかな風が吹いている。

シエルクが両手を伸ばして目一杯に平和な風を感じている横で、頭や腕にまだ包帯を巻いたレイヴンが呆れたように言う。

「回復早いのは、お前……」

「あれからもう3日ですよ？ レイヴンさんが遅いんじゃないんですか？」

「お前は水飲んだだけだろう。こっちは全身ボロボロなわけだし……そう簡単には完治はしな……」

「早く治してまた狩りに行きましようね、レイヴンさん！」

そう言って笑いかけるシエルクに、レイヴンは少し言葉を失った。

(なんだか、最近可愛く……)

レイヴンは頭に浮かんだ言葉を慌てて振り払った。

(落ちて着け、俺!! 何を考えてるんだ!? 今さら可愛いとか……!!)

「どうしたんですか？」

顔を覗き込んでくるシエルクにまた心拍数の上がりそうになったレイヴンは慌てて顔を逸らす。

それからわざとらしく咳をしてシエルクに言った。

「……んじゃ、俺が治るまでに次に狩る飛竜を考えとけ。宿題だ」

「はい！ん？ あ！バックスさ〜ん！！」

シエルクが目を凝らしたかと思うと、いきなりぶんぶんと対岸に手を振った。

シエルクの手を振る先の対岸に目を向けると、たしかに小さくバックスらしき影が見えるが、レイヴンには顔までは判別できない。

よく見ると、その隣にもう一つ人影が見える。

「あ！ヴェアスターさんも一緒だ〜！」

「……化け物じみた視力だな」

「なんか言いました？」

レイヴンが無言で首を振ると、シエルクは岸に付けてあった小さな船に舟にひょいと飛び乗った。

この簡素な作りの渡し舟は川縁のあちこちに舫っており、橋が無い現在のフルスにおいて唯一の南北岸の連絡手段である。

シエルクの乗った船には渡し守はいないが、渡し守のいる船は渡し賃さえ払えば対岸まで渡してくれる。

少なくとも橋の終了する一カ月後まではこんな状況が続くのだろう。

「……んで、漕ぐのは俺か」

「なんか言いました？」

「……何でもない」

船に乗るだけ乗ってレイヴンに「早く漕いでください」という目線を送るシエルクを見、レイヴンは弟子の自由奔放さと、それを断れない自分の情けなさへのため息と共にオールを持った。

「はい。どきどきするよ」

「うわあ……！」

バックス達と合流して向かったコンツェラルト鍛冶店。

シエルクが受け取ったのは淡いグリーンの薄刃を持つ新しい双剣だった。

水竜のヒレと砂竜の鱗を使用して水属性を付加した双剣・ガノカツトラス。

まるで水竜のヒレにそのまま柄を付けたような一対の剣はシエルクの持つ武器で初めて、モンスター素材を用いた武器らしくなった。

「いつの間にこんなモノを」

「巨大水竜討伐の特別報酬だよ。ほら、お前も貰っただろ？」

隣のヴェアスターに言われ、ああ、と思い出す。

たしかギルドから今回の水竜討伐の特別報酬として水竜の素材がわんさかと送られてきた。（鱗ばっかだった気がする）

自分は水竜素材に用などないから早々に売っ払ってしまったが。

シエルクを見ると、新しい武器を手に、嬉しそうにしげしげと見つめている。

見ようによっては水竜のヒレをもぎ取ってそのまま手にしているようだ。

「前々から派生については話し合ってたんだけど、ちょうど素材が手に入ったから……で、ああ！！ 安易に振り回しちゃ……」

ボックスの制止は間に合わない。

シエルクが試しに一振りすると、その刃から水が噴き出した。

高圧の噴出水は剣の軌道をなぞり、華麗な水の華が咲く。

「わあ」

「……パートナー兼師匠に水ぶっ掛けといて、『わあ』はないだろうよシエルクさん」

「え？あ、す、すみません！！」

ガノカットラスから噴き出した水は見事にレイヴンを襲っていた。

「水も滴る良い男ってか？」

「あんたも一発掛けてもらうか？ 師匠」

「シエルクちゃんになら掛けられてもいいかもね」

「……だそうだ、シエルク。お望み通りにしてやれ」

「え？え？で、でも……」

「真剣に戸惑うな阿呆。冗談だよ」

ヒレを両手におたおたするシエルクを放っておいて、レイヴンがボックスに向き直った。

苦笑いするボックスがタオルを放ってくれる。

「サンキュー……。それにしても今回の水竜……。デカ過ぎないか？」

「確かにね。死体はもうギルドが解体しちゃったんだけど……。全長は優に8mは超えてたらしいよ」

ヴェアスターからも笑顔が消えて、真剣な顔つきになる。

「8mね……。私を知る水竜の最大サイズは3.5mだから……。2倍以上か」

「サイズが異常なくらい桁外れだ……。それに音爆弾も徹甲弾も効かなかった」

「私のグラン・ダオラからの弾丸も何発か当たったはずなんだが……。全く効果が無かったみたいだったなあ。ガノトトス程度が徹甲弾を跳ね返すほどの鱗を持つてるとも考えにくい……」

「それに、音爆弾が効かなかったのはおかしいね。聴覚の優れた魚竜には必ず効くはずなんだけど……」

「あ、そういえば……」

レイヴン、ヴェアスター、ボックスがそれぞれ悩んでいると、シエルクが突然声をあげた。

「私が水竜の首に剣を刺してしがみ付いてた時、数字を見たんですけど……」

「数字？」

「はい……首の上に焼印で『4213』と」

「数字……飛竜研究所の研究か何かかな」

「いや、飛竜研究所は飛竜をマーキングする場合、睡眠状態にしてからタグを取り付けるはずだ。ね、シエルクちゃん？」

ヴェアスターの注釈に、実家が飛竜研究所であるシエルクがうなずく。

「これはどの地域の研究所でも同じ方法をとっているはずですから……」

異常なほどの巨大さ、効かない音爆弾、尋常じゃない硬度を持つ鱗、そして謎の焼印。

謎は解決の糸口さえ見せずに深まっていくばかりであった。

「ドドブランゴ、ねえ……」

レイヴンはソファに腰掛けて本のページを繰りながら、前に立つシエルクを見た。

巨大水竜のフルス襲撃事件から一ヶ月。

橋の修理も完了して、人々の興奮もようやく収まってきた。

レイヴンの怪我も完治し、シエルクは早速レイヴンのゲストハウスに赴いて宿題だった「次に狩る飛竜」を提案しに来ていた。

「あの、何か問題でも……」

「却下」

「ええ〜……なんでですかあ!？」

いとも簡単に否定されたことに、シエルクが不満そうな声をあげる。

「牙獣種の討伐はお前が思ってるよりハードだぞ。少なくともクックやゲリヨスやらとはわけが違う。それに水属性のガノカットラスじゃ相性が悪い」

「むう……」

「ちゃんと考えてこいって言ったのに……そうだな……」

レイヴンは本を閉じると、しばし思案。

そしておもむろに顔を上げてシエルクに尋ねた。

「……赤と白、どっちが好きだ？」

「なんでこうなるんですか……」

「お前が赤を選んだからだろうな」

レイヴンの影に隠れながらシエルクが泣きそうな声で言うが、もう遅い。

北部の冷涼な沼地。

視界前方に開けるエリア4には、毒毒しいほどの赤い色を纏う飛竜が闊歩していた。

特異な姿と習性を持つ飛竜、フルフル。

赤い体色は亜種であることを示している。

「原種の体色は白で、亜種はあんな感じの赤色だ」

「何でよりによってフルフルで……しかも亜種の方なんですか……」

「フルフルは飛竜の中じゃ一番ノロくて初心者向きなんだよ。ちなみに何故亜種なのかというと、お前が赤を選んだから」

「……もし白を選んだら？」

「原種」

「やっぱりフルフルじゃないですかー!!」

「喜べ、辛い亜種の弱点は水属性だ」

「慰めになってません……」

「んなことより、さっさと行って来い。お前の訓練なんだからな」

「は、はい……」

恐る恐るシエルクがレイヴンの影から出て行こうとした時フルフルが、しつこくちょっかいを出していた一頭のイーオスに噛み付いた。ブヨブヨとした不気味な首が一瞬で倍近くに伸び、イーオスが首筋を噛み砕かれて絶命する。

なかなかショッキングなホラー現象を目にしたシエルクが慌ててレイヴンの背後に舞戻った。

「きゃああ……」

「イーオスの代わりに叫んでどうする……確かにキシヨいけど、実際戦ってみればそうでも……ああ、行っちゃまった……」

仲間を殺されてわらわらと集まってきたイーオスの群れを疎ましく感じたのか、フルフルは重そうな肉厚の翼を羽ばたかせて浮遊したかと思うと、何処かに飛び去ってしまった。

「ちっ……追うぞ。」

「お、おいてかないで下さいよ……!」

「……………」

「見つかりませんね……………」

「どっかの誰かさんがペイントし損ねたからな」

「うう〜……………さっきから謝ってるじゃないですか〜」

湿地の泥に足をとられながら、逃げたフルフルを探し回ること数十分。

一向に見つかる気配は無い。

と、不意にレイヴンが足を止めた。

「……………？ どうしたん……………」

「しっ！」

レイヴンはシェルクの口を塞ぐと、耳を澄ませた。

沈黙。

時折聞こえるイーオスの声に混じって……

「あ！」

今度はシエルクにも聞こえた。

「飛竜の……！」

「……しかもフルフルだけじゃない……もう一頭……」

2人は顔を見合わせ、それから同時に一方向を見た。

沼地の北にある洞窟。

先ほど行ったときは何もいなかったエリアだ。

「……急ぐぞ！」

「……はい！」

「はあ、はあ……」

「大丈夫か？」

「……はあ、はい……なんとか……」

2人が全力疾走で駆けつけたのはエリア北西に位置する、洞窟の開口部。

十数分前に聞こえた二頭の飛竜の咆哮は既に聞こえなくなっていた。

大きな洞窟の入り口は、まるで地獄に繋がるそのように2人を待ち構えている。

「……行くぞ」

「……はい」

意を決した2人は暗闇に足を踏み入れた。

「……意外と明るいですね、洞窟の中って」

「外からの光も入ってくるしな。発光性の地衣類や鉱石も多い」

広い洞窟内部は青白い光で溢れていた。

岸壁に露出している鉱石が外光を煌びやかに反射し、洞窟独特の雰囲気醸し出している。

「さっきの飛竜の声……何だったんでしょうか……？」

「討伐対象以外の飛竜が同じエリアに居合わせるのは珍しいことじゃない。だがあのフルフルの声、ただ事じゃなかった……」

風に乗って聞こえてきたフルフルの声は、まるで人の金切り声か断末魔のような戦慄を帯びていたのだ。

それこそ身の毛もよだつかのような。

まあもともとフルフルはそんな鳴き声だが、あれはもっと鬼気迫る声だ。

「それに……もう一頭の声は……」

「……行けば分かるはずだ」

「……なんか、怖いですね」

「少なくとも……楽しい気分にはなれないな」

2人が警戒しながら進んでいくと、一段と開けた空間に出た。

天井は5〜6mほどで、いくつかの雷光虫の群れが淡い光を放っている。

そして遂に目的のフルフルの姿を奥に見つけた。

「様子を見てきますね……」

武器を構えて歩き出そうとしたシエルクの肩を、不意にレイヴンが掴んだ。

「……気を付ける。様子がおかしい」

言われ、シエルクはもう一度フルフルの姿をよく観察する。

蒼い光の満ちる洞窟。

ゴツゴツした岩肌と輝く鉱石。

そしてこちらに背を向けて地面に丸まる赤いフルフル。

「え……?」

「……フルフルは普通、こんな目に付くところでは眠らない」

フルフルは今、2人の50mほど先の洞窟の真ん中に丸まっていた。さらによく見ると、あの飛竜独特の深い息遣いや呼吸による体の動きもほとんど見られない。

「……くれぐれも注意しろよ」

「……はい」

シエルクが近寄っていても、フルフルは気付く様子も無い。

5mほどまで接近しても起きる様子は無い。

シエルクが足音を殺しながら、フルフルの前方に回りこんだ。

後方のレイヴンがパーヘリオンを静かに構えた時……

「っ！！」

声にならない悲鳴。

シエルクが両手の剣を取り落とし、後退った勢いで尻餅をついた。

視線は目の前のフルフルに固定され、恐怖に体が震えている。

「どっしたっ!?!」

レイヴンが慌てて駆け寄ると、シエルクが震える右手で一点を指差した。

その先には赤いフルフル。

だがその赤は決して体色の赤だけではなかった。

緋の、赤。

絶命したフルフルを更に赤く染めているのは血。

おびただしい量の鮮血。

洞窟の蒼白い静光を反射して妖しいげな艶とぬめりを放っている。

そしてそのフルフルは……

「そんな……!?!」

己の血にまみれたフルフルは、腹の臓物を喰い破られていた。

本来、内臓が収まっているべき場所には今、何も無い。

胃や腸の一部と思われる肉片が幾つか、辺りに散乱している。

露出する肋骨の白さが赤い色彩の中、異常なほど映えている。

2人の追っていた獲物は、何者かによって先に『狩られて』いた。

人ならざる、何者かによって。

「レイヴン……さん……!」

シエルクが目には涙を浮かべながらレイヴンにしがみ付いた。

レイヴンは目を見開き、変わり果てた姿のフルフルを凝視する。

「何が……」

洞窟の冷えた空気が2人を着実に冷やしていく。

じわじわと、蝕むように。

死の温度。

「……ここで何が起きた!？」

「……立てるか?」

「……はい」

洞窟の外に出て少し休憩してからしばらくして、立ち上がろうとするシエルクにレイヴンが手を貸す。

と、何かを踏んだ。

拾い上げて、手の中で転がす。

薄く、硬質だが、鉱石ではない。

5〜6cm程の何かの赤い薄片。

いや、赤いのは血に濡れているからだ。

レイヴンがゆっくりと薄片の血を拭う。

「……………」

現れた色は、黒だった。

夜より黒い、闇色。

闇色の、飛竜の鱗。

「……………」

「……………」

シエルクが不思議そうにレイヴンの顔を覗き込む。

レイヴンの手の中の黒い鱗が全てを物語っていた。

あのフルフル狩りの事件から一週間、レイヴンはシュリフトウルムに籠もって文献を読み漁っていた。

シエルクも同行しようとしたのだが、「巻き込むわけにはいかない」の一言で突き放されてしまった。

ボックスやヴェアスターも様子を見に行っただが、一心不乱に資料を読み漁っていたという。

そんなある日、グローリアが王国の宮殿に何かしらの用で呼び出されてフルスを離れた。

二日後。

ボックスの店にレイヴンが訪ねてきた。

「いらっしゃ……レイヴンじゃないか。なんだか久しぶりだね？」

「ああ」

「シュリフトウルムに籠もってるらしいね？ シエルクも心配してたよ？」

「……分かったぞ」

「……沼地で拾った例の黒い鱗かい？」

「それも含めて、大方全部」

「……？」

「……奥で話そう」

2人はコンツエラルト鍛冶店の奥にある応接室に向かい合って座った。

「で、何が分かったんだい？」

レイヴンが机に大きな記録用紙の束のような物を置いた。

紙自体はさして古いものではないが長年人の手が触れられていなかったらしく、カウンターに盛大に埃が舞う。

ボックスがわずかに目を細める。

埃を嫌がったのではなくその記録用紙に反応したのだが、レイヴンに分かるほどではなかった。

「……なんだい、これ？」

「『飛竜異種交配実験記録』」

「こんなもの、どこで……」

「シユリフトウルム、封印書庫」

「シユリフトウルム封印書庫っていったら、司書長がギルドマスターの許可が無きゃ入れないはずだけど……」

「鍵があれば扉は開く」

「まあそうだけど……鍵はギルドマスターと管理長官しか……」

「ああ、知ってる」

「……まさか」

「忍び込んで、『借りて』きた」

「窃盗じゃないか！ まずいよ……ばれたら牢獄行きだって……」

「……そんなことより」

レイヴンがその用紙の束を何枚かめくっていく。

あるページで手を止めて、広げた。

そのページには何かの観察記録らしきものと、一頭の飛竜のスケッ

子。

「……水竜、だね。」

「ああ。実験交配ナンバー4213」

「……4213」

「フルスを襲った水竜に描かれていたナンバーと同じだ」

「ああ、確かに……」

さらに、観察記録の一番後ろを指差した。

一年前の日付。

『観察区域より脱走。行方不明』

「つまり……あのフルスを襲った巨大水竜は異種交配によって『造られた』飛竜だった、と」

「そうだ。しかもこの実験を行っているのは……」
表紙に戻す。

『西シュレイド王国軍モンスター研究所』

「王国管理下の……軍事利用か」

「ああ。そして……」

またペラペラと用紙をめくっていく。

開いたページには……

「……………」

「実験交配ナンバー0705、パーソナルネーム『カーラー』、13年前に脱走。交配種別はリオレウス希少種とイヤンガルガ、そしてその子供にナナ・テスカトリの細胞を埋め込んでる」

「13年前といえば……」

「脱走したのはティディエンが襲われた日の一週間前だ」

そう言うと、レイヴンは黒火竜のスケッチが描かれたページを閉じた。

「王国は……危険な飛竜を造っておいて脱走されたんだよ」

「……………」

「居場所も大抵の見当はつく。記録によれば、黒火竜は飛竜種を好んで捕食するらしい。特に甲殻を持たないフルフルなどの飛竜を。それに、火属性攻撃に特化させたがために、体温が常に高温に保たれる。だがグラビモスのような耐高温の構造は持っていないから、北部の寒冷地や沼地に棲み付く傾向がある」

「とうとうとは……」

「雪山や沼地でのフルフル討伐クエストをこなし続ければ、邂逅で
きる可能性が高くなる」

「……で、私にも協力を頼みたい、と」

場所は移って、レイヴンが来たのはヴェアスターのゲストハウス。

「頼む、師匠。いくら俺でも、黒火竜相手に一人で立ち回れると思
うほど自惚れちゃいない。できるだけ腕の立つパートナーが欲しい
んだ」

「私は構わないが……シエルクちゃんはどつするんだい？」

レイヴンは俯くと、ポツリと呟くように言った。

「……シエルクは連れて行かない。」

「どうして？」

「あいつには荷が勝ちすぎる。それに……あいつだけは巻き込みたくない」

ヴェアスターは小さく笑うと、記録用紙に目を通しながら言った。

「変わったな、レイヴン」

「……変わってないんだよ。だから13年も黒火竜を追っかけまわしてる」

「ふふふ……確かにな。そうだな、成長したというべきだったか」

「そんな歳じゃないさ。今年で27だぞ？」

「人間は死ぬまで成長するものさ。いや、広い意味で言えば生物と
いうのは死んでからも変遷していく。個体の成長は進化となり、そ
れらを繰り返して生物や種族はその世界や環境や時代に最適化され
ていく」

「……………」

「……新しい種を生み出そうなどというのは人が踏み込むべき領域
じゃあない。ましてそれがほんの一部の人間の現世的な利益の為
になされようというのなら尚更だ」

「さすがは元・古生物書士隊員。人間がデキてるな」

「歳をとればとるほど、頭でつかちになっていくのが分かって嫌になるよ。……今の私だって、あの頃の私とは違うんだ。誰もが一分毎、1秒毎に変化していく。それがどんな変化であれ、ね。この流れには何者も逆らえず、永遠に同じ状態を保つことなどできやしない」

「無常観、てやつか。」

「ああ、この街にしたってそう。どれだけ頑強な石や煉瓦でどんな荘厳な建造物を建てたっていつかは壊れ、崩れ、原形を失っていく。だがそれを良しとしないのは人間だけだ。人間だけは崩壊を『負』の現象として捉え、躍起になってそれを押し留めようとする。自然界では時間の推移によるごく自然で『正』も『負』もない変化。そうかと思えばある局面では、この交配実験のようにひたすらに変化を望み、無理矢理にでも変えようとする。……つくづく、勝手に不安定な生き物だよ」

「だけどその不安定さがこの突出した発展と進化をもたらした……そうだろうか？」

「皮肉にもね。まるで古に一度滅びたあの古代文明という夢の続きを見ようとするかのようにがむしゃらに発展していく……他の生物を利用し、踏み台にしてまで」

「……それはやはり間違ったことか？」

「人という種の側から見れば間違ったことでは無いんだろうね。もつとも、仮に間違っていようとも自らに恩恵をもたらす発展を人間が否定するようなことはしないのだからうけど。だけどさっきも言っ

たように、自然には『正』の概念も『負』の概念も無い。人がどれだけ発展しようとも、自然というレベルで見れば、その行為を評価する価値基準は無い。たとえ人間が己の発展によって自らに不利益を被るような事体が起きても、それは因果応報。もしこの世界が人によって滅びるようなことがあっても、必ずしもそれは『負』の結果ではなく、世界の一現象に過ぎないんだ」

「だからこそ……間違った方法で生み出された生物は、人間自身が『間違っている』と判断して狩らなければならぬだろうな。……それこそ、自分達の利益の為に」

「己の蒔いた種は自分で刈り取らねばならない。だから黒火竜も、生まれながらにして殺されるべき運命を背負わされた哀れな飛竜なんだ。少なくとも私はそう思ってるよ」

「ああ。……そうだ、このことは口外禁止にしてるんだ。今はまだあまり大っぴらにすべき話じゃない」

「……バックスがそう言ったかい？」

「そうだけど……なんか問題が？」

「いや……なんでもない。だが、一つ師匠として一つ忠告しておこう」

「なんだ？」

「人を信用するのは良いことだ。お前に関して言えば、最も推奨されるべきことだろう。だが信用する相手を間違えるな。疑心暗鬼になれと言っているんじゃない。ただ全ての人間が善人なわけでは無

いということを知れ。見極めろ、本当の協力者を、真の味方を「

」……忠告、ありがたく受け取っておく「

「……これで何頭目だっけ？」

「たしか21頭目だね」

ヴェアスターが竜車のガラス窓の露を手で拭いながら答えた。

外は一面の雪景色だ。

「……今日も来なかったか」

「待ち人來ず、だね。まあ、焦ってもいい結果は出ないさ。気長に待つしかないよ」

黒火竜の真相が分かった翌日から、2人でひたすら沼地と雪山のフルフルを狩り続けているが、黒火竜が現れる気配は全く無かった。

あれから4ヶ月は経っているが、目撃情報も無い。

「……こんなことに巻き込んでしまつてすまないな」

「嫌ならとうの昔に抜けてるよ。気にしなくていい。……むしろ嬉しよ」

「え？」

「自分の育てた弟子の成長をこんな間近で見られるんだ。師匠とし

てこんな嬉しいことはない」

「……ああ」

「それに……ワクワクするよ。年甲斐も無くな」

「……何で？」

「生涯最後の獲物が黒い雄火竜。有終の美を飾るにはおあつらえ向きじゃないか」

「やっぱり……ハンター辞めるのか？」

「自分の限界くらい、自分が一番知ってるんだ。いい年こいて引き際を知らないようじゃ、ベテランハンターを語る資格は無いと思ってる」

「……まあな」

「私は嫌だよ。『老人ハンター、ランゴスタの群れに襲われ重体！』なんてさ」

そう言っつて二人は笑う。

笑顔のまま、ヴェアスターが言った。

「……やっぱり、シエルクちゃんは誘わないのかい？」

レイヴンはすぐに暗い表情で俯いた。

無言で頭を振り、絞り出すように言う。

「……危険すぎる」

「主人公のヒーローっぽい台詞だな」

「間違ったことじゃないだろう」

「シエルクちゃんがいれば、お前はもっと強くなれると思うんだけどな」

「……怖いんだよ」

「なにが？」

「……俺にはシエルクを守ってやれる自信が無い。……もう誰にも死んで欲しくないんだよ」

「彼女は大丈夫さ。保護はいらない。自分の身は自分で守れる」

ヴェアスターの言葉に、レイヴンの心の中の何かがチクリと痛んだ気がした。

何かは分からないが確かな感情。

「どうしてそう言える？」

「前にも言っただろう？人は変わってゆくんだ。お前が一年前から変わったように、彼女も変わっているんだよ。もう一年前の新米ハンターじゃないんだ。もう、お前の可愛い弟子ではなくなっている

んだ」

「…………！」

今度は激痛が走るのがはっきり分かる。

僅かに開いた傷口をこじ開けられるような感覚。

「現実見るよ、レイヴン。お前が思ってるほど彼女は弱くない。もう、彼女は巣立っていくんだ。私の元からレイヴン、お前が巣立っていったようにな」

「俺は…………」

「彼女はもう『弟子』じゃない。一人の、『ハンター』だ。親鳥の翼に守られていては、若鳥は羽ばたくことはできないんだ。分かるな？ レイヴン」

「分かってる…………分かってる、でも…………怖いんだ…………」

「彼女を信頼しろ、レイヴン。師匠としての、最後の責務だ」

もうそろそろ床に就こうとシエルクが欠伸を一つした時、ドアのノックが聞こえた。

「……………」

もう深夜といってもいいほどの時間帯だ。

こんな時間に誰が訪ねてきたのだろうか？

「どなたですか……………」

用心しながらゆっくりドアを開けると、何か黒い塊が家の中になだれ込んで来た。

「ひう……………！？」

小柄なシエルクは黒い塊に押し倒されるようにして尻餅をつく。

「いたたた……一体誰ですか？」

覆い被さる謎の人物の正体は……

「よお、シエルク」

「……レイヴンさん？こんな遅くにどうしたんですか？」

「ん、いや……用は別に」

「とにかく……離れてください」

「……冷たいなあ。仮にも師匠でありパートナーだぞう」

無視してレイヴンを引っ張り上げて何とか立ち上がらせると、ソファに座らせる。

「お酒飲んでますね？レイヴンさん」

「いんや？」

「臭いがプンプンしますけど」

「はん。あんなもん、飲んだうちに入らんさ」

顔は紅潮しており、いつもとは明らかに雰囲気が違う。

普段、飲んでも決して酔った素振りを見せないはずのレイヴンがこんな風になるとは珍しい。

「……珍しいですね、レイヴンさんがこんな酔うなんて。なにかあったんですか？」

「俺が酒飲んじや悪いかなぁ？」

「いや、悪いとは言いませんけど……」

「まあ、ガキンちよには到底分からんオトナのたしなみだからな」

「……レイヴンさんと四つしか変わりませんけど」

「俺はまだお前の自称年齢を信じた覚えは無いぞ」

「そんなことで嘘ついたりしません！」

「まあ、長い人生隠したいことなんて一つや二つあるからな。年齢詐称くらいは目を瞑ってやるよ。そういえばこの前ヴェアスターが……」

「……レイヴンさん」

途端に饒舌になったレイヴンの言葉を切った。

「ん？」

「なにかあったんですか？自分を見失うほどお酒を飲みたくなくなるよ
うなことが」

話したくないようなことがあると、無意識に口数が増え、話題を逸

らせようとする。

1年も付き合えばそのくらいの癖はすぐに見抜けるようになっていた。

「……そりゃ俺だって飲みたくなることだってあるさ」

レイヴンが観念したように苦笑すると、苦々しげに呟いた。

「話してみてください」

シエルクが開きっ放しだったドアを閉めながら聞くと、少々声のトーンを落として尋ねてきた。

「なあ……お前は俺がいなくても大丈夫なのか？」

「……え？ どういうことですか？」

あまりにも唐突だ。

質問の内容がシンプル過ぎて、逆に真意を計りかねる。

「俺がいなくても、狩りで困らないか？」

「どうしたんですか、突然……」

「答えてくれ、頼むから……」

レイヴンが顔を上げてこちらを見た。

いつものような意志の強そうな眼差しではない。

すぎるような、救いを求めるような、そんな眼差し。

酔っ払いの戯言と、笑って受け流せないような切実さをはらんだ黒き眼差し。

「私は……」

迷った。

誰が彼に何を言ったかは分からないが、彼が自分の師匠として求めている答えと、彼が本当に欲している答えは恐らく違う。

しかしどちらかしか答えられない。

そう、どちらかにしか応えられないのだ。

そして唯一の判断要素である自分の現状は充分理解している。

思考は深く、且つ一瞬。

決めた。

「……私は、もう一人でも大丈夫ですよ。レイヴンさんが守ってくれなくても、もう大丈夫です」

つとめて明るく、自信有り気な言葉を選んで答える。

レイヴンは一瞬驚いたような目をし、しかしすぐに俯いて笑った。

きっとシエルクが見た中で、一番悲しそうで寂しそうな微笑。

「……大丈夫、か。師匠面して弟子の過保護を善しとしていたのは俺一人だったってわけか」

「レイヴンさん……」

自嘲的な彼の言葉に胸が締め付けられ、不意に罪悪感が募った。

自分が彼を傷つけたのだと。

すると、彼が呟いた。

「……分かってたよ」

「……え？」

「シエルクの成長なんて分かってた……だって一番間近で見えてきたんだから……誰より近くで、どんどん成長していくのを」

誰に語りかけるでなく、声を絞り出す。

シユリフトウムで黒火竜と自分の過去を話した時と似た、感情の吐露。

レイヴンの、脆く、暗い心の奥底を垣間見る瞬間。

「自分の甘さだって、過保護さだって、全部、全部……」

「べ、別に過保護だったわけじゃ……」

「過保護だったんだよ。もうハンターとして一人立ちしてもいい頃だったのに……パトナーだなんだと抜かしながら、結局はお前を守るという義務があると思っ込んでいた。なんだかんだ言っただけは……」

「……レイヴンさん！」

堪え切れなくなっただけの言葉を制止した。

「私はレイヴンさんのこと邪魔なんて思ったことないし、過保護にされてるだなんて思ったこともありません！」

「……」

レイヴンの驚いた眼差しで、何故か自分の声が怒気をはらんでいることに気がついたが、もう言葉が止まらない。

「バックスさんやヴェアスターさんに何を言われたか知りませんが、私はレイヴンさんを尊敬してますし、そんなレイヴンさんに師事していることを誇りに思っています！ だから……」

「……ありがとう」

「……え？」

突然の言葉に、純粹に戸惑う。

「素直に……嬉しいよ」

そういう彼の言葉に嘘は無いのだろう。

しかし寂しさを湛えた微笑と眼差しは変わらない。

少なくとも今は変えられないのだろう。

「俺も……巢立つ頃なんだろうな。」

「……え？」

「シエルクが俺から巢立っていったように俺も……」

独り言のように彼は呟くと、今度ははっきりと自分に向けた言葉がかけられた。

「もうお前が一人前のハンターだと見込んで頼もう。……協力して欲しい」

「……何をですか？」

ほとんど分かってはいるが、一応の確認。

「……黒火竜狩り」

彼の瞳から寂しさの色が消える。

心の奥に隠しただけかもしれないが、それでもいつもの強い眼差しに幾ばくかの安心感を覚えた。

やはり彼はじじいでもなく、はと。

「えつと……これで38頭目だね」

沼地のそれとは違い、凍りつくような寒さの雪山の洞窟の中。

その中央に横たわり息絶えるフルフルと傍らに立つ3人のハンター。

「こりゃ、そろそろフルフルの怨霊に呪い殺されそうだな」

「少なくともレイヴンさんは地獄行きですね」

「あんだとこのヤロー」

「女性に暴力はいけないぞ、レイヴン」

「暴力反対です」

レイヴンはシエルクに軽くスリーパーホールドを掛けながらフルフルの死体を見る。

戦闘でついた傷跡以外は目立った外傷は無い。

「ここにもいなかったか……」

「ギブギブですう〜！」

「お〜い、仲間を絞め殺すなよ〜」

「あ、わりい。忘れてた」

シエルクを解放すると、レイヴンは山麓に通じる洞窟の出口とは反対に歩き出した。

「……また行ってくるのか？」

「ちょっとだけな。先にキャンプに帰っててくれ」

そう言うとレイヴンは山頂に出る方へ歩いていった。

「ふう……」

洞窟の外に出ると、寒風が肌を刺した。

前方に開ける視界にはひたすら雪山の連なりがある。

吐いた息は白く曇り、寒風の中に消える。

「今日もいなかったか……」

雪山にフルフル狩りに来ると、一度はここに来る。

雪山を見渡せる山頂エリア。

キャンプに戻る前に、本当にいないかどうかを確かめたくなるのだ。

黒火竜が空を飛んでいないか。

「……………未練がましいな」

そう言って笑うと、いつものように踵を返してキャンプへの帰途へつく。

つこうとした。

「……………?」

何かの気配を感じて振り返った。

いや、気配などという大層な物ではないかもしれない。

なんとなく、不自然さを感じたのだ。

今、つい今まで見ていた景色に。

振り返った。

寒風に凍りかけた髪が揺れる。

「……………気のせいかな？」

そう呟いて再び帰ろうとした、その時だった。

「……………!？」

遠くの雪山の、頂上付近の黒い影。

飛竜。

羽ばたいて滞空している。

あまりに遠いため、いまいち姿形は分からない。

ふと、目のいいシェルクを連れてくればよかったとも考えた。

しかしレイヴンはその場を動くことができず、その影を凝視し続けた。

どれくらいそうしていたらろう。

緊張が時間感覚を麻痺させる。

まつ毛に霜がこびりつき、雪交じりの風に目が痛んだが、そんなこと気にならない。

と、山間に見え隠れしていた影が不意に高度を上げた。

光の加減で隠れていた姿が、露になる。

大きな翼。

遠方からも分かる堅牢な甲殻のライン。

強靱な顎と爪。

そして、純白に映える漆黒。

レイヴンの心に、喜びとも憎しみとも興奮ともとれる不思議に昂揚した感覚が広がった。

「……………見つけたぞ」

コンツエラルト鍛冶店の奥の応接室の机の上に広げられた大きな地図をレイヴン、ボックス、ヴェアスターが覗き込む。

「ここだね。あのエリアから西から25 kmにある山の山頂だ」
ボックスの指した地図上の山。

前回のフルフル狩りで黒火竜らしき飛竜の影を目撃した地点だ。

「山脈のかなり深い地点だ。ギルドもハンティングエリアからは外してる」

「ギルドの管理下から外されてるってことは、もし重症を負うようなことがあっても救援は来ないということだよ？ 大丈夫なのかい？」

「俺は構わん」

「私もだ。2人とも、そう簡単には死なないさ」

「ならいいんだけど……何せ相手の力は未知数だからね。油断は禁物だよ」

「ああ、分かってる。それから……ボックス、くれぐれもシエルクには言つなよ」

「どうしても連れて行かないのかい？」

ボックスの問いにレイヴンは答えず、地図を畳み、懐にしまってヴェアスターに言った。

「出発は明日の昼だ。あつちでキャンプ張って日没まで待機してから、深夜に奇襲をかける」

「あ、ああ……」

ボックスの心配そうな視線をさらりと無視してレイヴンは応接室を出て行った。

後に残されたヴェアスターが困ったように笑う。

「いつまで経っても扱いづらい子だよ、レイヴンは」

ボックスも苦笑して応える。

「何年も付き合ってきましたから。その辺は慣れてます」

ヴェアスターはレイヴンのお出で行った後を見送りながら静かに言葉を繋いだ。

「ティディエンが襲われたあの日から、あの子の中の時間は止まっているのかもしれないね」

「それは……」

「でなければ10年以上も黒火竜を憎みつつづけることなんかできな

いだろう。側にいた家族も知人も全て灰になり、地図からも、人々の記憶からさえも己の故郷が消されたあの日に……あの子は束縛されている」

「……………」

「宿敵を討ったその時……あの子は何を感じるんだろうね？ 止まった時から抜け出すことはできるのかな……」

「少なくとも、僕は……彼の友人として彼を応援してますよ」

ヴェアスターはボックスを見た。

眼鏡を隔てた向こう側にある、愛弟子の友人の目を。

その目は今、今までに見たことの無い眼力でヴェアスターを見返している。

それは、純粋な力強さではない。

だからこそ、ヴェアスターも見返した。

「……………私もだよ。あの子の師匠としてね」

読み終えた本を閉じる。

いつかレイヴンが読んでいた小説だ。

いつだっただろうか。

たしか初めてイヤンクツクを狩った時のキャンプだ。

随分、昔な気がする。

「一番初めに会った時はイヤンクツクに殺されかけて……レイヴンさんに助けてもらったんでしたっけ」

あの時から比べれば、かなり成長した。

レイヴンの手伝いができるほどに。

「少しは役に立ててるでしょうか……?」

外を見ると、煌々と月が光っている。

満月に近い。

静かに輝く月をボツと眺めると、ドアをノックする音がした。

(この前は酔っ払ったレイヴンさんが来ましたっけ……)

はい、と返事をしながら鍵を外してドアを開けた。

前のことがあり、少し身構えてしまう。

しかし来訪者は雪崩れ込んで来ず、ドアの向こうで待っていたのはレイヴンではなかった。

「……あれ? どうしたんですか、バックスさん」

「回復薬、モドリ玉、閃光玉……」

ボックスから出したアイテムをどんどんポーチに詰め込んでいく。

「……よし」

一通り詰め終え、今度は大量の弾薬を取り出した。

それらをスピードローダーと呼ばれる道具に込めていく。

これは6発、ないしは8発の弾丸を予め一まとめにしておくもので、戦闘時にはリロード時間の節約に役立つものだ。

全てのアイテムをポーチに詰めた後、ウェアスターは最後に己の相棒をボックスから取り出した。

グランニダオラ。

二十年以上も一緒に戦ってきた相棒だ。

一日も欠かさずに手入れし、そのおかげで今でも新品同様の輝きを

放っている。

それどころか、新品には無い威厳すら感じられる。

幾度となく共に危機を乗り越えてきたそのヘヴィボウガンは、今、ウェアスターの前で最後の戦いを静かに待っていた。

ストッパーを外し、展開。

滑らかなその動きには機械然とした不自然な硬さは無く、錆付いた鈍さも無い。

金属でもなく、甲殻でもない独特の動きと質感。

「……お前と一緒に戦えて嬉しいよ」

ふと窓の外を見ると、月が輝いていた。

明日には満ちるであろうその月の光はグラン＝ダオラに反射し、青にも、銀にも、金色にも似た複雑な彩りを醸し出している。

壁にもたれ、呟いた。

「……Sunlight and moonlight. Both the changes are always permanent even in case of not being in the sky」

（太陽の光と月の光。お互い、常に空に有り続けることはないけれども、その（両者の）移り替わりは永遠なるものである）

「My body changes. There is no
what keep is always. Nothing t
o say my body the rot some tim
e. However, I I pray want you
to be handed down permanently
as for my desire」

（我が身は移り変わってゆくものである。常に有り続けることは無い。我が身がいつか朽ちてゆくのも言うに及ばない。だが願わくば、我が思いは永久に語り継がれて欲しい。）

「Now, let's leave. My body wil
l be burnt in the dark and bec
ome an ash. My soul doesn't se
em to be drunk in the hell and
to be led to the paradise. Th
ere is a person who leaves it
neither, too or must be a pers
on who holds a funeral without
Still, I will go. I cannot he
lp going」

（さあ去ろう。我が身は闇に焼かれて灰となるであろう。我が魂は奈落に吞まれて浄土に導かれそうもない。残していく者もいなく、弔ってくれる者がいるはずもない。それでも私は行こう。私は行かないではいられないのだ……）

日が沈んでから時は久しいが、レイヴンのゲストハウスに光は無かった。

ベッドに腰掛け、出始めの色付いた月を見る。

雲も無く明るいと言えど、月光だけでは室内は暗く、部屋の中の物の輪郭はどこかぼやけていて曖昧だ。

外の喧騒の音もどこか遠くに聞こえ、まるでこの部屋だけ外界から切り離されたようだ。

レイヴンは己の手の平を見た。

その手中にある一片の鱗を。

薄い闇が満ちる部屋の中でも、それはしっかりと輪郭を有していた。不純物の無い全き漆黒だからこそ、薄闇の中でもはっきりと形が分かる。

「母さん……父さん……みんな……」

手を握る。

強く、強く。

幾重にも重なる壊れ、崩れる、乾いた音。

握りつぶされた鱗の欠片が指の隙間から静かにこぼれた。

月の光は粉のように細かい破片にも反射して小さな光を与える。

「俺は……」

顔を上げ、月を見た。

僅かに歪な円形だ。

おそらく明日の夜、満月になるだろう。

冷たい光を放つ太陽の映し身に、レイヴンは誓った。

「……絶対に、勝つ」

また一枚を暖炉の火にくべる。

薄い記録用紙が炎に吞まれ、一瞬で灰になって煙突に消えていった。

炎に消えていく飛竜達。

こんな重要な記録用紙を躊躇いなく焼却処分できるのは、王国の宮殿に原本があるからだろう。

何にせよ、万が一のことを考えて処分しておくに越したことはない。

グローリアは緻密な飛竜のデッサンが赤熱して失われていくのを見ながら苦虫を噛み潰したように顔をしかめた。

こんな仕事、自分だって好き好んでやってるわけじゃない。

黒火竜を間接的に処分するこの仕事を終えたところで、自分の経歴に箔が付くわけでもなく、少しばかりの報奨金が王国から出るだけだ。

それでも、やれと言われればやらねばならない。

王の廷臣の一人として。

別段、レイヴンやシエルクに特別思い入れがあるわけではないが、あまり気持ちのいい仕事ではない。

「まったく……」

残っていた記録用紙の束をまとめて炎に放り込んだ。

細かな火花が無数に散り、飛竜の交配実験の記録はフルスから消える。

グローリアは椅子から立ち上がると、薄暗い自室を見渡した。

この殺風景な部屋に自分以外に誰かがいるわけでもなく、明かりといえは目の前で飛竜を喰い終わった暖炉の火だけだ。

いや、もう一つ。

夜空に輝く月の、眩い光が窓から差している。

(シエルクがハンターらしくなった時にもたしか……)

しばらく無言で月を眺めると、事務机の上の紙切れに視線を落とし

た。

『黒火竜発見。レイヴンは明日の昼、雪山に発つ模様』

グローリアがすることは無い。

とうの昔に手配はしてある。

後で調査隊の気球に同乗するだけだ。

ふう、と一息を吐いた。

「やっと一つ面倒事が片付きますね……」

夜は、更けていく。

月は、満ちていく。

闇が、待っている。

「荷物は全部積んだか？ ヴェアスター」

「ああ、いつでも発てる」

「……よし、行こう」

ランビエ門のすぐ近くにある竜車の配車場はいつものように、着く人、発つ人、竜車の御者、それらを相手に商売を行う者で溢れかえっていた。

一際丈夫そうな作りの竜車にレイヴンとヴェアスターは乗り込む。

「お客さん、ずいぶん辺鄙な所で狩りをするんだねえ。わざわざハンターズギルドの管理外まで行くなんて……」

「ちよつとワケありだね……」

ヴェアスターが笑顔で返すと、老年の御者はレイヴンの方を見た。

「そっちの黒い服の人は……もしかして“漆黒の衝風”じゃないかい？」

「……ああ」

「今日はおのお嬢ちゃんはいないのかい？ ほら、化け物水竜を討伐した赤髪の……」

「……ちよつとワケありでね」

「何だか元気なさそうだねえ……喧嘩でもしたかい？」

レイヴンが曖昧に笑うと、老御者は笑ってアプトノスに鞭を入れる。アプトノスの嘶きと共に2人の乗った竜車は動き始め、配車場を出ると、フルスの外に繋がる門へと続く大通りを進み始めた。

「……彼女も、シエルクちゃんも一緒に行くことを望んでいたと思うよ。一度、黒火竜狩りに協力するように頼んでおいて……裏切るのかい？」

ヴェアスターが出し抜けに言った。

レイヴンは無言。

頬杖をついて窓の外を眺めている。

門へ続く大通りには様々な露店が所狭しと並び、人通りも多くて活気に溢れている。

「お前も……彼女と一緒に行くことを望んでいるんじゃないのかい？」

「……最初にな」

レイヴンがやっと口を開いた。

視線は依然、通りの風景に向けられたままだ。

「シエルクを連れてフルスに来た日……ここを通ったんだ」

「……うん」

「あいつ、楽しそうにこの通りの露店をずっと見ててさ。……本当
に、楽しそうにしててさ」

「シエルクちゃんもその時のことは言ってたよ」

「……正直、羨ましかった。俺も普通に生きてりゃ、黒火竜さえい
なけりゃ、あんな風に楽しめたのに、てな」

「……そうかもな」

「だからあいつを診療所に送り届けてすぐにあいつの前から消えた。
……あいつの幸せそうな笑顔が辛かったんだ。俺が決して手に入れ
られなかったものを持つてると思ったら、ひどく辛かった」

一つの露店の前を通り過ぎる。

ミニチュアサイズのリオレウスの、精巧な骨格標本が簡素な商品台
の上にある。

『すい〜い……』

『あ〜もう、待ってくださいよレイヴンさん！〜！』

『…あ！〜！ レイヴンさん見てくださいよ！〜！ これこれ！〜！』

「……でもその後、シュリフトトゥルムでたまたま再会して……黒火竜の話をしたらあいつ、泣いてくれたんだよ。ほぼ初対面の、よく知りもしない男の身の上話に泣いてくれたんだ。……その時から自分でも驚くくらいあいつの世話焼くようになって……俺はあの笑顔を守りたくなかった」

「うん」

「……間違ってたのかな？ あいつに黒火竜のことを話したのは……」

「……………」

「あそこで黒火竜の存在を知らせなきゃ……こんなに……辛い思いで仇討ちに行かなくても済んだのかな？」

「……それは違うね」

「……どうして？」

「シエルクちゃんとの出会いと、その後の相互共生関係はお前を強くした。技術的にも、精神的にも。もし以前のお前のままだとしたら、黒火竜は倒せなかったに違いない」

「……俺はそんなに強くはない。買い被り過ぎだ」

「うん、そうだろうね」

「おいおい……どっちだよ」

「残念ながら、今のお前には私の言う“強さ”は無い。シエルクちやんがいて初めてお前の本当の強さが発揮される。翼が無ければ飛竜も飛べないよ」

「……仮にそうだとしても、もう遅いさ。騙したようでシエルクには悪いが……」

露店の並びが途切れ、開けた場所に出た。

フルス北岸最東端メステイオ地区。

フルスの外縁部にある9つの門の一つであるランビエ門の門前広場に到着したのだ。

そびえ立つ巨大な鉄扉を見もせずにレイヴンがポツリと言った。

「……飛べない飛竜もいるんだ」

と、竜車が止まった。

どうやら開門を待つために停車したようではなさそうだ。

ヴェアスターがどうしたのかと老御者に尋ねようとすると、老御者は前を見たまま言った。

「“漆黒の衝風”、レイヴン＝ウォルクさん。まだ遅くはないようだよ」

「……？ なにを……」

御者は笑顔で振り返り、竜車の進行方向の先を指差した。

「……神様は最後のチャンスを……あなたに翼をくださったようだ」

ヴェアスターが驚いて身を乗り出し、竜車の前、ランビエ門を見た。

石造の門の見張り塔の下、赤髪の小さなハンターが大荷物を足元に置いて何かを待っている。

誰かを、待っている。

彼女がこちらに気が付いた。

手を振り、駆けてくる。

無邪気な笑顔で。

「……レイヴン、いい弟子を持ったね」

レイヴンは唇を噛み締め、そっぽを向いて窓の外を見続けた。

視界が滲んで、目頭が熱くなる。

「……あの……バカ……」

絞り出すような声は震えている。

一筋だけ流れる涙。

13年振りだった。

だがあの悪夢で流した涙とは違う。

「ありがとう……シエルク……」

シエルクが合流した馬車はランビエ門をくぐり、一路、北の雪山を
目指す。

北に伸びる舗装された街道を行くとき、ふと左側を見ると防壁に囲
まれたフルスが遠くに見えた。

もうあそこには帰れないかもしれない。

強固な防壁に囲まれた安住の地。

しかしレイヴンの求める本当の安住の地は霧の向こう側にある。

黒く澱んだ靄の向こう。

そして、隣にいる、何故自分に何も告げずに黒火竜狩りに行くことしたのかを怒るパートナーこそが靄を突き抜ける鍵になるのか。

(弟子に頼らなきゃいけない師匠ってのもなあ……)

不意に、さっき慌てて拭いた涙の跡が残っていないか気になって目をゴシゴシと擦ると、シエルクが怪訝な顔をした。

「何してるんですか？ レイヴンさん？」

「……ゴミが入ったんだよ」

シエルクを挟んだ反対側に座るヴェアスターが忍び笑いを漏らす。

「レイヴン。シエルクちゃんがいなかったのがそんなに淋しかったかい？」

「あれ？ レイヴンさ〜ん、そうだったんですか？」

シエルクが悪戯っぽい目で下から顔を覗き込んでくる。

レイヴンは嘆息し、視線を遠のくフルスに戻した。

「……アホ師匠に、バカパートナーか」

「ああ〜！！ 可愛いパートナーをバカ呼ばわりはひどいです〜！！」

「素直じゃないなあ、レイヴン」

賑やかな車内。

暖かに降り注ぐ昼の日差し。

ゆっくりと進む竜車。

レイヴンは確かに今、束の間の平穏と安息を実感していた。

永遠に、続いてほしい安寧を。

三人のハンターが、慎重に深夜の雪嶺を進む。

未踏の地のために積雪は深く、一歩踏み出すごとに膝の上まで雪の中に埋まってしまつ道。

吹雪いていないのがせめてもの幸いか。

レイヴンはふと夜空を見上げた。

多少の雲は見受けられるものの、爛々と満月が輝く明るい月夜だ。

夜の雪山を照らす、色を失った蒼白い、冷たい光。

「……………どうしたんですか？」

少し後ろを歩くシエルクが尋ねてきた。

「いや……………一旦、休憩するか」

キャンプから雪山に登り続けること3時間。

尾根に掘った大き目の雪洞の中で三人は休憩をとっていた。

固形燃料の火で湯を沸かして淹れたコーヒーは入ったカップを、シエルクがレイヴンとヴェアスターに手渡す。

「どの辺りに黒火竜がいるか、見当はついてるんですか？」

「まさか当ても無く雪山を歩き回ってるんじゃないだろうね」

「まさか。ある程度の見当はつけてる」

雪洞の中でレイヴンは一方向を指差した。

それは山頂の方向だ。

「フルフル狩りの時に、南側の山頂の一部が崩落して平地ができてるのが見えた。おそらくそこをねぐらにしてるはずだ」

「なるほど。見た感じ、この山に飛竜が住めるほどの洞窟はなさそうだからね」

「なんだか……緊張してきました」

「ふふ……私は楽しみだけどね」

「……俺は」

村の光景がフラッシュバックする。

火。

黒。

灰。

死。

レイヴンは一気にコーヒーを飲むと、頭を振ってパーヘリオンを持った。

「……行こう。決着をつけてやる」

「同じですね……」

しばらく歩いて、目的の山頂南側の平地に出た。

以外に広く、飛竜一頭と立ち回るにも十分な広さだ。

「本当にここにいるんだね……黒火竜が」

そこら中に足跡がある。

鋭利な爪を持つ雄火竜の足跡だ。

無論、こんな寒冷地に普通の雄火竜はいないだろうから黒火竜の物と見て間違いないだろう。

積雪は雪嶺に比べたら少なく、これなら戦いの妨げにもならないだろう。

「でも……黒火竜はいませんか？」

あくまで形跡だけだ。

主が見当たらない。

「だが一応……戦闘準備はしておいた方がいい」

ヴェアスターがグランハダオラを展開した。

シエルクがガノカットラスを抜き、両の手に持つ。

レイヴンはパーヘリオンのシリンダーの中身を確認し、肩に担いだ。

その時、僅かにそよんでいた風が止んだ。

稜線に擦って微かに鳴っていた風音が絶えて、空気が風ぐ。

そしてレイヴン達は明らかな雰囲気の変化に気付いた。

言い知れぬ威圧感と緊張感。

三人の狩人は同時に振り返り、天を仰ぐ。

そして天を衝く鏃の如く尖った山頂にそれを見た。

「……………黒火竜！」

10 m程上の山頂、満月を背に黒火竜が三人を見下ろしていた。

普通の雄火竜の1.5倍はあるその体躯は、異常なほど発達した筋肉に、鋭さと強固さを増した漆黒の甲殻を纏っている。

深更の空を背景にしてもはっきりとシルエットが分かるほどの、純然たる黒の体色。

眼光のみが怪しく光り、敵を射抜く。

そして抑えがたい高温の体熱がその漆黒のシルエットの縁を、屋気楼のように揺らがせている。

それは夜色より深き黒の大气の揺らぎ。

闇色の陽炎。

途切れる音と時間。

黒火竜が息を吐いた。

その息が白く凍てつくのを見て、レイヴンが言葉を放つ。

「久しぶりだな……………貴様の息の根を止めに来たぞ」

黒火竜は答えず、代わりに身を縮めた。

畳まれていた巨翼が広げられ、天蓋のように月影を遮る。

光を失くした闇に、眼光が鋭く光った。

「……来るぞ！」

ヴェアスターが警告した刹那、黒火竜が動いた。

山頂を蹴り、解き放たれた弾丸さながらの速さで10mの高さから三人に突進をかける。

反応では間に合わない。

反射と防衛本能で三人は緊急回避。

レイヴンは何度か転がる内に体勢を整え、素早く立ち上がると、パ
ーヘリオンを構えた。

減速もせずに雪原に突っ込んだのにも関わらず、黒火竜は何事も無
かったかのように立ち上がり、こちらに向き直った。

月が雲を退け、再びその輝かしい光を戦場に注ぐ。

月光に照らされて黒火竜の姿が更に鮮明に確認できた。

初めて相対する我が仇。

禍禍しいほどの威圧的な雰囲気と、そこから伝わる確かな強大さ。

間違つて生み出された災厄。

「来い……!!」

黒火竜が身を沈めて突進態勢に入った。

レイヴンは落ち着いてパーヘリオンのトリガーを引く。

連動し、最初のインパクトポジションにあつた『雷』の挿薬子の炸薬が撃鉄の衝撃により発火。

雷光エキスにキリンの雷角の粉末が配合された特殊薬品が、浸透機構に圧縮浸透される。

さらに岩竜の骨髄で作られた末梢浸透髓を介して刃全体に高圧電流が帯電した。

鋼に紫電が走る。

この間0.5秒。

そしてそれだけの時間で黒火竜はレイヴンとの距離を縮めた。

「……はっ!!」

一歩分、右にステップ。

少しでもタイミングを間違えれば確実に殺される。

水竜の時よりさらにシビア。

すれ違い様に、低く構えていたパーヘリオンを振り上げた。

斬撃感が確かに伝わり、鋭い雷光が視界に踊る。

すぐに振り返って黒火竜を視界に捉えなおした。

制動をかけた黒火竜の左脇腹に浅い斬撃痕が僅かに覗いている。

「……よし」

倒せないレベルじゃない。

古龍種並の戦闘能力は持ち合わせているものの、所詮はモンスターの類なのだ。

動きを読むことさえできれば、勝てる。

（しかし……本当にすごい熱だな……）

ほんの一瞬すれ違っただけなのに火傷するかと思うくらいの体熱だった。

ナナニテスカトリやテオニテスカトルと同等か、それ以上。

だからといってクーラードリンクなんて飲んだら、移動中に凍え死にかねない。

（耐えるしかないか……）

黒火竜が体勢を立て直してこちらに振り返る。

と、グランⅡダオラの砲声が木霊した。

三発。

黒火竜の頭部に命中した水冷弾が弾け、冷水は体熱により一瞬で蒸発して水蒸気を生んだ。

黒火竜が疎ましげに首を振る。

その隙にシエルクが黒火竜の足元に突進。

「たあああ!」

一対の水双剣が脚部に振り下ろされ、刀身から噴き出した水が華麗に散る。

目まぐるしい速さで繰り出される連続攻撃は頑強な甲殻を砕くには至らないが、確実に黒火竜にダメージを与えていく。

剣から噴出する水は触れた途端に蒸発し、さらに寒風で凍てつき、さらに斬撃で切り裂かれる。

ダイヤモンドダストにも似た輝きがシエルクの周りを彩っていた。

レイヴンが追撃に入る。

黒火竜は足元の敵と迫り来る敵から距離を置く為に大きく羽ばたい

た。

「くっ……!!」

盛大に舞い上がった雪煙で平地全体の視界が遮られた。

「二人とも下がれ!!」

二人が後方に退避したのを確認後、ヴェアスターが雪煙の中に連続して射撃を行う。

リボルバー型ボウガンの特長の一つである連続射撃。

散弾が前方180度全域に撃ち込まれ、弾を喰らった黒火竜が僅かに声を上げた。

「あそこだ!! 2時の方向!!」

レイヴンとシエルクがその方向に突撃。

夜の闇と雪煙が視界を埋める中、レイヴンが突然隣のシエルクの肩を掴んでしゃがませた。

「!?!」

直後、黒く、破壊力のある長大な尻尾が2人の頭上を高速で掠める。

「右から回れ!」

「はい!」

2人が二手に分かれて尻尾の付け根があるはずの方向に突撃を再開した。

「はっ！！」

「てあっ！！」

尻尾を振り終えた黒火竜は右から双剣の連撃と水を、左から大剣の一撃と雷をもろに受けた。

黒火竜はたまらず叫び、見えぬ狩人を追い払うためにもう一度尻尾を振り始める。

しかしヒット・アンド・アウェイ戦法をとる2人は既に黒火竜の足元から消えていた。

代わりにヴェアスターの射撃による弾丸が連続してヒット。

絶え間ない連携攻撃に黒火竜がさすがにたじろぐ。

レイヴンとシエルクはその瞬間を見逃さない。

薄れつつある雪煙の中、黒火竜に再接近。

まず、素早くリロードしたヴェアスターが鬼人弾をシエルクに撃ち込んだ。

一時的に戦闘能力がアップしたシエルクは黒火竜に飛び掛ると、活性化した身体能力により凄まじい速さで攻撃を繰り返す。

いわゆる『乱舞』といわれる、双剣使い独特の戦法だ。

これに耐えられなかった黒火竜はバランスを崩して倒れこんだ。

レイヴンは二回目のトリガープル。

インパクトポジションにあった二弾目の炸薬が炸裂した。

今度は属性添加は行われない。

ただ澄んだ金属音が響き渡っただけだ。

長大な刃の斬味と強度を数倍に跳ね上げる『硬化』の挿薬子。

「これで……!!」

跳躍。

大上段に振り上げられたパーヘリオンが全力で、転んだ黒火竜に叩き降ろされる。

万鈞の一撃。

胸部に振り下ろされたパーヘリオンは超硬度の甲殻を砕き、骨を断ち、肉を裂いた。

黒火竜は苦しげに呻きながらもなんとか立ち上がる。

2人は素早く後退。

深追いは命取りとなる相手だ。

油断はできない。

「……上手くいつているね」

「そうですね!!」

ヴェアスターとシエルクが垣間見える希望に喜び、安堵する。

視界を遮っていた雪煙は晴れ、月の光が雪山を明るく照らしている。

黒火竜はさっきの傷が効いたのか、幾分辛そうにこちらを睨んでいる。

明らかにこちらが優勢だ。

「もしかしたらこのまま……」

「いや……」

シエルクが荒れた息を整えながら言おうとすると、レイヴンがそれを否定した。

「確かに連携攻撃は上手くいつているが……まだブレスを……」

レイヴンが言いかけた言葉を止めた。

黒火竜がその場で羽ばたき始めたのだ。

おびただしい量の血を胸から滴らせながらも、どんどん高度を上げていく。

「……ブレスが来る！ 逃げるぞ！」

「火竜種のブレスなら避けられ……」

「村を一つ吹っ飛ばすような威力だぞ！ そんな生易しいもんじゃ……」

黒火竜が上昇を止めて息を吸い込んだ。

三人はとにかく各々の判断で散らばる。

黒火竜に背を向け、とにかく距離をとろうとする。

黒火竜が顎を開いた。

一体どんなブレスなのかは見当もつかないが、並大抵の威力ではないはずだ。

実際見たわけではないが、直感的に、感覚的に分かる。

（だめだ、間に合わない……！）

レイヴンが上空の黒火竜を振り返った時、闇に舞う黒火竜の口から眩い閃光が迸ったのを見た。

それは火竜種の火の玉レベルのブレスなどではなくて……

(…………あれがブレスだと！？)

刹那、爆音と凄まじい熱と衝撃を背に受ける。

「なっ……………！？」

凄まじい衝撃に、為す術なく体が爆風に踊った。

熱と闇と衝撃。

地面にぶつかり、宙を舞い、また地面にぶつかる。

方向感覚は完全に失われてエネルギーの奔流に翻弄される中、レイヴンは一つの声を聞き取った。

「…………レイヴンさん！！」

「シエルク！？」

ほんの一瞬、飛ばされるシエルクの姿を視界に捉えた。

反射的に空いている左手を伸ばすが、届く間もなく視界から消えていく。

「シエルク！？ シエルク！！ ……うあっ！？」

突然襲う、宙に放り出される浮遊感。

そして落下。

(ま、まずい……!!)

虚空に投げ出され、体が本能的に恐怖を感じる。

だがどうすることもできない。

残された選択肢は、墜ちるのみであった。

……痛いな。

でも生きてる証拠か。

それにしてもレイヴンやシエルクちゃんは大丈夫かな……

とりあえず、起きてみよう……

「……………ぐあっ！！」

ヴェアスターは目を覚ました途端、激痛に呻いた。

頭が痺れるほどの痛みには耐えながら状況把握に努める。

(雪原に……倒れてるね……)

どこまで滑落したのかは定かではないが、生きていること自体奇跡だろう。

あたりは真っ暗なままで、滑落からさほど時間は経っていないようだ。

(頭は痛いけどぶつただけかな。腕もちゃんと動く……足は……)

仰向けの姿勢で頭だけ起こして自分の足を見、脱力、一言。

「……酷いね」

見たことを軽く後悔した。

足はあらぬ方向に捻じ曲がり、衝撃で外れかけた防具の陰に白いモノが見えてしまっていた。

歩くことは愚か、立ち上がることさえできないだろう。

この辺りは積雪はさほど深くはないが、動けないせいで体はどんどん冷えていく。

(……これまでか)

助かる見込みなどない。

結局、黒火竜の討伐を果たすことはできなかった。

しかしある程度の達成感はある。

存在さえはつきりしなかった黒火竜を見つけ出し、この目で見、弾丸を撃ち込んだ。

それだけでも大きな成果……

「……ふふ」

これは志半ばに死に絶える者へのせめてもの慰めなのだろうか。

誰の誰に対する？

自分の自分に対する妥協の果ての弁解だ。

(情けないな。歳をとると死も受け入れやすくなるのか)

ふと周りを見回すと、すぐ側にグラン＝ダオラが転がっていた。

所々凹んではいるが、派手に壊れてはいない。

引き寄せ、横たわったままそれを抱く。

重たくて、冷たくて、しかし最も信頼できる戦友だ。

共に、死んでゆきたい。

無意識に目を閉じた。

さらなる闇が世界を覆い、囮らずも聴覚が研ぎ澄まされる。

冷たい風の音、どこかを流れる小川の音、雪の溶けてゆく音まで聞こえる。

「……………」

目を開けた。

『違う』音がする。

自然の音じゃない。

人為的な音だ。

雪の中を歩く音。

装備を纏ったハンター特有の重い足音じゃない。

味方ではない。

自分の頭の方向から。

素早くグランニダオラの撃鉄を引き起こし、体を反転しつつ伏せに。

伏せ撃ちの体勢をとる。

足に激痛が走ったが、おかげで意識は繋ぎとめられた。

やがて雪煙と闇の中から人影が現れる。

深夜ということもあり、よく見えない。

だが『アイツ』に間違いないだろう。

「……………口封じのためにわざわざ付けてきたか」

人影は何も言わずに歩みを止めた。

距離は2〜3 m程。

人影が懐から何かを取り出した。

構える。

ヴェアスターも狙いを定めた。

「君が私を殺しても何も変わりはない。誰かがこの世に真実を曝す」

人影は応えない。

一拍。

ヴェアスターは掠れた声で笑ってグラン・ダオラから手を離れた。

再び目を閉じ、呟く。

「ふふ……竜鎧の毀手よ……君を裁くのは私じゃない……」

銃声。

一発。

他に音は無い。

純白に彩られた冷たい死。

こうして仲間であり師であった男は誰にも見取られぬまま殺されていった。

シエルクは気を失ってはいなかった。

痛みがそれを許さなかったからだ。

林の中に設営したキャンプはすぐそこに見えている。

雪を被った木々に寄りかかりながら一歩ずつ進んでいく。

足取りは遅く、重い。

右足を引きずっているからだ。

その右足の太ももからは今、異様なものが突き出ていた。

長さ30cmの太い木の枝が鎧の外れた大腿部に突き刺さっているのだ。

斜面を滑落したシエルクは現在地が分からなくなってしまったので麓まで降りようと歩いていたら、新雪の雪棚を踏み外して雪崩を誘発してしまい、崩れる雪の波に吞まれて再び斜面を滑落。

キャンプを張った麓の林まで滑り落ちたシエルクは幸運にも、雪に埋まって窒息することはなかったが、針葉樹の林に雪崩と共に突っ込んだ際に鋭い枝が足に突き刺さったのだ。

胸や腹に刺さらなかったただ不幸中の幸いとも言えるかもしれない

が、完全に右太ももを貫通した鋭い枝は、予想以上に行動を妨げた。足を動かす度に走る激痛に涙が出、止めどなく血が流れ出るせいで意識ははつきりしない。

それでもシエルクは暗闇の支配する林を2km近く踏破して、何とかキャンプに辿り着いた。

心の中ではレイヴンやヴェアスターの姿を期待していたのだが、テントの中には誰もいなかった。

いた形跡すらない。

点けっぱなしにしていたランプの火がゆらゆらと揺れているだけだ。

それでもシエルクはキャンプに到着した安心感から、簡易ベッドに崩れるように腰掛けた。

改めて傷の具合を診る。

枝を伝って流れつづける真紅の血が防水布を張った地面に血溜りを作っていく。

どれくらい出血したのかはわからない。

シエルクは唇を固く結び、枝を両手で掴んだ。

息が荒くなり、鼓動が早まる。

手が震える。

意を決した。

「　　っ！！」

一気に引き抜く。

血が噴き出すようなことはないが、耐え難い激痛とおぞましいほどの異物感が全身を伝播した。

枝を捨て、失血と痛みショックで遠のきそうになる意識を必死で引き止めながら、ベッドの側のリュックの中身を手探りで漁る。

中から消毒薬を取り出すと、薬瓶の蓋を外し、傷口に直接振りかけた。

「……………く、う！！！！」

枝を引き抜いた時の数倍の焼けるような激痛に、体が緊張する。

薬瓶が手から滑り落ち、地面に落ちて割れた。

だがそんなことには構ってられない。

ベッドのシーツをカ一杯握り、涙を浮かべて何とか痛みに耐える。

次に、鎧を留めていたベルトで太ももの付け根を強く締め上げた。

感覚の無くなってきた手では力加減が分かり辛い、取り敢えずの

止血はできた。

震える手で傷口に包帯を巻き終わると、ベッドに倒れこんだ。応急処置にすらなっていないが、もう意識の限界が近い。

「あ、そうだ……」

おもむろにリュックを探ると、青い小さな小瓶を取り出した。中には透明な液体が入っている。

（確かバックスさんが来たときに……）

出発前夜。

「……あれ？ どうしたんですか、バックスさん」

『ごんばんは。夜遅くにすまないね。どうしてもシエルクに報せなきゃならないことがあって……』

「……？ とりあえず中に入って話を……」

『いや、ここで構わないよ。レイヴンが黒火竜を見つけたって話は聞いたかい？』

「いえ、そんな話は……」

『……やっぱりね。この前のフルフル狩りの時に黒火竜の影を目撃したらしいんだ。明日の昼、雪山に発つって』

「そんなこと、私には一言も……」

『……シエルクちゃんには傷ついて欲しくないんだろうね。レイヴンの中ではシエルクちゃんについてまだ整理ができていないんだ』

「……どうしたらいいんでしょう？」

『シエルクちゃんが決めるんだ。レイヴンの力になりたければ一緒に行ってあげるといい。レイヴンの意思を尊重するなら残ればいい』

「……………」

『……どうする？』

「……私、行きます」

『……無理して行くことはないんだよ？レイヴンが言う通り、これが危険なのは確かだし……』

「私、レイヴンさんに認めてもらいたいです。弟子として、パートナーとして」

『……ありがとう。レイヴンも口ではああ言ってはいるけど、ホントは一緒に行きたいと思っっているはずだから……』

「そうと決まったら準備しなくちゃいけませんね!」

『そつだ……これを持ってくとい』

「薬……ですか?」

『特製回復薬。主成分は血液凝固薬だ。出血が酷い場合は少しは和らげることができる。他にも回復薬や活力剤が配合されてるからね。少しは役に立つと思うよ』

「ありがとうございます!」

『僕にしてあげられる事はこれくらいだからね。……明日はランビ工門の所で待っているといい。あの二人の竜車はあの門から出るはずだから。じゃ、僕はこれで失礼するね』

「あの……報せていただいてありがとうございます!」

『どういたしまして。健闘を祈ってるよ』

(……少しはマシになるかな?)

瓶の蓋を開け、中身を一気に飲み干す。

おそらくシエルクが口に入れたことのある物の中で一番苦い。

少しむせたが、しばらくして足の痛みが和らいできた。

(すごいな……バックスさんの薬……)

いよいよ意識が朦朧としてきた。

頭が痺れる。

揺れるランプの火がぼやけた。

(レイヴンさん……ヴェアスターさん……大丈夫かな……)

(私、レイヴンさんの役に立てたかな……)

思考の限界だ。

眠りゆくように意識レベルが落ちてゆく。

(明日……フルスに帰ったら……レイヴンさんに……)

瞼を閉じると、何とも言えない安らぎが体を包み込んだ。

緩やかなまどろみに身を任せる。

「おやすみなさい……レイヴンさん……」

深い、深い眠りに落ちてゆく。

永久に覚めることのない、死へ誘う眠り。

緋色が真紅を彩る、安らかなる死へと。

息をする度に氷のような冷気が口から入りこみ、喉を舐めるように通過し、肺に満たされていく。

意識は虚ろだ。

視界に広がる夜空に、瞬く星は見えない。

雲が覆い隠しているのだ。

雪は音を吸い込み、雲は光を呑みこむ。

故に、音も光も無い。

雪の中に仰向けに倒れるレイヴンは臃な頭で考える。

まるで死んだようだ、と思う。

心地よくさえある。

なにも考えなくていい、なにも思わなくていい。

判断と思考を必要としない時間と世界。

じつじつのを安らぎと言っただろうか。

(……違う)

いや、違わないだろう。

これも一種の平穩の極地点。

死。

誰でも平等に到達できる、最後に行き着く精神の解放の地。

全てのしがらみから解かれ、俗世の悩みや苦しみから離脱できる。

究極の現実逃避。

だが、しかし。

(俺は……まだ……)

手を動かした。

手袋は取れていなくて、凍傷だけは免れたらしい。

右手にはしっかりとグリップの感触。

上体を起こした。

あちこちが痛む。

だが大きな怪我は無いようだ。

地に突いたパーヘリオンを杖代わりにして立ち上がる。

何だか久しぶりに立つ気がした。

実際にどれだけ時間が経ったのかは分からないが、まだ夜は明けていない。

はぐれてしまったが、シエルクとヴェアスターは大丈夫だろうか。

だが今は黒火竜の元に戻るのが先決だ。

幾分、頭はクラクラしているが意識ははっきりしてきている。

「……まだだ」

冷えた体に熱が戻る。

萎えた心に鞭打って歩き出す。

「俺は……まだ死ねない……!!」

夜闇より黒い瞳に力が宿る。

パーヘリオンを肩に担ぐ。

「貴様を……葬り去るまで……!!」

「これは……」

再び山頂に向かって登っていると、斜面が崩れている地点にぶつかった。

（雪崩か？）

崩れた斜面の麓には……

（キャンプか……潰されてなきやいいが）

針葉樹林の一部は雪の波に吞まれているようだ。

だがレイヴンは首を振った。

（帰ることなんか、考えないほうがいい）

崩れた斜面を迂回し、さらに進んでいく。

三人で休憩をとった雪洞が見えてきた頃、乾いた音が山に響き渡った。

銃声。

レイヴンはふと足を止めて、山間に木霊する音の残響を聴く。

「……………」

一瞬、ウェアスターのものかと思ったが、よく考えて首を振った。

彼の相棒であるグラン・ダオラの砲声はこんなに軽くはない。

音は一発限りで、後にはさっきまでと同じように沈黙が広がるばかりだ。

レイヴンは再び歩き始めた。

「はあ……はあ……はあ……」

レイヴンはようやく山頂南側の平地に帰ってきた。

休憩もせずにノンストップでここまで来たので、さすがに息は上が

っている。

だがレイヴンは途中で悠長に休む気にはならなかったのだ。

黒火竜が別の山に飛び去らないとは限らない。

一刻も早くこの棲家に辿り着く必要があった。

だがレイヴンが到着した時、闇色の陽炎はその地でまだ揺らいでいた。

手負いの黒火竜はレイヴンを視認しても逃げることはなく、また、飛びかかるうともしない。

距離は約50m。

睨みあった。

どちらも退かない。

レイヴンはゆっくりとパーヘリオンを構えた。

同時に黒火竜が翼を広げる。

一触即発。

……と、二者の間に何かが舞い落ちた。

白い。

粉雪だ。

吹雪くわけではなく、ちらちらとまばらに舞い落ちる粉雪。

風はなく、深々と降る純白。

「この時を待っていた……」

パーヘリオンをゆっくりと構えなおす。

両手でホールドし、切っ先を敵に向ける。

正眼の構え。

「なあ……黒火竜……」

トリガープル。

炸薬発火。

属性添加。

火でも、雷でも、硬化でもない。

刃が、黒く染まった。

妖しげなほど、黒く。

黒き剣から発せられた謎の旋風に、粉雪が舞う。

「……生きて朝陽を拝めると思っな」

黒火竜が身を屈めた。

臨戦態勢。

「貴様には永久にこの夜の中で眠ってもらっ……!!」

黒火竜が吼えた。

闇には闇を。

力には力を。

決戦が始まる。

生きて朝を迎えるのはどちらなのか。

死して闇夜にその存在を絶やすのはどちらなのか。

いずれにせよ、夜明けは近い。

向かい合っていた二者が同時に駆け出す。

レイヴンは黒いパーヘリオンをかざして。

黒火竜は鋭い牙を剥き出して。

一撃の交換は一瞬。

勝ったのはレイヴンだった。

ギリギリで身を捻り、黒火竜の攻撃を回避しながらもパーヘリオンを振る。

もとより一撃だけで仕留めようなどとは思っていない。

避けることを優先して多少、攻撃が軽くなっても致し方ない。

だが、その一撃を受けた黒火竜は叫んだ。

猛る咆哮ではない。

悲鳴に近いそれは雪山に響き渡る。

「どうだ？ さっきまでとはワケが違うだろう！？」

黒火竜は唸りながら振り返った。

左翼の下に刻まれた傷はさほど深いものではなかったが、黒火竜は明らかに苦しんでいる。

レイヴンがパーヘリオンを振るった。

黒い残像が暗闇の中でも目立つほどに尾を曳く。

「属性、『滅龍』。龍殺しの実の成分を含んだ一刃は貴様にとって脅威となる」

黒火竜は応えず、第二撃。

今度はさらに速い。

レイヴンは横っ飛びで回避。

空振りした黒火竜が速度を殺す隙に、ポーチから閃光玉を三つ取り出した。

そして黒火竜が振り返った瞬間、全てを投げつける。

刹那、黒火竜とレイヴンとの間で眩い光が弾けた。

しかし構わず黒火竜は第三撃に移行。

閃光を突き抜けた。

が、そこにレイヴンはいない。

「こつちだよ、阿呆」

背後から聞こえた声に、黒火竜は慌てて振り返るが、もう遅い。振るわれた黒刃によって尻尾が中程で寸断された。

斬られた尻尾が宙を舞う。

またしても黒火竜は苦悶で絶叫。

それでも、さらに追撃をかけようとするレイヴンにブレスを三連射した。

ブレスというよりビームといった感じが。

グラビモスの熱線を短く切ったかのような細いビームだ。

レイヴンは弾道を予測し、全弾回避。

牽制目的で吐いたブレスの精度は低く、避けるのは容易だ。

今回は水平発射で、全て空に消えていったので滑落した時のような大惨事にはならず済んだ。

パーヘリオンを肩に担ぎなおして疾走。

対する黒火竜は巨翼を打って空に飛び上がった。

(来るか……！？)

距離約20m。

(間に合え……!)

足を速める。

3m程上空で黒火竜がブレスの発射動作に入った。

(ホントはこんな使い方しちゃうずいんだが……仕方あるまい!)
まさにブレスを放とうとしたその瞬間、レイヴンは両手で肩に担いでいたモノを投げつけた。

粉雪の中を長大な黒刃が飛ぶ。

黒火竜は驚き、思わずブレスの発射動作を中止。

投げられたパーヘリオンはくるくると回転しながら……

つつ!……!!

黒火竜が絶叫しながら墜落した。

左翼に突き刺さったパーヘリオンと共に。

「よしっ!……!」

もがく黒火竜の翼からパーヘリオンを素早く引き抜き、離脱。

そのまま背後から追撃しようとした刹那。

「……………!?!」

横たわったまま身を捻って、こちらを向いた黒火竜の口から光が放たれた。

まっすぐ、レイヴンに向かって。

ブレスの発射を、黒火竜は諦めていなかった。

「南無三……………!」

咄嗟にパーヘリオンの刃をを眼前に構え、盾とする。

着弾。

パーヘリオンに防がれたブレスが爆発を起こした。

凄まじい灼熱と衝撃がパーヘリオン、そしてレイヴンを襲う。

目が眩むような閃光と燃えるような高温を感じた直後、目の前で巻き起こった爆風に吹っ飛ばされた。

「ぐ……………!?!」

空中で体勢を立て直すような余裕は無い。

15、6 mは吹っ飛んだ後、受身も取れずに雪の上に転がった。

少し遅れてパーヘリオンが重い音をたてて同じく地面に転がった。

「……痛つてえ……くそっ……」

頭の中が揺れている。

なんとか立ち上がり、転がっていたパーヘリオンを掴んだ。

ブレスを受けたせいで刃が赤熱しているものの、折れてはいない。

「……また下に落とされるよりかは……ましか」

体のあちこちに激痛が走る。

それでもパーヘリオンを構えなければならない。

黒火竜は立ち上がって突進態勢に入っているからだ。

まだ終わってはいない。

『レイヴンがハンターになるなんて……私は心配だわ』

『いいんじゃないか？ レイヴンには強い男になってもらいたいものだ』

『まあ、あなたがそう言うなら反対しませんけど……』

『やった〜！！ ボク、ティディエンで一番強くなるんだから！！』

『でも独学でやるってというのは無理があるからなあ……』

『だったらヴェアスターさんの所はどうかしら？ あの方なら……』

『ヴェアスターさん？』

『そうか、レイヴンは会ったことなかったな。父さんの友人でな、クレイルという北の辺境の村に住んでいるんだ。……クレイルか、少し遠すぎるな……』

『じゃあしばらくあなたが付いて教えてあげたら？』

『父さんもハンターなの？』

『いやいや……リリアの飛竜研究所に勤めていたことがあるだけさ。そうだな、初歩的なことなら教えてやれるし……』

『じゃあ早く行こうよ〜！！』

『ははは……まずは装備を揃えなきゃ』

『じゃあ一緒に見に行きましょうか？』

「早く早く〜！〜！」

「はあッ！〜！」

渾身の力でパーヘリオンを振るう。

肩を斬られた黒火竜が吼えた。

襲い掛かる牙を防ぎながら後退。

横ステップで、放たれたブレスを回避。

もう一度間合いを詰める。

次は下段からの一撃。

狙うは下顎。

黒火竜は羽ばたいて間合いを取る。

トリガープル。

黒刃に『硬化』の挿薬子が叩き込まれ、さらなる威力が宿る。

黒火竜が着地したのを確認して助走開始。

黒火竜も突進。

どちらも怯まない。

『モドリ玉は持ったか?』

「うん、大丈夫」

『あんまり無茶しちゃダメよ。砂漠は暑いんだから水分補給をマメにしないと……』

「分かってるよ母さん。クーラードリンクも持った」

『もうレイヴンと一緒にに行けなくなっちゃったなあ』

「父さんは家でゆっくり休んでよ。まだ腰痛いんでしょ?」

『もう歳だからなあ……』

『日頃の運動不足が祟ったのよ』

『むう……』

「じゃあ僕はもう行くね。お昼には帰るから」

『気をつけるのよ。危なくなったらアイルーに……』

「分かってるって……!」

『父さんの分まで頑張ってこいよ……!』

「うん、いってきまーす……!」

「はあああッ！！！」

横を抜けるのではなく、地を蹴って跳び上がった。

突進態勢で姿勢を低くしていた黒火竜の背に飛び乗る。

雪の地面から一転して、灼熱の大地だ。

呻く黒火竜の首の後ろをパーヘリオンで思い切り斬りつける。

刃を黒火竜に刺したまま、尻尾の根元まで一気に駆け抜けた。

熱気が、開かれていく傷口から熱気が迸るのを肌で感じる。

背から飛び下りた。

振り返る。

そのまま倒れている姿を、ほんの少しだが期待した。

甘かった。

黒火竜が寸断された尾を振りながらゆっくりと振り返る。

地を揺るがす轟咆一発。

それに呼応して、今までに斬られてできた傷口から、血ではなく炎が噴き出した。

口の中にまで噴き出した炎は、発炎能力を制御する器官の損傷を表す。

あるいは自ら制御を解いたのか。

眩い光を纏う漆黒の火竜。

再び身を屈める。

「……………化け物が……！」

連続でトリガーを引く。

全弾発火。

「あああああああつっ！！！！！」

咆声。

パーヘリオンを振りかぶって突進。

燃え盛る黒火竜も同時に突進開始。

縮まる距離。

恐怖や逡巡など微塵も無い。

漆黒の衝風が復讐を煽り、後押しする。

記憶の束縛から解かれるための戦い。

最後の、一撃。

白み始めた空の、その先に進むことができるのは一人だけ。

暗い、暗い夜が明ける。

黒刃の一閃。

すれ違い様の一撃は黒火竜の胸部の厚い甲殻を易々と斬り裂き、胸から腹までを一息に斬り去った。

闇色の陽炎を突き抜ける。

炎を纏う飛竜と“漆黒の衝風”。

二者は背中合わせの格好で静止した。

時が止まる。

粉雪が双方の間を音もなく舞い落ちる。

やがて、崩れたのは黒火竜だった。

雪の地にその身を重々しく横たえた黒き災厄は、やがて自らの炎に包まれていく。

灼熱の最期。

悔しげな、悲しげな弱弱しい咆哮が炎の中から発せられる。

夜明けの雪山を震わせ、空に響き渡る悪夢の断末魔。

レイヴンはゆっくりと振り返った。

果てゆく黒火竜の向こう、眩しい朝陽が昇る。

溢れる光の下、レイヴンはパーヘリオンを地に突き刺した。

雪はいつのまにか止み、蒼白い月は西の空に消えていく。

全てを為し終え、黒火竜の最期の炎を映すレイヴンの目は悲しげではあるが、憎しみは消え去っていた。

炎が絶えるまで看取ってやろう、そう思ってパーヘリオンの柄から手を離れた。

目を閉じる。

悪夢を見続け闇を彷徨っていた瞳に、暁の希望の光は眩し過ぎた。

油断をしたわけではなかった。

敵は目の前で息絶えたのだから、安心していたのは確かだが。

しかし敵は黒火竜だけではなかった。

目を閉じたレイヴンの体に衝撃が駆け抜ける。

そう、痛みというよりは衝撃だ。

目を開き、景色を見る。

黒火竜の亡骸は燃え続けている。

それ以外に映る物は無い。

振り返った。

ゆっくり。

少し離れた所に誰かがいる。

シエルクでも、ヴェアスターでもない。

あれは……

「……バックス？」

喋ると、腹から何かがこみ上げてきて、むせた。

白い雪に赤い飛沫が踊る。

バックスが何かを構えていた。

……ライフル？

「間に合ってよかったよ、レイヴン」

そうか、撃たれたのか。

……何故？

「どうして、ここに……」

「君を処分するため。他にあるかい？」

「……わけが……分からないな」

「察しが悪いな、レイヴン。僕は飛竜改造機関の構成員の一人」

理解できない。

したくない。

「交配ナンバー0705の個体、パーソナルネーム『カーラー』が研究所から脱走した。13年前の話だ」

ああ、あの資料に書いてあった通りだ。

「行方不明になっていたカーラーは数日の後、軍を動員した捕獲作戦が決行され、捕獲された」

……え？

「しかし、カーラーはもう一度解き放たれた。何故だか分かるかい？」

もう一度、解き放たれた？

「カーラーは自然界で生きるうちに、機関が想定していたよりも遙かに優れた戦闘能力を獲得していたんだ。自然の生態系の中に組み込まなければ、飛竜は本来の能力を發揮できないことを機関は気付いた」

……だから？

「カーラーは再び自然界に帰され、ティディエンを襲った。結果は機関の満足しえるものだった。生存者が一人いたことだけが残念だったが」

……なんだと？

「……だがその後、カーラーは機関の制御を離れ見境無く暴れ始めた。そこら中の人里や飛竜が襲われ……隠蔽には苦労したらしい」

……おい。

「その内に、カーラーを処分する計画が立てられた。だが軍隊が動けば表沙汰になりやすい。しかしハンターを使えば我々が手を汚す必要も無い。それで選ばれたのが君だ。カーラーに並々ならぬ憎しみを抱き、実際にカーラーに復讐するために動いていた君が」

俺は、選ばれた？

「そして僕の出番だ。ドンドルマで君を見つけ出し、フルスでカーラーに対抗する力を、パーヘリオンを与えた。そしてシュリフトトウルムで資料を手に入れるのを裏で手配し……分かったかい？ 僕が援助していたのはレイヴン、君ではなく、君に託されていた計画。君は、君が知らないうちに我々の手中で踊っていたんだ」

そんな……

「そして今。カーラーを処分し終えた君に既に利用価値は無い。悪いけど、機関の存在を知った者は生かしてはおけない。分かったかい？」

「待て……」

「なんだい？」

「まさかシエルクとヴェアスターも……」

「彼らは想定外だったとはいえ、機関の存在を知った者達だ。ヴェアスターは僕がさつき始末した。シエルクには回復薬と言って毒薬を渡しておいた。彼女は楽に死ねたはずだよ」

「……貴様!!」

心の底から新たな憎悪が湧きあがる。

機関は災厄を生み出しただけでなかった。

それを野放しにしたのだ。

そして、自分の愛する者達までも奪っていった。

暗い悪夢を抜けた先の真実は明るなものではなかった。

待っていたのは、真の敵だった。

かつての友は、新たな仇になった。

殺意が、レイヴンの手を動かした。

再び、パーヘリオンを掴む。

「おっと……妙な気は起こさないほうがいい。この距離ならライフルが勝ることくらい分かるだろう？」

ボックスがライフルを構えなおす。

レイヴンの頬を涙が伝う。

「師匠……育ててくれてありがとう……」

「……聞いているのか？レイヴン？」

「シエルク……守ってやれなくてごめん……お前だけは失いたくなかったのに……」

「……悪いねレイヴン。さらばだ、“漆黒の衝風”！！」

ボックスが引き金を引く。

弾丸が、正確に左胸に飛んだ。

が。

「……………」

地から引き抜かれたパーヘリオンが高速で振られた。

黒い残像は鋭い金属音をたててライフル弾を弾く。

超人的な速さ。

「……なに!?!」

ボックスが弾を込め直すその隙に、レイヴンは動いていた。

「……!!!!!!」

一瞬で肉迫。

振り上げられた黒刃が、ボックスの左肩から右下腹までを袈裟切りに裂いた。

ライフルが半ばで切断される。

「貴様も、この地で眠れっ!!」

返す一撃で首の頸動脈が断たれた。

ボックスの目は恐怖に見開かれたまま、後ろに倒れこむ。

白雪に血が散り、鮮やかな色彩を際立たせた。

返り血を浴びたレイヴンはパーヘリオンを取り落とす。

雪の上に転がったパーヘリオンはいつの間にか属性を失っており、鏡面のように磨かれた刃は夜明けの空を映していた。

レイヴンはただ立ち尽くした。

顔についた血を拭くこともしない。

……最愛の者達は失われた。

信じていた者には裏切られた。

復讐を果たしたレイヴンには、もう何も残っていなかった。

傷は治るばかりか、深く、大きくこじ開けられたのだ。

「なあ、シエルク……俺は……もう、独りは嫌だ……」

涙が溢れた。

子供のように泣き叫びたくなる。

愛する者は、もうこの世にはいない。

頼れる者は、もうこの世にはいない。

また、独り。

「まじ……独りは……」

『山頂南部の……あれです』

気球の操縦士が雪山の一地点を指差した。

山頂より10mほど低い平地に、煙を吐く黒い塊が見える。

骨らしきものが幾つか見えるが、原形はとどめていない。

おそらく、かなりの高温で焼かれたのだろう。

『降下します』

気球はゆっくりと平地に降下した。

気球から降りて雪上に立ったグローリアは空を仰ぐ。

雲一つ無い午前の晴天。

しかし黒火竜はこの空を見ることは無かっただろう。

「あれは……」

少し離れた所に人が倒れている。

死体だ。

「ボックス＝コンツェラルト！？……しくじったか！？」

気球の乗組員が死体に気付き、駆け寄る。

グローリアは焦った。

慌てて辺りを見回す。

あった。

雪に散る別の血痕。

おそらくレイヴンのモノ。

それは足跡と一緒に一方向に点々と連なっている。

辿っていくと、平地の縁で途切れていた。

「息絶えたか……生き延びたか……」

この平地は斜面の崩落で形成されたものらしく、その下はかなり急な斜面だ。

その斜面には今、不自然な滑落跡がある。

考えられる可能性としては、ここから滑り降りたのだろう。

「レイヴン＝ウォルクの死体は見当たりません」

気球の乗組員が報告する。

「……とにかく、黒火竜の死体の処理を優先しなさい。一つまみの灰も残してはなりません」

「はっ」

「それと……それが終了次第、この滑落跡を追いなさい。レイヴンが逃亡したとしたらここから降りたはず。……あと、他の二人は？」

「ヴェアスター」マーテンは南西の麓に、シエルク」エイタワーズはキャンプのテントの中で死亡していました」

「運び出して丁重に葬ってやりなさい。偶然とはいえ災厄に巻き込まれて死ぬことになった被害者なのだから……」

「……はい」

乗組員が去った後、グローリアは呟いた。

「偶然、か……」

黒火竜の燃え滓を見る。

そして敵討ちを果たした彼を想った。

「レイヴン、あなたにとっては偶然ではなかったのかもしれませんがね。せつかく作った大切な仲間だったのだから……」

再び滑落跡を見る。

『血痕の無い』滑落跡を。

「……いいでしょう、見逃します。書庫から持ち出した資料の複写も好きになさい。私は目的を果たし、これ以上関わることは無いのだから」

そう言って運び出されるバックスの死体を一瞥し、気球に戻っていった。

……一カ月後、レイヴン・ウォルクの搜索は打ち切られ、ギルドは死亡と判断した。

あれから半年後、王都ヴェルドは騒然となっていた。

問題は、街中に撒かれたあるビラだ。

『王立の非合法飛竜改造機関がある』

そんな題名が冠されたこのビラには、機関の実態が事細かに記されていた。

ティディエン事件の真相、フルスの巨大水竜、人命や生命を軽視した実験課程など。

このビラを見た国王や、機関に関連する官僚達は慌てて関連施設や資料、改造飛竜を抹消する羽目になった。

王都や近郊都市での隠蔽工作は迅速に進んだせいで、他国や王国民によって結成された調査団は何ら証拠を発見することはできなかったが、遠方への伝達が遅れた結果、地方都市での作業は間に合わず、実情が次々と明らかになった。

それは他国との協約違反だけで済まされる問題ではなかったのだ。

王宮前の広場に押し寄せた民衆を前に、計画の指導者たる国王は為す術無く立ち尽くした。

グローリアは紅茶を口に含み、カップを置いた。

午後の暖かな光が窓から差し込んでいる。

自室では今、調査団による調査が行われていた。

無論、処分済みの記録資料は何処にも見付からず、それはシュリフトトウルムでも同じだろう。

机を挟んで向かい合って座る調査員が重ねて尋ねた。

「本当にこの計画には関わっていないんですね？」

「勿論。私が王の廷臣の一人でギルドでの役職も有しているからと
いって、無闇やたらに疑うのはどうかと」

「いえ、そういうわけでは……」

機関のメンバーリストは王都内の本部施設にしかなかった。

それは真っ先に処分されたはずだ。

機関内で自分の存在を知る者が他の地方都市の末端メンバーの中にいるとは到底思えない。

「それにむしろ私は被害者です。フルスは脱走した巨大水竜に襲撃され、配下のハンターを何人も失っているのですから……」

「……………」

グローリアは立ち上がって調査員に背を向け、窓の外を見た。

シュリフトウルムの8本の尖塔が見える。

そしてその向こうには幾重にも連なる雪山が。

(レイヴン……あなたを始末し損ねたことで結局、機関は世に知れてしまった)

「どうしました？」

背後からの声はグローリアの耳に入らなかった。

(…………でも、それはそれで悪くなかったのかもしれない。…………シエルクとヴェアスターには悪かったけれど…………)

調査員はグローリアの機嫌を損なったと思ったらしく、部下を連れて部屋を出て行った。

静けさが戻る。

と、窓から一陣の強い風が吹き抜けた。

強い、強い風が。

束ねた白髪が揺れる。

グローリアは吹き込む強風に、目を閉じもせずと言った。

「……あなたの名は決して忘れることはないでしょう。フルス最強のハンター、“漆黒の衝風”レイヴン＝ウォルク」

黒衣のレイヴンは背に大剣、右手に花束を携えて森の中を歩いていた。

一人。

常緑樹が生い茂り、様々な生き物が棲む豊かな森。

木々の葉の隙間からこぼれる日差しが下草を育んでいる。

暫く歩くと森を抜けた。

芝生が茂る、切り立った崖の上。

突端まで歩くと歩みを止めた。

終着点。

無論、その先に道は無い。

レイヴンはパーヘリオンを背から抜き、逆手に握り直して地に突き刺した。

長大な大剣だ。

垂直には立てられず、斜めに突き立てる。

そして左手でおもむろに懐を探り、一枚の紙を取り出した。

『臣議会、国王の廃位を議決』

『ギルドも計画に関与の可能性』

『飛竜改造機関、十年以上前から存在か』

全ての結末を記す号外新聞を爽やかな初夏の風に流した。

ふわふわと風に転がされながら、晴れ渡った空に消えていく。

それを見送り、持っていた花束を足元に置いた。

黒衣の裾をはためかせる風は、花束を飛ばすほどは強くない。

ふと空を仰いだ。

涼やかな群青と漂泊する純白。

いかにも空らしい空といったところか。

しかしレイヴンは晴れやかな気分にはなれない。

悪夢が醒めた世界に待っていたのは現実の絶望。

復讐の代償とするには、あまりに大き過ぎる。

レイヴンにはもう、新たな絶望に抗う力は残されていなかった。

だから、ここにいる。

この世界に生き続ける拠り所は何処にも無い。

目的も、価値も、意味も、居場所さえも見出せないのだ。

一步、崖から踏み出せば少なくとも絶望と悲しみを味わう苦しみからは解放される。

目を閉じた。

瞼の向こうから染み込んでくる光とも、髪を揺らす風ともお別れだ。

惜しくは、ない。

「……………今、行くからな」

涼風が旅立ちを促すかのように、追い風が変わる。

それに身を委ね、体を前に傾げようとしたその時。

「……………」

風に乗って声が聞こえてきた。

子供か、女か。

悲鳴。

ゆっくりと目を開けた。

続いて聞こえてきたのは鳴き声だ。

独特の、甲高い鳴き声。

ランポスのような小型鳥竜種や、まして野鳥の鳴き声ではない。

もっと巨大な体を持つ……例えば飛竜。

しばし、間。

レイヴンは一瞬の逡巡の後、右手を伸ばした。

パーヘリオン。

掴み、地から引き抜いた。

そして黒衣を翻して振り返り、歩き出す。

眼前に広がる森。

嘆息し、一言。

「……自分の命くらい、自分で守れよ」

パーヘリオンを軽々と肩に担いで立ち止まり、一度だけ振り返った。

晴れ渡る空、流れる雲、瑞々しい芝生。

そして……

「……なあ？ シェルク？」

小さく笑い、森に向き直る。

次の瞬間には一歩目から全力疾走。

黒衣と大剣が森に消えた。

後には花束だけが残される。

風に吹かれ、花びらが幾枚か舞った。

真っ赤な、真紅の花びら。

それらは黒衣を見送るようにしばらく宙に遊ぶと、やがて風に乗って飛んでいく。

どこか、追うことはできない所へ。

決して、手の届かぬ何処かへ。

" F i n e "

作者跋文

え、終わりました。

とりあえず、鬱なバッドエンドでごめんなさい。

最後にレイヴンが逝かなかっただけマシ。(え

モンハン小説を書くとき、まず最初にメインイメージとして考えたのは黒火竜でした。

ちなみに読み方は「こっかりゅう」です(たしかシユリフトウルムでのシエルクの台詞にありました)。

なにか普通とは違うモンスターか飛竜を物語の根幹として置きたいと思いいろいろ考えた結果、出てきたのがモンハンの象徴的存在でもあるリオレウスでした。

それもただの亜種ではなく、何かしらダークで人為的な裏を持つ背景にしたかったんですね。

それで、『人工の亜種』である黒いリオレウス、黒火竜が誕生しました。

次に世界観の設定です。

既存の街であるドンドルマやミナガルデを舞台にしようと思いましたが、作者自身、モンハンは（執筆当時）ポータブルとポータブル2ndしか持っていないし、公式の細かい世界観はあまり詳しく知らなかったので却下。

次にココット村やポツケ村を舞台にする案を考えました。

当初はこれを採用するつもりで設定の骨子を作っていました。

『ハンターのいなくなった村の鍛冶屋の要請で村に訪れる途中、黒火竜を目撃し、その姿を追うようになった』

といった感じ。

ちなみにこの鍛冶屋が後のボックスです。

でも平和で小さく、牧歌的な雰囲気のある村を舞台にすると黒火竜のダークなイメージが空回りな感じになってしまっ気がしました。

延々とその疑問に捕らわれて、粗筋が書けなくなり結局ボツ。

そして最終的に考えついたのはオリジナルの街を作ってしまうことでした。

街は大きく、発展していて、何か地理的特徴を作りたい。

誕生した『フルス』にはノルスデモン川を中央に流し、南北を4つの橋で結びました。

商業が発展し、ハンター以外にも日々たくさんの人々が集まる街。

ちなみにフルスはFlussと書き、ドイツ語で『川』の意味です。

街の中心地には象徴たるシュリフトウルム(Schriifturm)独語で『文字の塔』(王立図書館の8本の尖塔群(当初、これは大聖堂とするつもりでした)がそびえ、周囲を堅固な壁と門で囲まれた石造都市)。

作中には半分も出てきてないですが、全部で13の地区に分かれています(フルス・イントロダクション参考)。

ホントはもっというんな地区を出したかったんですが、結局出せませんでした……

一応、西シュレイド王国内の都市という設定にしております。

次に、登場人物。

レイヴン=ウォルクと機械大剣のセットは一番最初に考案しました。

ちなみにRavenはワタリガラスのことで、作者のハンネでもあります。

WorcはCrow(ハシブトカラスなどの小型のカラス)の逆さ読みです。

命名で一番苦労したのはパーヘリオンで、『幻日』という意味です。

最初は『ランツクネヒト』という、中世ドイツの傭兵部隊（両手剣
Ⅱ大剣を使用したことで有名）の名前を拝借しようとしたが、
なんか長いし覚えにくそうだったので変更。

だけどせっかくなので使おうと思い、フルス南岸のレイヴン達が住
む地区の名前に残しました。

レイヴンの年齢設定は26歳ですが、あまり年齢の高さを活かして
きてないです。

これは他のキャラについても言えますが、今回の失敗点の一つです。

次にバックスを考えました。

作中ではパーヘリオンを製作したり、レイヴンのサポートキャラと
しての役割を持っていますが、最後には本性を現します。

…もともとは良いキャラとして考えてたんですが（笑）

彼はレイヴンとほぼ同い年と考えると結構です。

作者脳内設定では、元々は王室お抱えの鍛冶師であり、黒火竜処分
計画において機関に入りました。

シエルク。

Shellc = Atawords はアナグラムで、並べ替えると sc
arlet shadow (真紅の影) という言葉になります。

実は最初期の構想では、シエルクが機関の人間であり、最後にレイ
ヴンやバックスを暗殺して終わるといふシナリオでした (結局バツ
ドエンドかよ)。

アナグラムによる『真紅の影』もそれをイメージして考えたもので
す。

でも結局はその役目はバックスに回され、シエルクは良キャラとし
て終わりました。

いつもですが、女性キャラは書いてると愛着湧くんです (笑)

なんか悪者にしたくなって……

グローリア。

フルネームは Gloria = Surams = Geefiat.

Gloria は『栄光の賛歌、後光』という意味 (普通に女性名と
しても使われます) で、Geefiat は複合語で『神命』です。

この人のイメージは構想から一貫して変わりませんでしたね。

フルスのギルドマスターで、畏怖される存在。

最後には資料を処分して、逮捕から逃れるという「一人勝ち」な構図になっちゃいました。

(ごめんなさい、最初にこのあとがき書いた時にヴェアスターの説
明忘れてました。なのでこの項は後日追加です)

ヴェアスター。

フルネームはヴェアスター＝マーテン。

V e a s t a r = M a r t e n。

これもアナグラムだったはずなのですが、設定資料が紛失してしま
っているので分かんなくなってしまいました(ヲイ

たしか「老兵」みたいな単語の組み換えだった気がします

後日判明。 r a v e n m a s t e r (レイヴンの師匠) のアナ
グラムに、声調を整えるための a と t を足した物でした。全然老兵
じゃなかったw すまん、ヴェアスター。

実は最初期の構想では存在しないキャラでしたが、ノリで登場(笑)
物語中盤以降に出てきて、最後まで出まくりですね。

作中でレイヴンがチラリと言ったように、レイヴンの父親の旧友で、
若いころは古生物書士隊にいました。

最も説教くさい人物（笑）

あとは……………

セシリアかな？

フルスの集会所の受付嬢で二回ほど登場しましたが、覚えてますか？（笑）

一度目は、シエルクが水竜討伐クエスト受注をグローリアに止められた時。

二度目は、巨大水竜がフルスを襲った時です。

……………おそらく誰も覚えてませんね（笑）

シエルク関係でもうちょっと出してあげればよかったと後悔中。

名前には特に捻りはありません。

サイモン&ガーファンクルの「いとしのセシリア」という曲からです。

作品全体では、もうちょっとスケールのデカい作品にしたかったと思う反面、このくらいで収めたい方がいいのかなとも思います。

モンハンの戦闘描写はやっぱり難しかったです。

飛竜の動作はゲーム中でも見られる動きを取り入れましたが、ハンター側はほとんど自分の動かしたいように動かした感じですよ。

トラップ系はイマイチ想像しづらかった（どのくらいの大きさなのか、どのようにして作動するのか）ので、今回は意識的に使いませんでした。

でもなんだかんだ言って一番難しかったのは、心情描写ですね。

心情描写はピタリとくる表現じゃなきゃ伝わらないので難しいです。

あと、途中から一文一文がちょっと長くなったのにお気づきでしょうか。

実はシエルクが巨大水竜を討伐する第22話からはパソコンで書いてます。

途中で携帯を機種変したのですが、新しい携帯は動作が遅い遅い……

とてもじゃないけど小説なんて書けないので、仕方なくタイピングが不得意なパソコンで書いています。

これより前の作品は、携帯で一話分を書いてメールでGREEに投稿しました。

さて、最後まで読んでいただいた方、本当にありがとうございました。

た。

よければ作品の感想をいただければ、作者としてはとても励みになります。

もし興味があればGREEにある他の作品も読んでみてください。

MHP3rdを舞台にしたこの作品の続編も執筆中です。

では、またお会いできるのを楽しみにしております。

L i k i n P a r k / L E A V E O U T A L L T H E R E
S T を聴きながら。

2010年 4月～5月 全編加筆修正

2011年 2月11日 「小説家になろう」に全編転載

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8136q/>

闇色の陽炎

2011年2月13日04時52分発行